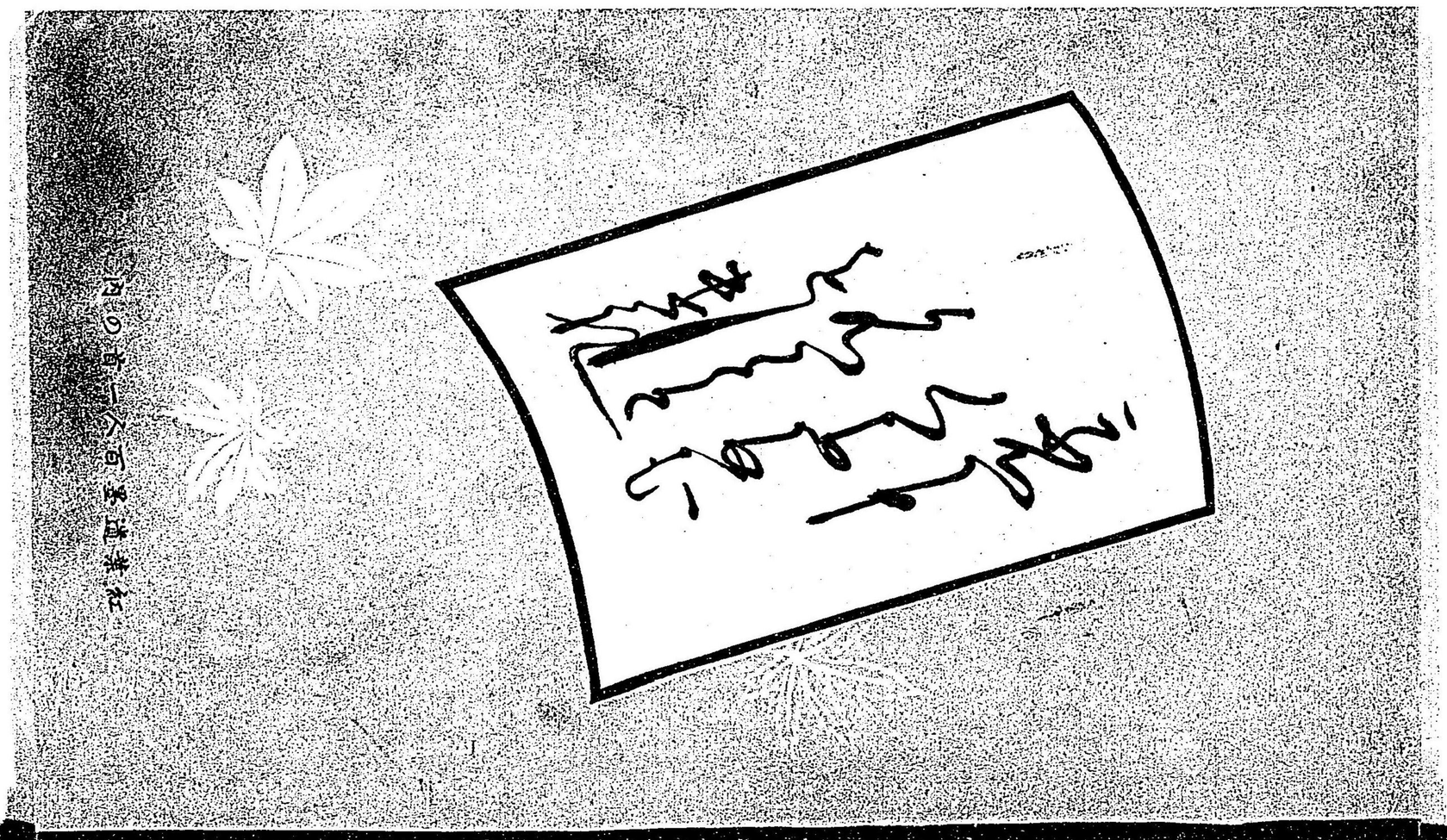
ㅋ4M24 78-88

明治文豪傳之內

屋敷奥

孫寅編輯局編纂

朝海
40 9 19
交內



幼時の尼崎紅葉氏

人亡宋崎尼

TEIKOKU
TOSHOKWAN
TOKYO

氏産夏崎尼

TEIKOKU
TOSHOKWAN
TOKYO

藤枝子　　生駒子

TEIKOKU
TOSHOKWAN
TOKYO

TEIKOKU
TOSHOKWAN
TOKYO

明治文豪傳を出すにつきて

上下二千年の間、文藝の昌なること、わが明治の如きは、實にその匹類を見ざるところ、之れをかの英の處女王朝、伊のルネッサンス時代に較照して、尙且つ讓るところなきを見る。之れを史して傳ふるもの、後世必らずその人僥からむといへども、昨の事實を今に傳ふる新聞紙にして尙且つ多少の歪辷あり、況んや文藝の士は社會活動の圈外に立つが故に、その個人の云爲や、團體の行動や、表面潮流以外の暗流底流、さてはその眉目手足、行住座臥や、誰か之れが眞を語り傳へむ。今にして明治文學家傳を編す、あへて太早とはいふべからず、且つや之れを年代史的に編するよりは、個々の人を捉へ來つて、之れが故舊親

戚にその生前のこと一一を叩き、細かに記し、細かに評隲するかた、貧かに興味多きをおもふ、舊盟逝いて、知親ことく去るとき、時の頽敗のすべてを堙滅するを奈何。われ等は此の急務の自覺の上に立ちて左の順序を追ふて、出來得べきだけ細かに、出來得べきだけ興味饒く之れを編せんとす。明治文藝に心ある人、願くは瀏覽をたまへ。

第一編　尾崎紅葉
第二編　高山林二郎

序

明治文學史てふ圖線の間に、尾崎紅葉の四文字が、果して幾何量の延長を取るべきかは、今にして容易く知り得べからざる、而して知るに最も興味ある疑問也。その績を分つべきものには、山田氏、坪内氏、幸田氏、二葉亭氏、森氏、猶ほその外にも多々あるべしと雖、もし彼れ微りせば、わが文壇は――分けて言はゞわが文章界は――いかばかり荒寥不毛なる原人的風光のまゝに殘りたりけむ。されば、かゝる恩人の爲めに一大麟閣を基かんば、時代を同うせる子の務めなるべくして、而して世間いまだ斯の如きものあるを見ず、わが此の小冊子の企つるところは、素よりかくの如き大業に擬するに足らず、たゞ〳〵後世史家の明治文藝史を編まんときの、一片の礎材となりて止むべき

を期するのみ。其の人去て日なほ久しからず、舊盟現に世に存せり。此の間にありて一方に讃美瞻仰の聲をさゝげながら、他方にあくまて酷寥冷頭の尖刀を下したるもの、上の所期あればに是れ由る。唯だ夫れ吾等見聞猶淺く、識見もとより足らず、故人に對して罪を得る少小ならざるものあらむ。江湖大方の敎正叱責をまつ。

尾りに臨んて卷末に附せる追憶談を、吾等の爲めに快く示話せられし諸先輩の厚情を謹謝す。猶本書首尾を通じて文體の一致を缺きたる嫌ありこは評論に傾ける部分は余主として筆を執り、他の記實は余が學友須藤莊一氏等を煩はしたるものなるが故なり、原稿修整の際、つとめて統一をはかりたれども猶ほ一時に眉目を掃いて黑白の爛班するもの、拙速の才はづるところを知らず、諒焉。聊か故人の靈と故人が舊盟諸卿に對し、責任を明にせん爲めに自序を作る。

驟雨すぎて、水墨の滲雲
空に粘する八月のある日

文祿堂編輯局に於て

松原至文誌す

目次

第一章　時代と紅葉……一
第二章　人としての紅葉……一
上　幼時……一
中　修養時代……三
下　活動時代……一三
第三章　文學者としての紅葉……一
上　その思想……二
一　緒言……一
二　江戸的氣質……一
三　紅葉の見たる江戸的氣質の代表者……四
四　喜劇的才能と悲劇的才能……九
五　紅葉の男女觀……一四
六　形體美と精神美……一五
七　時代精神と紅葉……一七
中　その文章……一八
一　第一期……一八
二　第二期……一九
三　第三期……二三
下　紅葉の文勳……二八
第四章　逸話……一
附　交遊　娯樂等……一
第五章　終焉の記……一
附錄
追憶談……尾崎未亡人
紅葉君の性格に就て……江見水蔭
知られざる逸話……石橋思案
追憶談……廣津柳浪
仝……巖谷小波
仝……德田秋聲
仝……柳川春葉
以上

第一章

時代と紅葉

紅葉句帳

四六版更紗表紙定價七十錢郵税六錢

明治小説界の傑物尾崎紅葉先生時に詩想を俳壇に趨らせらるれば句々皆金玉の佳什となり殆んど小説を讀むが如しとは世の定評あるところ先生歿後一二其句集の出版を見れども皆杜撰極まり遺脱頗る多く是を千古に傳ふるに足るものなし同人星野麥人君遺憾となし日夜聚集に焦慮して今や全部を錄し得たり、文祿堂主人故先生と深交あり此擧を深く悦び射利以外に立ちて資を投じ裝釘用紙製本等に非常に美を極む殊に卷頭に先生日常愛用の印影十數顆と遺筆寫眞版數葉を挿み附錄として俳諧嚼鐵を添付して發售せり、余一本を贈らる是れを手にして麥人氏の熱誠と文祿堂主人の文士に對する禮讓とを悦び擴く世に介して一本を坐右の珍とせられん事を乞ふと爾云

秋聲會にて　菱花生

東京日本橋東仲通　文祿堂書店

（振替貯金口座六六八六）

尾崎紅葉

時代と紅葉

紅葉は明治小説界に取りて忘るべからざる恩人なり。彼の著作の影響するところは、やがて明治小説史の多大の頁を揮塗すべきが故に、紅葉を論ぜんと欲すれば、その時代を語らざるべからず。從つてその時代の小説を胚胎せしその前代の文藝と思潮、更に溯りてはわが邦小説の淵源と發達とを語らざるべからず。少なくとも吾徒が研究的慾望は、此處に到らざれば止むべからず。されどかくの如きを詳説せんは、この小冊子が、企及して而して成功すべき事にあらず。されば吾徒は先づ之れを文明史的の系統の下に、わが邦文藝の思想と形式との變遷を、極めて簡短に縷述し明治幾年に尾崎紅葉を生まざるを得ざりし『タイム』の豫約を明かにせんとす。

先づ我邦小説の淵源を見るに、わが邦に於ては歐洲各國の文藝が、必らずその創草の際に有すべき神話、英雄譚は幾んど是れあらずして、たまたまそれらしきものあるも、夢野鹿、浦島子の物語及び下りては神佛に關する緣起談等二三のものに過ぎず。小説らしきものを見るに到りしは、延暦遷都以後に竹取物語を初めとして、宇津保、伊勢、住吉、濱松、落窪等の物語あり、これとてもその描くところは月卿雲客の私事を多くの結構と空想との上に描き去りたるものにして、悉く王公貴人の戀愛談を套襲せり。小島國民としての傾向には缺くべからざる、眼前の事に悲み、眼前の事に笑ふところ、此の上古の文學に依然として現はれたり。下りて保元平治の亂より鎌倉時代に入るも源平盛衰記、平家物語、判官物語等の史談を除きては、小説として見るべきもの、幾ん

どなく、鳴門中將物語、秋の夜物語等あれども、人生に觸接したるところなし。更に室町時代に入りて、福富、交正、鉢かつぎ等の繪卷草子あれども、言ふに足らず。爾來、德川三百年の太平を見るに到るまて、小說的文藝の產物としては、殆んど空零に歸せるを見ずんばあらず。

由來、藤原、室町よりして德川に到るまての、わが民族的文明は、殆んど印度、支那よりの輸入によりて常に形成せられつゝありしものなるが故に、何れの時代を較するも、殆んど印度、支那の文明の痕跡を見ざるなしと雖も、わが德川の泰平を見るに到りてよりは、やや之れを民族的に調熟したるに近く、此の間の三百年に、素より支那文明の飜譯盛大なるものありしと雖も、而かも日本民族の思想特色を最も多く發揮したるものあるを見ずんばあらず。

德川以前の文藝の對稱は、すべて貴族なりき。德川氏に到りては貴族文學は幾んど痕跡を絕ちぬ。これ國民文明の最もよく發揮せられし所以也。讀者を低級に求め、描寫の對稱を低級に求めたる平民的小說は勃然として起りぬ。德川以前の小說は、かるが故に明治のそれと接觸せる點太だ些しといへども、德川文學はかくの如くにして、事實明治文學の胚胎者となりぬ。德川文學の思想と形式とは明治の文學を研究するものに取りて、苟くも忽かせにすべからず。

德川文學を二期に分つべくんば、初期は即ち元祿にして、後期は即ち文化文政也、元祿の作者は井原西鶴にして、文化文政の作者は山東京傳、曲亭馬琴、式亭三馬、十返舍一九也。井原西鶴の作爲せしところは即ち浮世草紙にして、京傳馬琴のなせるところは、史談傳記及び近松の院本等を合して結構を形成りたるもの所謂讀本なり、三馬一九等の作爲せしところは滑稽本にして、世俗の風を滑稽的に寫實し諷刺したるもの、その他に爲永春水の一派あり、浮世草紙の餘波を享けて、世態人情を描寫したるもの、德川時代の縮圖たるの觀あり。

かくの如く德川時代の作者は幾人にも分れ、作風また幾樣にも分れたりと雖も、專ら明治の小說に影響を加へたるものは、現代の所謂寫實派に近き浮世草紙と、ローマンスに近き讀み本なりき。而してローマンス即ち傳奇體の小說は首として明治二十年以前に復活し、寫實派即ち浮世草紙は二十年以後の小說界に感化を及ぼせりき。殊に西鶴の爲せるところのものは太だ輕々に看過すべからざるものあり。彼の作風は、その後間もなく幾多の摸倣者を生じ、明治二十年の作界にも、『元祿文學の復活』となりて多大の感化を及ぼせり。西鶴の描けるところは、所謂人情の缺片也。長き人生の圓線の一部を寸斷して、之れを白紙に色寫したるの觀あり。西鶴が當時空想的架空的、若くは洒落滑稽以外に、何等の文學なしと思惟したりし間にありて、よく彼の如く實際社會をあくまても實際的に、冷かに、皮肉に觀察して、人情の細微に穿ち入り、その描ける文字の亦、奇警切實なるを得たるもの、寔に異常の現象なりと言はざるべからず。西鶴の描けるところには、かるが故にやゝともすれば人生の暗黑面(ダークサイド)を赤裸々となりて露はすが故に、之れが摸倣につとめて、似而非なるものを作りたる、其磧、自笑、錦江、振鷺亭等の如きに到りては、その流風また祖源西鶴の如く活きたる人生の活描寫を見ずして、却て遊里の痴話、娼婦や閨房やの、見るに堪えざる汚穢せる卑話を傳へて以て足れりとするに到れり。然れども兎にも角にも架空的小說、或は結構的小說を以て小說の極致と思惟せし間に、一西鶴の存在せしは奇蹟と言はざるべからず。

馬琴の作爲せしところは一種の傾向小說也、勸善懲惡を以て本旨となし、此の本旨の下に、變幻出沒、荒唐無稽の事實を結構して、之れを行るに七五調を

以てしたり。馬琴が作の私淑せるところは幾んど支那小說『水滸傳』等にして、あくまでも結構の奇を極めずんばやまず。彼は結構の奇なる即ち小說の巧妙なる極致にして、之れに勸善懲惡の意義を含ましめて世を益するは、小說家の任務なりと心得たりき。こは英國に於ける十八世紀末のローマンスに近きもの、歐洲に於ては傳奇小說に次で寫實派勃興したりきと雖も、わが邦に於ては、西鶴の寫實派、先づ出でて、次で馬琴のローマンス出てたるは一奇なり。

かくの如くにして德川氏の政治は太平に慣れて愈々廢亂し、遂に維新の大革新來り、わが邦空前の大革命は起れり。よろづの事物悉く新しくなりぬ。されど文藝はさまで著しく迅かに起らざりき。

德川氏の末日すでに近かんとして、弘化、嘉永より以降、民心洶々として、文學に親染すべき餘裕を認めず。殊に維新の改革以後十餘個年は、國民の境遇の變化、思想の推移太だしく、到底國民思想を文

字の上に發するの餘裕を存せざりき。この間に起りし小說界の現象は、唯だ僅かに德川氏末期の殘喘を呼吸しつゝあるに過ぎざりし也。作者には鶴亭秀賀假名垣魯文、山々亭有人、柳水亭種清、二代目春水笠亭仙果等ありて、馬琴一流の七五調にあらずんば春水三馬一九等の卑穢なる寫實的文躰の餘脈をやり、脚色の如きも素より讀み本、草雙紙等の臼窠を擺脱せず、勸善懲惡の四字も依然その金條とするところなりき。當時最も流行せしものは假名垣魯文が『西洋膝栗毛』、『胡瓜圖解』等の滑稽ものなりき。何等新らしき處も深きところなくして唯だ駄洒落まぢりの面白さのみを主としたる斯の如き淺薄なる小說の、專ら當時に流行したるを思へば、以て當時の民心が荒廢し疲委して、到底深刻なる眞摯なる文學に接觸し能はざりしかを知るに足らむ。小說界に於てはかくの如く淺膚言ふに足らざるものゝみ一時の流行を縱にして、何等の進捗を見ざりしが如しと雖も、廣義の文學、乃至一般文明の方面に於ては、着々として進歩發達を爲しつゝありしを見る。殊に福澤、中村の二氏の著述と飜譯、中江兆民氏のルッソー等の飜譯、語學も漸次に發達し、皇學の復興、和文の研究等、小說界を外にして廣義の文藝は漸次にその眉目を修整し來りぬ。小說も漸次その作者を加へ來れり。花笠文京、高畠藍泉、染崎延房、條野傳平、古川魁雷、伊東專三、須藤南翠、渡邊義方、宮崎夢柳、小室案外等これ也。これ等は悉く所謂繪入新聞の續きものにして、作者は元より戲作者肌を脫せず、唯だ時好に投ずるものゝみを尊べり。その他に猶ほ多少注目すべきは泰西小說の飜譯にして、時の政論家にして多少の文字もあるものが、政論を遣るの具として筆を弄したる餘業の閑筆也。而かもリットン、スコット、ヂスレクー等の歷史小說に我を取りたるものにして、織田純一郎、關直彥、藤田鳴鶴等の諸氏あり。此等は後森田思軒等の飜譯小說家等に影響を

及ぼせる少なからず。猶ほ下りては柴東海散史の『佳人の奇遇』、末廣鐵腸の『雪中梅』、『花間鶯』矢野龍溪が『經國美談』等の出づるに及んでは、小說界の氣運漸やく動き、たとひ此等の作は依然として政海の波瀾を描きたるものが、馬琴一流の傳奇的結構を弄して、勸善懲惡の意を遇したるに過ぎずと雖も、而かもその間にスコット、リットン等の作者の面影を見るべく、世間のやゝ小說の輕んずべからざるを見るに到れり。

茲に一大變動は起りぬ、曰く坪內逍遙の『小說眞髓』の出てたる是れ也。『小說眞髓』は明治小說也。『小說眞髓』以前に幾多の小說ありきと雖も、皆是れ德川末期の殘肴に堆朶せしに過ぎざりしを、逍遙の『小說眞髓』出づや、一代の風潮此の寫實主義の旗幟の下に集まりぬ。『小說眞髓』は小說論なり。馬琴以來の勸善懲惡の迷朦を打破して、小說は人生の眞事實相を描寫すべきものなりといへる寫實主義を主張

す。かくて小説のいかなるものなるかに驚破せられたる一代の文士又び讀者は茲に新らしく寫實小説を要求し來れり。

逍遙の『小説眞髓』及びその『書生氣質』等によりて小説界の空氣は新らしくなりぬ。その形式文躰等も從來の七五調、乃至は春水三馬等の寫實的の舊套を蟬脱して、新らしく言文一致を要求し來りぬ。茲に於て逍遙が『書生氣質』の缺損を補ふべく現はれたりしものは實に二葉亭四迷氏の『浮雲』也。

かくの如くにして尾崎紅葉の出づべき時は來りぬ『浮雲』の出てたる後、紅葉等の組織せる硯友社はその機關雜誌『我樂多文庫』を發刊しぬ。その牛耳を執りしものは實にわが尾崎紅葉にして、川上眉山、巖谷小波、渡邊乙羽、江見水蔭、石橋思案等なりとす。

かくの如く德川時代より久しく一處に沈滯したりし文學界は、逍遙に到りて一大革新の火柱をたて、

德川時代の殘滓をすべて燒き盡して、茲に新らしきものを築きぬ。先づ寫實主義は來れり。言文一致は來れり。尾崎紅葉がその生涯を通じて寫實主義の下に創作し、その首要なる作物の文躰もまた、言文一致躰の試驗の如くに作られたるものある、實に過然にあらざる也。

若し夫れ紅葉が當時初めて文界の人となりし前後の、國民一般の時代思潮を考ふれば、更に多少の興味を見出さずんばあらず。維新の革新後、國民の思想は幾んど二つに分れぬ。一は餘りに急激に泰西思想を吸入せんとつとめて、幾んど國民的自我を沒せんとせるものと、他は世相の急轉直下にあきたらずして、却て舊を慕ふの情を禁じ能はざるものとこれ也。かくの如くにして初十年は送られ、第二の十年は新らしきもの遂に舊きものを壓倒して、新たに吸入したる英佛獨米等の思想を以て一般の思潮界を洗拭しぬ。殊にその勢の最も激しかりしものは英と佛にして、比較的に實際を重んじて浮沈なる冥想に座せんとするが如きは稀也。かくの如くにして此の間に成長したりしものが尾崎紅葉にして、此の思潮につれて產出せられしものが紅葉の作物也。

從來我が國民の精神思想を支配し來りしものは、印度支那のそれにして、印度的思想は由來高遠幽玄を以てその特色とするが故に、わが輕捷なる國民性と合するところ多からず。又支那の思想にして、その實際を尊ぶところは、多少類似せるを見出さゞるにあらずと雖も、元來、退嬰頑固の支那的思想は敏活にして潑剌、常に向上進歩の念に憧憬つゝあるわが日本民族とは、全然合致すべきものにあらず。然るに維新の大革命ありて以來、さしもに進歩と敏活とを喜ぶ國民は、舊を排して新を求むるに到らざるところなく、剩さへ茲によくわが國民性と一致せる英國の進歩的功利主義の思想を見出し、傍らに佛の輕捷にして感情的なる思想に接觸して、こゝに千有餘年未だあらざりし國民性發揮の時代來り、わが國民思想は愈々進歩的となり、功利的となり、敏活輕捷を尊ぶに到りぬ。再たび繰回さしめよ、かくの如き時代に紅葉は生れたりき。紅葉の作物はかくの如き時代に產出せられたる也。以て時代が紅葉と紅葉の作物に影響せし結果のいかなるものなるかを推定するに難からざらむ。

われはおほらかに紅葉と時代との關係をのべぬ。若し夫れこの時代によりて享けたる紅葉の思想につきては、章を改めて彼が作物を批評するの條りに於て說かむ。

▲まつよひ

吾兄子の來べき宵なり鷄子酒

此俳をおもふに。姿は肌薄の風を怯れず。立膝に火あふぐは懐紙なるべし。さりや櫨子の月は殘粧の頸に寒く。淺草寺の鐘は瘧をおさへて聽くらむ。

（紅葉句帳抄）

第二章　人としての紅葉

紅葉遺墨百人一首

故紅葉山人が書道に堪能なりしことは、世人の熟知せるところなるが或る年の春、畵伯武内桂舟の家にて、歌留多遊びの會屢々催ほされ、席上取らん取られまじと札を引奪ふこと烈しければ、一組の骨牌、もの〻三日と全からず、裂捨てられるが常なるを、山人が見て、是れ無益の費用なりとて、鳥の子の厚紙に、百人一首の下の句を認めて贈りければ、同門の人々其賜を謝し、丈夫に裏打して、此れならば常陸と梅とが奪ひ合ふとも、豈取破れる虞なしとて、本年の春を樂みと待ちけるに、小夜の時雨紅葉を撲つこと急にして、山人は病の爲に躰歿りしかば、桂舟一門の憾み殊に深く、形見にとては殘さじりしを、徒らに昔を偲ぶ種となりしそ口惜けれと、畵伯は之を屏風に仕立て〻永く珍藏するを巖谷小波、石橋思案が見て山人が筆致の餘韻を後世に貽すもの之に如くなしとて、書肆文祿堂と相談の上之れ寫眞木版とし、原形の大さを堅牢の日本紙に印刷して出版せり、有繋に晩年成熟の筆の蹟、雄勁清健にして極めて見事なり、

（二六新報所）

全一冊定價五十錢（郵税四錢）東京日本橋

文祿堂書店

二　人としての紅葉

上　幼時

紅葉山人尾崎德太郎は、慶應三年十二月十六日を以て、芝區中門前町に生る。三歲にして母を亡ひ、四歲の時同區神明町なる母方の祖父母（荒木）の許に引取られ、此處に幼時の生育をなせり。今その當時の事共を記して、天才が幼き面影を偲ばんとす。

△武士に擬れる扮裝　時恰も長州征伐に際したれば江戸よりも度々數多の武士出陣したりしを見真似閧真似て、氏が不斷着と云ふは、表を萠黃縮緬、裾へ金糸の浪と鯉とを縫箔し、脊中に大なる番鴈の羽（氏の定紋）を、之も同じく金糸にて縫箔し、裏を無垢の緋縮緬にしたる陣羽織。それと紺純子の裁着袴なりき。

此陣羽織を着流し、此裁着袴を穿ちたる、一箇可憐の幼武者の天窓は又威勢の好き糸鬢奴。月代を青々と剃り立てゝ、鬢髭のみを取殘し、此れをばぐッと引詰めて結ひたるちよん髷の、長さ一寸許りなる愛らしさ、人形のやうなりしならん。此れも其頃旗本の小倅が主に結びたるものにて、可愛き一人孫の此の扮裝は、云ふまでもなく祖父母の凝つた好みなりき。

△遊戯　武士に擬れる嚴しき扮裝の幼武士も、名乘は矢張り神明前の德ちやんなりしと云ふ。さて德ちやんの遊び事はと云ふに、太鼓を叩き又は山車を引張りまはす等極めて無邪氣なるものなりき。其他竹馬とネッキは大好きにて、紙鳶も嫌ひの方にてはあらざりしと。

因みに曰ふ、今も十軒店などには、時折山車を見かくる事あり。氏が手遊びに用ひたる山車も唯だ形

こそ小さけれ、總て眞物と異ならず、長さ三尺ばかり、人形の大さも轅の長さも此れに適ひ、造は極めて整澤なるものなりき。又以て其の當時の風俗なる江戸時代の遺風を偲ぶに足るべし。

△氣性　晩年の氏には似氣なく、其幼時は極めて臆病なりき。而も又非常に大人しき方にて。角兵衛獅子などの來るを見れば、服裝に似合はず恐れふためきて家へ逃げ歸りしと云ふ。息夏彦の大人しき性にて、犬を見ても恐れ隱るゝ處は、氏の幼時に髣髴なりと或人は談れり。

又た何事にも儿帳面なる性にて、直なるべきものが曲つて居ても、角なるべきものが圓くなつて居ても、其れでは氣に入らざりき。譬へば花の形したる菓子の、その花片の缺けたるもの、其蓋の撓げたるもの其他聊かにても何處かに故障ある時は。「厭」とばかり見向もせず。形の大小には拘はらず、其ものの形が完全無缺ならざる限りは、手にだも觸れざりしとかや。後に氏の文章に於ける凝性は人の熟知する處なるが、早く既に此頃より其性情は現はれ居たるなり。

△五歳より七歳　五歳の頃は近所の子供を集め來りて、「犬も歩けば棒に當る」「鰐の頭も信心から」などゝいろは骨牌の開覺えをば、聲朗らかに讀み上げたりと。氏は後にも原稿を朗讀して同輩を感服させたる事もあり、生來の美音なりしが、此頃よりして骨牌の讀役は德ちやんの一手專賣。

明治六年の七月七日、七歳の時始めて寺子屋に入る。無論まだ學校と云ふものなければ、主に讀書、算術の修業、御師匠樣と云ふのは久我氏なりき。

△新聞ごッこ　幼より機智頓才に富み、天資文才に秀てたる氏は、既に其頃より嶄然儕輩の間に頭角を著し、神童とさへ評せられたる程なりき。されば從つて其言行も、世の常の惡太郎とは異なり、まだ十歳許りの少年の時、寺子屋友達なる近所の質屋の子息を顧問として、自ら記者ともなり、社長ともなり、さては職工、配達人をも兼ねて、半紙二ッ折位の新聞ごッこをなせりと云ふ。然もその頃荒木氏方にて購讀せるが、矢張り半紙二ッ折位の微々たる頃の讀賣新聞なりき。後に堂々と讀賣新聞記者となれる氏と、其頃の小新聞記者とを思合すれば、偶然とは云へ其處に不思議の緣ありしやう覺えらる。

△中學時代　五歳にしていろは骨牌の讀役七歳にして寺子屋に入り、十歳の頃は新聞ごッこに餘念なかりし少年は、十三歳の時、田安御門外の中學に入れり。此處にて二年間の修業後は、芝愛宕下仙臺屋敷なる幕府の儒者、岡鹿門氏に就きて主ら漢籍を學べり。其傍ら近隣の島田某氏が注意を入れて、明治十五年三田英學校に通ふ事とはなりぬ。同校の學友なりし人には鶴田工學博士、磯田文學士などあり。

△蜆汁が恐い　十歳許の頃、或日祖母に連れられて向島へ花見に行ける折、夕食にとて植半に立寄りけるが、先づ膳部には名物の蜆汁、德ちやんは何心なく其蓋を取つて、中を見るに蜆汁なるに一驚を喫し、祖母も顧みて曰く、『向島へ蜆汁を食べに來はしないよ。』と、其後向島へ行かん事を勸むるものあるも、常に頭を振りて應ぜず、其故を問へば『蜆汁が恐い。』

此れに就き思ひ合はせて面白きは、晩年氏の玄關に在りし門生の某が、或る秋の朝の事、朝飯の膳に蜆汁の乘れるを見るや、其儘苦き顏して箸をも付けず終りたるを氏が見て曰ふやう、『何だ蜆汁を食べないのか。』と。門生答へて曰く、『私は蜆汁が大嫌です。』と、乃ち氏は例の惡口して曰く、『何を贅澤云つてやがら、其れは蜆に嫌はれたのだ。』

中修養時代

△明治十七年大學豫備門の試業に登第して研鑽四年此の間既に作意勃々として禁ずる能はず、同志六七人と計りて文友會なるものを起し、氏は「緣山」と、

云ふ號を用ひて、盛んに詩を作り文を作りぬ。「緣山」は生地芝の三緣山に因めるものならん、後の「紅葉」も紅葉山より出づ。

當時氏が得意とせしは香奩體の詩なりき。今左に一二を記せば

黑隄喜春詩

橋東買醉追晴暖。　十里如雲花不斷。
日暮江風堤上途。　落紅輕點美人傘。

吉原竹枝

鐘聲無情離恨多。　綺窓分手泣嬌娥。
竹輿軌々霜堤路。　輕載香閨殘夢過。

其後文友會倒れて凸々會起る。此會員には氏を始め、丸岡、石橋、阿部、小川等五六人ありしが、前の詩文を目的とする會にはあらで、運動遠足を以て主とせり。龜井戸、小金井を初め、諸方に遠足もすれば、時にはボートを漕ぐ、日暮里の花見寺等に集りては、相撲もとれり。氏は當時相撲にも腕推にも

中々の强の者なりき。從つて運動は大好きにて會毎に決して缺席する事はなかりしと云ふ。通常會員十錢なりしも、大會には五十錢。嘗て此連中が鴻ノ臺に至り、一泊して散々大騷ぎしたる事ありき。其時の尾崎緣山の狂詩と云ふもの殘れり。

四面歡聲非楚歌。　虞姬行酒動秋波。
醉來誰學項王暴。　席上少年春季多。

△『我樂多文庫』の發行　明治文學界破天荒の異彩として、世人を驚嘆せしめたる硯友社の結社と共に、『我樂多文庫』は發行せられたり。其第一號の出でたるは、實に明治十八年五月二日、氏が僅かに十九歲の時なりき。

硯友社の起れる動機に就て、氏自ら云へる處によれば、其中學時代同窓の友たりし山田武太郎（美妙）氏と、大學豫備門に於て再び相見ゆるに至れると、一は石橋雨香（思案外史）氏と相識るに至れるとなりと。一時我文壇の全權を掌握したる硯友社の結社も、其初めは唯だ氣紛れの道樂半分、何等眞面目なる抱負とてもあらざりしもの、如し。

明治十八年三月頃にやありけん。神田は三崎座の筋向ひあたり、石野と稱する狹汚き下宿屋の三疊間（氏の宿）に、丸岡、石橋、尾崎、久我、山田、五人の書生の集まりしが、抑もの初まりにて、此れ即ち硯友社の發起人總會なりけり。下宿屋の二階の三疊に、四五人も居れば其の狹さは推して知るべし、北向の窓の下には、小さき机を置きて傍に本箱が三ツ許。其の本箱の蓋などには、詩、俳句、さては狂歌川柳處嫌はず書き付けられ、障子にまで何やら黑々と書かれたり。且つ其處邊には炭斗、古袴、手拭、書籍無法に取散して足の入れ場に困ずる位。固より書生連中の其樣な事に頓着はなく、何れも大胡坐の先刻氏が墓口を揮つて二十錢丈、近所の菓子屋より大福餅を奮發して來れるを、乘せたる盆も無ければ竹の皮を披げたまゝ、各自之を摘みながら談論風發。

斯くの如くにして定められたる處にては、以前の如く作物に制限を措かず、小說、戲文、紀行を初め、都々逸、端唄、俳諧、和歌の何でもござれ主義、凡そ文墨に關する事ならば皆なそれを網羅せんとの方針なりき。

其の機關たる雜誌も、寒貧書生の刊行にする事は思ひもよらねば、毎月一回宛原稿を集めて、氏と山田氏との手許にて淸書し、會員中に廻はして見る事とし、其思ふ處によりて善惡の評も書き入れ、互に奬勵すると云ふ處まで定まり、さて社名は何とすべきか。種々の洒落や惡巫山戲の後、社を「硯友社」、雜誌を『がらくた文庫』、『我樂多』の字は氏の考案によりて當てられたるものなりとぞ。

今「硯友社戲則」と云ふを示さん。

一、戲則は規則の洒落にして、國音驥足に通ず。驥足は笑名抄（これて和名抄とよむのサ）に馬の足とあり、これは初の中こゞ馬の足でも、本社の舞臺で

腕を磨けば、つまり千兩々々といふ價値が出るとは、ハテ深い意味ヲ。

二、本社は男女老少粋不粋、水にすむ船頭、花をうる老爺、生きとしいけるものゝ會員たることを許すなり。但し自惚生酔の御客樣は御入會堅く御斷申上候。

三、本社は毎月一回、我樂多文庫を刊行す。これは賣買禁制の品なれば、錢かねづくてはとんと自由になりませぬ。むかしの名妓によくある奴也。

四、會員は毎月金拾錢を納むべし、と云ふと他人がましいが、矢張り例の京傳流サ。

五、文庫は三門に種類をわけ、第一門を小說とし、心織筆耕と名け、第二門を戲文狂歌俳句新躰詩などゝし、千紫萬紅と名け、第三門を五三桐の飛花落葉(デェブ酒落るノ)と名け、狂句端唄都々逸落語謎とす。どれもこれも、とかく御氣に入るの門なり。

六、おやしきでは不義をきつい御法度とす。本にては燒直しが大の禁物なり。それもコンガリ狐色なら編輯方が方寸の中にあります。

七、第六の戲則を破り、至つて腹の黑裝束が、折々忍びこむときは、編輯方がすかさず曲者まてと引戻しても、當身をくらつて取逃し、ウスドロの鳴物で紙上へあらはるることなきにあらず。方々御油斷めさるな。

右の條々肝に銘じ、掌へかき付、祇めて置くべき者也。

右は云ふまでもなく氏の筆なり。尙我樂多文庫の初號第一頁には、氏の祝文あり。

我樂多文庫御披露

「檄して曰はくヂト大業、久しして參るは、やゝ飽めく、即ち書して以て才子諸君に告げまつる。それ人各樂みあり、隣の壁から燈を盜みて、書讀むも樂みなり、銅臭を弄ぶ守錢奴、一簞の食に事足るとする淸貧家も、亦樂むところなからずやは。傾城の涙に家藏の雨漏を顧みず、あるは二合半の寢酒に布袍打殺して飛んだ罪つくるも、亦罪障のひとつぞかし。されど隣の壁ぬかば尻を喰ふ恐なきにあらず。銅臭きはぢゞむさし。さりとて冷飯は腹こわばりて病や起らむ。家を持たねば傾城の雨漏る處なく、無一文にては寢酒も飲めず。あゝ何とせうどふせうと凝つては思案のいらばこそ、筆の林に閑居して、不善は爲さぬ君子等の、快樂の一派和歌詩文の上品より、小說狂文都々逸の心意氣一切無差別書集め、我樂多文庫の名にしをふ、諸彦も我れも樂多き雜誌を月に編して、而して讀書餘間の憂晴し、噫これ天下無上の快樂、俱にせんとの有志の君達、珠玉を空しく祕めたまはず、賣らん哉〳〵とのたまへば、我も言はん買はんかな〳〵。

明治十八年彌生の末つかた

△小說の初作『我樂多文庫』は寫本九冊まて續きぬ。此間氏は『江島土產貝屏風』と云ふ作を藏せたり。此れ、石橋、池田の二氏と江の島に遊べる時、其の紀行をば一九の膝栗毛風に作れるもの、氏は詩歌文章は此れまてにも多く作れるが、小說躰のものの初作は之なり。此頃氏は也有の『鶉ごろも』、許六の『風俗文選』などを好み、小說としては京傳馬琴ものを斥け、西鶴、近松などを愛讀せり。此の他三馬、焉馬の戲文などを耽讀せり。就中西鶴は其私淑する處にして、珍書を漁つては之れを手寫し、『一代男』『一代女』『五人娘』等皆寫本を藏せりき。

其頃引札類に書く事を得意とせるは、三馬、焉馬の感化なるべし。其最も初めに書ける引札は、開業披露の文也。

小間物開業御披露

花の色移ふ小町紅は。姉さん方の淡化粧によろしく。紅梅餅に彩る細工紅はお坊ちやんのお目覺にかなふ。良品はたゞこの店に限るとて。年來の御ひゐきをうけ。おろし小賣の繁昌は名に高砂の鶴とむれゐる龜井町にて。福島やのあるじにこたび小町紅の名より思つき。肌も衣通となる白粉より。黑かみの艶ます伽羅の油。其外珠玉の根がけはあれど。かけ直なく頭かけ元結の細き利にて賣弘む。種々の金銀簪は風流新形を旨となし。蝶々髷に似合ふ花かんざしの華美あれば。鍋町形にて人柄よき鼈甲の中差に至るまで。すべて安直にて商ひますれば。開業の當日より。斑紋櫛の齒のひまもきらず。おれもかうがい〳〵と。遠近よりのお運びを願ふになん。

開業日　　日本橋區龜井町

九月　　日　　紅屋茂右衞門

當日龜景進上仕候

（八）

右の稿料として、同小間物屋より石鹼三ッを貰ひ、大いに得意がれりとぞ。尙ほ當時氏の意見にては、筆を以て世に立つ覺悟なれば、文字あるものは如何なる書にても讀み、西洋東洋の嫌ひなく、一切に眼を曝して見聞を廣め、作るには小說戲文は云ふまでもなく、辻雪隱に張る引札に至るまで、苟くも人に賴まれたるものは、一心を置めて書いてやると云ふ主義なりしと。されば斯かる引札文の類甚だ多し。

△雅號と書躰　寫本我樂多文庫第一號時代の氏の雅號は、綠山を初めとして、半可通人、素蕩夫、花紅治史、狂文亭などなり。此れ明治十七八年頃まで用ひたるものにて、十八年の終りより十九年に至りて遂に紅葉山人を用ふるに至れり。

明治十八年神田石野の下宿に居たりし頃より、文字を蜀山人に學び、座右常に蜀山人の百人一首をもちりたる狂歌「夕されば門田の稻葉おとづれて櫂兵衛うちなら二合飲まう」とか「目とくちと耳と眉毛のなかりせばはなより外に知る人もなし」など直筆にて版本になれるを携へ、熱心に手習したれば、彼の引札などは非常によく蜀山に似たり。之れ遂に晩年に至るまで氏が書躰となれり。

△「我樂多文庫」の印行　氏は神田の下宿を去り、三四ヶ月間駿河臺の坊城邸内に山田美妙氏と同居せり。同好が二人揃へる事とて、朝より夕まで文章話、文學論、三馬が何麼とか、也有が恁麼とか、狂歌は天明に限るゝ云へば近松は此處に妙ありと應ず。當時集り來る小文豪には、今の川上眉山、石橋思案、丸岡九華の諸氏。

軈て飯田町四丁目現今の皇典考究所裏なる、祖父荒木氏の家に移れり。其部室と云ふ下二疊敷にて其中には例の机、本箱も並べて有り、壁隙子本箱、手當り次第に書き付けられ、好みの物は總て眼の前にぶら下げると云ふ風、此れは彼の石野の頃と相違なかりし。尙ほ此風は氏が晩年より終焉に至るまて變らざりき。

兎角する間に明治十九年の春は來れり。硯友社の社運は次第に隆盛にて、既に三四十人の會員ありければ、一冊の寫本を廻覽するには、餘程日數を費すをもて、遂に四六版三十二頁許の雜誌として印行するの運びに至れり。會費も從つて從來の三錢を十錢に引上げ、各自一冊宛を分くる事となりぬ。此れに前後して社員となれるものには、煙波山人今の川上眉山、巖谷小波、武內桂舟、江見水蔭、岡田虛心、廣津柳浪、高階柳蔭、喜多川麻溪、飯田獨雨の諸氏。

始めより第拾冊目にして我樂多文庫は、始めて活版になれり。其時の氏の祝文あり。

こゝに文子となん呼べる賤女ありけり、山蔭の櫻のごとく仇めける姿も柴人の朝な夕なすぎがてにながむるのみ知る人もなくて憂き幾歲の春を過ごしけるをいつか都人の春をしたひ來てかゝる山里

に老朽んよりはとく都に行きてつま定めせよかしなど樣々に言ひすかしければ乙女もうれしく鶯の谷間を出づる心地して岩清水の水鏡し髮をも都振に取上げ紅葉の錦打まとひ今日は都にぞ出けるあはれ風雅男たちの心にさそふ水草のあと濃かなる文ども井出の下紐とく〳〵。

離の菊におきまとふ
霜月の末つかた　　紅葉山人

△硯友社の沿革　前記十八年五月、我樂多文庫一號を發行してより同十九年一月九號に至るまでを硯友社の第一期とすれば、雜誌の印行せられてより九號に至るまでは其の第二期なり。

印行の第十號目より愈々賣出す事となり、時に明治廿一年三月發行日には、石橋思案氏及び氏など數十部を鞄の中に詰め込みて、學校の休憩時間など控所の大勢集まれる中を奔走し、大聲に呼び歩けりとぞ。其頃の氏の風采と云へば、紫ヅボンと綽名せら

れ、柳原仕入の染返したる紺ヘルヅボン、日當に出づれば紫色に見ゆるを穿ち、日蔭町物の茶羅紗を黄に返したりとも形容すべき、亜きぼて〳〵せる外套を引かけ、『現金でなくちや可かんよ』などと絶叫する樣は得易からざる奇觀なりき。

此時分諸方の繪草紙屋などに、看板引札を配りしが其看板の趣向、彩色を初め、雜誌の躰裁、題字等凡て氏の考案になりしと云ふ。

一度雜誌の發售せらるゝや、氏が部屋の二疊にては萬事に不便なるより、同誌の印刷所なる飯田町中坂の同益社の眞向に一軒借り受け、之れに「我樂多文庫發行所硯友社」の看板を上げたり。二階を編輯室、下を應接室兼賣捌所に充て、氏と石橋氏が交る交る詰め切る事とはなれり。

社運益々隆盛にて雜誌の評判よろしく、一時は毎號三千部を刷るに至りぬ。月二回發行、一部の定價金三錢。之れを第三期とす。

同年十月廿五日出刷の分よりは、頁數を倍にし、別表紙を附して、別摺の挿畫も二枚入り、定價は十錢。表紙は朱摺の古作者印譜の模樣、形は四六倍の中々凝つたものなりき。當時筆をとれるものには、氏を初め美妙齋、思案外史、丸岡九華、漣山人に、新しく加はれるが眉山人。

大改革後十三號の發刊に至り、即ち明治廿一年八月、硯友社の元老たる山田美妙氏は遂に同社を脱走して、金港堂に入るや、「都の花」を發行したり。此れが爲めに我多樂文庫は月夜の提灯、甚しき打擊を蒙れり。斯くても三四號は發行せるが、遂に二十二年二月の出刷にて終刊の悲運に立至りぬ。此れを以て第四期とも云ふべきか。

其後は一時中絶の姿なりしを、吉岡書籍店が同文庫を引受けて、名をば「文庫」と改題し、形を菊版として發行せり。表紙は故穗庵翁の筆になれる、文昌星の圖。之れまでを第五期に數ふべし。

明治廿二年七月、前の發刊せる號を追ふて廿三號の時、大刷新を行ひ、表紙は桂舟の花鳥風月。柳浪乙羽、眉山、水蔭諸氏盛んに書き、寒月、鶯伴氏等も寄稿せり。之れその第六期。

同年十月發行の二十七號を終刊として、「都の花」「大和錦」の二大強敵の爲めに倒れたる也。其後間もなく吉岡書店より「小文學」を發行せり、之れ硯友社の機關とも云ふべきものなりしが、九號にして廢刊。之れその第七期なり。

同廿三年七月。氏が主幹となりて「江戸紫」と云ふを發行せるが、十二號にして之れ亦廢刊せり。之れを第八期とす。

明治廿四年六月、「千紫萬紅」と稱する會員組織のものを出せるが、又間もなく倒れたり。之れは硯友社の機關と云ふよりは寧ろ、青年作家の爲めに出てたるものにて、社名も別に盛春社とし、氏が樂半分に出せるものなりき。其頃拈華坊と稱せし小栗風葉

氏は即ち此社員より出でたるものなり。此千紫萬紅時代を以て第九期とす。十八年氏が雜誌に手を染め初めてより廿四年に至るまで、榮枯盛衰常なかりし歷史を追想すれば、今更の如く現時我文運の盛大に驚かるゝ也。

下　活動時代

△大學の退校　明治二十一年夏豫備門を卒業して大學に入る。初めは法科に籍を置きしが、一年にして緣の近き國文科に移りぬ。此頃より學課の勉强を其方のけにして、唯だ作る方に身を委ね、通學などは有名無實の、創作三昧なれば、學校には出てゝも二足の草鞋を履きたる心地、運動場の傍の芝山に上り、池を前にして足投出しつゝ、立案を恁麼の、描寫を彼樣の、材の取り方、こなし方など、話は凡て創作の事にて持切りなりき。されば從つて讀む事も

多く、時間だにあれば圖書館に至りて文藝の書を漁り、殆ど全く讀み盡したる程なりき。其當時彼の圖書館の文學書を殘らず讀めるものは、氏を措きては他にあらざりし位なりしとぞ。殊に氏は、讀める書中己が感じたる處は凡て拔萃して書留めたれば。今も尙ほ量高なる幾多の冊の殘れりと云ふ。

斯くて次第に著作に耽り、且つ氏の意見にては、假令大學に通ひ文科に學ばずとも、研究すべき書は獨學さるゝ事なり。又文學者となるには、必ずしも學位を必要とせず、如何に學校には通はずとも、なすべき處までは成し遂げて見するてう意氣込ありし上に、一つは彼の『我樂多文庫』發賣品となりし時、其の編輯員として氏も名を署し居たるを、學校の方よりは、以後署名せざるやう注意せられたれど、氏は文學者なれば差支なかるまじとの心もありし事とて、何彼に就けて面白からずや思ひけん、一節は頻りに其進退に關して迷ひ居たるが、遂に斷然退學するに至りぬ。之れ文科に入りて二年目の事なり。

△出世作　明治二十二年、神田南乘物町の吉岡書店の主人、理學士吉岡哲太郎氏が「新著百種」と云ふ雜誌を出す事となり、其第一號に氏の小說をと賴み込めり。此時は硯友社を去りし山田美妙氏が「夏木立」を公にして、既に世間に名を成したる折からなれば、氏の苦心は決して一通りや二通りにてはあらざりき。

此の作が彼の有名なる「色慨悔」にして、其文章などは洗練幾十度なるかを知らず。當時山田美妙氏は言文一致と稱し、氏特殊の筆力を以て、世間に評判せられたれど、山人は又其の言文一致なるものを感服せず、雅俗折衷體にて、文體の新しきを創製せむものと、三馬、也有、西鶴等の文を碎き、打つて一丸となす其苦心の程は、實に言語に絕したり。

其甲斐ありて、一度之れが公にせらるゝや、其の賣高の夥しかりし事、當時他に見る能はざる處なりき。此れより氏の文名愈々高く、明治二十二年十二月、また氏の在學中、讀賣新聞は禮を厚うして聘し、其の小說を紙上に載せたるが、每篇好評ならざるなく、人をして讀賣新聞は、紅葉の讀賣新聞なりとまで云はしむるに至れり。

△旅行　氏は從來旅行好きにて、散步遠足より山野の跋涉等暇さへあれば、同志を唆かして步きまはり、其都度之れが紀行を作れり。明治二十二年四月には、巖谷小波氏と共に湯河原に遊びぬ。勿論此處にては何か創作する心算なれば、原稿紙の五六百枚も携さへ行きしが、湯に入れば自然身體だれ勝にて、少しも作には身が入らず、每日々々山步きに日を濟し、或は小波氏を引張出して裏山にテッキを戰はしなどせりと云ふ。

又翌年四月には、川上眉山、巖谷小波、石橋思案、江見水蔭、佐藤黃鶴、高階柳蔭諸氏と共に旅行を企てしが、此時も子供見たやうなる騷ぎ方、一人先に寢

れば蒲團蒸にするとか、午睡をすれば顔一面に惡戯書をする、其餓鬼大將は常に氏なりしと云ふ。

明治二十六年には、前年京都へ行きたる小波の許へ大勢にて押かけ、花も盛りの四月に月が瀬に遊べる事あり。此時の紀行は『花の旅』。同行五人、氏と小波、乙羽、雪後、水蔭の四氏となりしか、其中三氏は既に今亡く、殘れるは小波、水蔭の兩氏のみ。

△「新小說」との關係　「新著百種」や「都の花」の出てしより間もなく「新小說」は春陽堂より出づる事となれり。其時當時の大家と云はれたる須藤南翠、森田思軒、饗庭篁村の三氏の名を以て、硯友社の氏と小波氏へ寄稿を勸誘し來りし事ありしも、其時には自重して餘りおだてに乘らず、靜かに修養すべしとありて、爾後五六ヶ月間は寄稿せざりしも、遂に書かざるべからざるに至り、氏も小波氏も盛んに書けり。之れより「新小說」との關係は初まり、發兌元の春陽堂主和田篤太郎が少し變りものなりしより、殆

ど氏とは友人の如き交誼を續け、氏は終焉に至るまて、同堂の顧問の如き地位にありぎ。

△三恩人　氏が文壇に出づるには、「新著百種」の出版元なる吉岡哲太郎氏、讀賣新聞紙へ入社の時斡旋の勞をとれる其時の文學士高田早苗氏、及び氏の新聞に出したる小說は必ず出版せる春陽堂主和田篤太郎氏の三者を介したるなり。以上三人は氏を文壇に出せる三恩人とも云ふべきなり。

△著作　一度『色懺悔』を出して、洛陽の紙價を高からしめてより、引續き『巴波川』、『拈華微笑』、『此ぬし』、『夏痩』、『二人女房』等の作を公にするや、世は南翠、思軒等の大家を捨て翕然として氏に赴くに至りぬ。明治二十四年『伽羅枕』を出すに及び、其艶麗なる筆致に醉はされし讀者は、仝廿五年『夏小袖』『三人妻』とを繙き、恍然として新しき天才に魅せられ了りぬ。此時一方に理想派の驍將幸田露伴氏の起るあり。文壇は紅露二家の花舞臺とはなれり。

『三人妻』、『不言不語』、『冷熱』、『隣の女』、『青葡萄』、『八重襷』其他書けば必ず文壇の呼び物となり、評家は筆を揃へて嘆稱しぬ。

中にも『多情多恨』(明治三十年)は、其頃凡人小說排斥、大なる人間を描寫すべしなど云ふ批評界の流行に反抗し、日常茶飯の間尙ほ大なる意味と詩趣とのある事を示さん爲め、「吾家の小說は米の飯也」てふ言を標榜して筆を採れるもの、其流暢なる言文一致と、自然なる內容とは氏の作品中最も價値あるものと稱せらる。

彼の有名なる「金色夜叉」は明治三十一年より、讀賣新聞に連載せられ、靑年子女は其主人公貫一と宮との活きたる物語に、遽然として日々の新聞を待ち焦れ、爲めに同新聞は每日幾版を重ね、新聞界未曾有の狀況を呈せり。此作は當時言文一致の流行につれて、文章を輕ずるの風ありしに反し、雅俗折衷の一種獨特の文躰を發揮したり。されど氏の文章に凝

る事の甚しきと、兎角健康のすぐれざるとの故を以て、休載に次ぐに休載を以てし、死に至るまて殆ど六ヶ年の間に涉りて、遂に其完結を見るに至らざりき。

此間病養の爲め諸方に遊び、『煙霞療養』などの作を出せり。又外國文學を愛讀し、ユーゴーの『ノートルダム』、トルストイの『アンナカレニナ』、ツルゲネフの『散文詩』等の譯あり。

△門下生　紅葉門下の鬼才と云はれたる泉鏡花氏及び小栗風葉氏は、門生十數中の高足にして、氏等が初めて其の門に來れるは、鏡花氏が十八才、風葉氏が十六才の時なりき。彼の『新著百種』に出でたる『色懺悔』を讀み、大いに感ずる處あり、遙かに東の空に先生の俤を描き、はるばる慕ひ上れるなりと云ふ。其後田中涼葉、柳川春葉、德田秋聲の諸氏來り、或は玄關に或ひは塾を開き、氏の懇篤なる敎育の下に、今日の位置を造り上げられたるなり。氏が門下

に對するや、決して世の常のそれには似ず、一旦世話をするとなれる以上は其作物のみならず、一身上の事をも一々注意して、恰も父が子に對するが如く、少くとも衣食に窮せざるやうに仕上ぐると云ふが、氏の意見なりしと。されば時には隨分手嚴しき叱責を頂戴する事も少からざりしが、其怒りも決して惡意あるにあらず、且つ江戸氣質の何時までも一事に就きて根にもつやうの事なければ、門生は皆なお叱りを心より有り難く聞くを常とせりとぞ。

△餘業　專ら小說の著作に身を處しながら明治廿四年「江戸紫」と稱する文藝雜誌を發行し、熱罵冷嘲天下文豪の膽を奪ひ、光芒陸離、鋒先當るべからざるの慨ありき。

△俳句　此頃より氏は豫ねて嗜める俳句の研究に從ひ、角田竹冷氏等と計りて「秋聲會」を起し、雜誌「秋の聲」を出刷し、後又「文藪」を監督し、正岡子規氏等一派に對抗して、所謂紅葉一流の俳風を鼓吹せり。尤も氏が俳句を初めて作れるは、『我樂多文庫』の後『文庫』時代にして、其十八號の中『路用三貫文の記』と稱する紀行文中「不可もなし香もなし梅の莟かな」などあり。

其の頃は所謂檀林派にかぶれて、非常に宗因を崇拜せし時とて、「天渺々海漫々中にひよつくりかつを舟」、「稻妻や二尺八寸そりやこそ拔いた」等の句見ゆ。

俳句の友としては巖谷小波氏最も新しく、明治二十一年の夏、小波氏鎌倉に遊べる時、氏は「靑葉ほととぎす松魚老ひしが恨なり」と書きて送れりと云ふ。明治二十五年小波氏の京都に行かんとするや、いたく其の訣別を惜みて、「惜しけれど懇望じややれ庭の柿」と吟みて送れり。仝卅二年後藤宙外氏夫人を迎へたる時、「窩に聞かれな蚤のささめごと」の句を贈りて祝せり。又「人ありて灯なき二階の月涼し」など其頃の作也。爾來終焉に至るまで、小說の傍ら句を作り、或は俳文を作れり。尙ほ廿四年頃の作には、堀紫山同居「下戸同志圍子はどうぢや後の月」。

病中の一二句を擧ぐれば、枕上示鏡花子「もるひねもさかて悲しき秋の夜や」、風葉子必携夜伽一壺「秋の雨も夜も物かはの其酒乎」。明治卅六年十月二十一日の夜、「床ずれや長夜のうつゝ砥の如し」、仝十月二十二日の夜、「寒詣かけるちん〳〵千鳥かな」（齋藤松洲氏書贊）。辭世の句に曰く、

死なば秋露のひぬ間ぞ面白き

△二六新聞社に入る　明治三十五年七月二六新聞社の禮を厚うして聘したるに應じぬ。是より先、讀賣新聞社にありて、彼の「金色夜叉」を草するや、積年の胃疾に又しても健康を害ひ、休載又休載、遂に其完結を見ざりし程なれば、二六社にて「草分衣」を載せしも、之亦未だ稿を畢へずして逝きぬ。

△終焉　久しき以前より醫藥の品を盡し手を極めし甲斐もなく、遂に胃患は癌腫となり、明治卅六年三月二日大學醫院に入院するに至れり。されど稍々輕快を覺えたれば幾もなく家に歸り、栗本博士、木澤敏（仝生病院長）、樺島信太郎（夫人きく子の令兄）諸氏の手厚き療治も其甲斐なく、且つは諸方厚志の諸氏より白扁菜（くさのわう）の寄贈まで得たる甲斐なく、天才人に年を假さず、秋風落葉を捲き秋雨霏を撲つの夕、溘焉として長逝せり。悼むべき哉。

花時はいかばかり麗しからんと思遣らるゝ櫻林の、高き梢の上に方つて、薄雲に掠めらるゝ月影を仰ぎながら、やゝ春めかしい夜風に吹れて、雪駄ちやらちやらと出た時は、孤燈の下の愁思は忽ち銷して、一句有りたいなどゝ暢氣に撫内の運動場側まで來ると、後から、人の追來たる氣勢がしたと思ふと、何やら聲を掛けた。わが事かと見返れば、白衣の影の走り來るのである、「尾崎さん、あなた那裏へ被入るので御座います。」櫻井看護婦は息を切つて近いた。

（病骨錄一節）

第三章

文學者としての紅葉

▲病骨錄（びやうこつろく）▼　尾崎紅葉山人が其の生前明治文壇の泰斗と仰がれ、其の死後明治文學史の第一頁に奮鬪者の勇名を記すべきは、吾人が敢て茲に贅するまでもなく、江湖の等しく首肯する所なり。されば氏が靈筆に成れるとし言べば、斷篇零墨たも人々の珍重せざるなく、書肆爭ふて是れを錦墨に附して、世に布かざるもの無し。然るに茲に病骨錄の一篇有り、氏が去年三月上旬帝國大學醫院に入るや、病苦を勵めて記述し置ける氏が最後の筆は、讀みもて行くに山人が面目躍如として、筒ばかりの名文を深く懷底に藏し、獨り遺族遺友等の珍とするに忍びず、氏が在世中交りありし文祿堂主人をして發布せしむ。主人も窃かに是れを榮として、氏が筆跡を其の儘寫眞石版として卷頭に附するのみか、門生に口授筆記せしめたるに加筆せる朱字をも紙上に實現して、山人を追慕する江湖幾多の有情なる才子佳人が渴を癒せしむ。病骨錄に附せる「生死論」は氏が思ひ寄れるまゝをノオト、ブックに鉛筆もて記し置けるもの、一讀明治の文豪たる山人が死に對して綽々として餘裕ある寬懷を偲ぶに足る。卷末の一觀月は山人が其の徒弟と共に病苦を忘れて賞月の歡びを共にせるもの、殆ど多讀に堪へず。裝釘の麗、印刷の美は言はずもあれ、苟くも山人が椽尾の傑作を讀みて、山人が常に口にせる「蹴れて後已む」の氣概を知らんとするものは、此の書を讀むの他なく、げに未曾有の珍籍なるべし。（發行所日本橋樽正町文祿堂　定價金五拾錢）（文藝倶樂部評）

三　文學者としての紅葉

上　その思想

一　緒言

紅葉の思想につきて予が研究したるところは極めて斷片的なり。人とは常に矛盾したるものなり、よし矛盾せずとも人とは少なくとも單純なるものにあらず、されば人を觀察せんには、一意唯だ綜合的に之れを解釋して廬山の一面をのみ見てやまんよりは、それを斷片的に研究して、その個々の斷片の集合よりして、其處に髣髴として現はるゝ當面の個人格を伺はんこそ最も興味ある行き方にあらずや。且づや故紅葉すでに逝きたれども、年處を經るところ猶ほ殘く、一個人として紅葉が概念は幾んど文藝に志ある士の、必らずその髣髴を抱き居るべきところなるを以て、その斷片的の研究の如きものこそ却て今日に於て必要とせらるべきをや。

吾人は茲に題目として『紅葉の思想』といふ標象を置きたれども、專ら彼が思想をのみ論ずべきものにあらず、もと本章を分つに、彼の思想と彼の文章との二つを以てしたれば、後の篇に述ぶ如き彼の文章の中に攝して論ずべき範圍以外の事は、すべて本節に於て之れを論ずる事となしぬ。

二　江戸的氣質

紅葉の思想といふ事を考ふるに當りて、劈頭第一に念頭に浮び來るところのものは、此の江戸的氣質の五文字ならざるべからず。

第一章『時代と紅葉』の章に於て論じたるところ

の如く、明治十年以後のわが日本は、英國の進取的、功利的の思潮に導かるゝにかてゝ佛國の輕捷敏活を學びたるが故に久しく國民性として、印度支那思想の下に蟄伏しつゝありしところのものは、地皮を突破して起る噴火山の如くに逆起し、茲に日本的思想を極端に發しぬ。德川時代より一種民族的のテクニックなる此の『江戸ッ兒氣質』なる名はやがて此の日本的思想に、一味詩的の被覆を蒙らせたるものに外ならざる也。

紅葉は終始その時代の精神を描かんが爲めに浮身を窶しぬ。されば彼が見たる時代精神なるものは、かかる時代に際したるが故に極めて日本的のものにして、かてゝ紅葉その人が江戸に生れ、その人と爲り又所謂江戸ッ兒氣質なりしが故に、求めずして此處に燧石相打ちて火を出し、彼が作に胚まれたる思想、乃至中心觀念の幾んどすべては、此の『江戸氣質』なるものを以て終始したり。換言すれば『江戸

兒氣質』を渾化したるもの、やがて紅葉――偽人としての紅葉――を形作り、而してその作物に顯はれたる人格となりぬ。

沙翁、巢林子等の如く、深刻なる洞觀力を有して、自家實驗圈外の人と雖、取て以て作中の傀儡となしたるとき、それに個々の性格活躍するものに比せば、紅葉が作者としての天才的能力は、之れと同一の步趨を取らざりしに似たり、隨て自家の性格、又は自家の好む性格、又は自家の實驗圈內の人格的行爲――即ち紅葉に取りては江戸兒氣質――を作中に首として顯はすこと、自然の勢と言ふべし。

然らば紅葉が描かんと試みたる江戸ッ兒氣質とは何ぞや、請ふ多少の解剖を許せ。

一言にして江戸ッ兒氣質を言はゞ、華美、いなせ、粹、多血等これ等同類性の猶ほ二三加へたるものゝみにして、之れを女にすれば、たとへば『伽羅枕』の佐太夫の如く、暫らく情熱熾んなれども、愛時にして冷却し、剛情と名聞氣と相渾成して、一種の俠氣を生じ、弱きものを助けて、強きものゝ鼻ッ柱をくぢくを以て無限の誇り、喜びとなす、華美、驕奢を好み、男に惚れず、金に迷はざれど、義理人情に脆しといへる如きをいふ也。

晩年、及びそれより少し以前に於てはさまで此の『江戸ッ兒氣質』にのみ、偏したるを見ざりきと雖、その初期、ならびに中年に於ては、あまりに『江戸ッ兒氣質』のみを好みて、之れのみ描寫するに過ぎたるが故に、却て之れに累せられたるが如きを見ずんばあらず。たとへば『おぼろ舟』のお藤、お松、『三人妻』の才藏、お艶、紅梅等には、猶ほ一個の個人格を有して、之れが描寫に個々の性格の植立するあるを見れとも、『伽羅枕』の佐太夫『此ぬし』の俊橘の如きに到りては、實に一個江戸ッ兒氣質なる類性の上に、強てデッチ上げたる、木偶同樣の人物となり了せるを見ずんばあらず。それ小說は個人性の描寫を尊ぶ、若し僅かに類性の描寫に止まりて、深く個人性を發揮せずんば、何の小說ぞや、何の文藝ぞや、げに紅葉が描き出したる江戸ッ兒氣質は、一讀して溜飲のさがるを覺ゆといへども、そはたゞ華美、いなせ、粹等の渾化して人となりたるものにして、或ひは寧ろ半ば人となりて、半ば未だ概念のまゝに愜熟されずして殘りつゝあるものなるが如き觀無くんばあらず、こは紅葉に、深く人生世相を洞察して、其處に生きて躍る人間の苦痛悲哀の泉を汲取し來るの力なきに是れ依ると雖も、又餘りに紅葉が江戸ッ兒氣質の爲めに囚へられたるものに主として是れ依らずんばあらざる也。且つ又その江戸ッ兒氣質と言へるものは、一方には上に擧げたる如く、華美、いなせ、粹等の特質を有すると雖も、その半面には華美に伴ふて外面の誇衒と內面の淺薄を含み、いなせに伴ふて無根底或は一時的の小虛名心を含み、粹に伴ふて輕佻浮華の缺點を含む、かくの如きが故に、

その主人公に深大なる人生世相の煩悶なく、業苦にやかれて煩惱吁咈するだけの悲哀なく、隨てその作にも深き人生の觀察や、深き人情の研究やは顯はれずして、唯だ眼前の事に(極めて輕く)泣き、口頭の事實に(極めて淺く)笑ふのみ。かくの如きはこれ紅葉の作をして、小說としての價を輕からしむる所以のものにあらずや。

『江戸ッ兒氣質』は紅葉をとらへぬ、而して紅葉をして深大なる人生世相の觀察なからしめたり。紅葉は『江戸ッ兒氣質』を宣傳するに、最もその處を得たる詩人的散文家として成功したりと雖も、作家としては、未だ俄かに大家名家の名を許すべからざるなり。而かも當時紅葉の作が、文壇と讀書界と二つながら之れを風靡して、をさ〳〵之れに反抗するもの無かりしが如き、いかに當時の民心が、猶ほ此の泰西新來の思想と千年來蟄伏せし國民性との渾沌して、一種非沈着なる、非思想的なる、上ッ辷り的なるものとなれりしかを知るに足らむ。今日近代文藝思潮の、全く文壇的尺度となりしとき、紅葉の作が、狹し、薄し、淺し、輕し、小說としての價少なしと言はると雖、當時に於て一流たりしこと誰か之れを否まむ。

さはれ、紅葉が描ける個人格は、淺し、狹しといふと雖、若し夫れその『江戸ッ兒氣質』なるものを顯はすことに於ては、實に一種他者企不及の伎倆を有す、たとひそは類性、或は概念の化身の如きに過ぎずとは言へ、いろ〳〵の形に於て『江戸ッ兒氣質』を顯はし、所謂江戸ッ兒的人物を活躍しぬ。此處に少しくその首なる人物に就イのべむ、

三　紅葉の見たる江戸氣質の代表者

紅葉が江戸ッ兒的氣質を描く、その全集を繙けば十百を以てして猶ほ數ふべからず、而かも最も江戸ッ兒的氣質の種々の要素を凝集して之れを代表し、紅葉が江戸兒的氣質の理想的傾城となせるがごときは。即ち初期の作物『伽羅枕』に顯はれたる佐太夫これ也。當時早稻田文學に掲げられたる後藤宙外氏が紅葉論の中、この佐太夫を論ずる章殊に詳しく、且つ吾意を得たれば、之れを引用して讀者の參考となさんとす、以て紅葉が描かんとしたる江戸的氣質なるものゝ一般を知るを得んか。

佐太夫幼名お仙、其父西岡屋の家運傾きしや、鴨の養女となり、いたくめで鍾愛れながら尙懷かて、西岡夫婦をのみ慕ひ、榮華に心奪はれざる魂、後に佐太夫となりて金にも男にも心ひかれず、義理と意氣地と情とを立て通し、松の位の君が二葉の俤能く見え、又雛鑒となりて鳥邊山の妙見へ早朝の日參に、其の意地いちじるしく、後に嫖客ばらが「氣性買ひ」にとて夜毎の繁昌」を極めし傾城の張ほの見えたり。「華美好」みの父、それ者のはての母親に鍾愛せられ、「諸藝の敎を盡して」稽古を勵み、「餘所行きの服裝には「舞子の姿して往來の足を止め」させにし身なれば「苦界と言はゞ苦界、玉の輿の踏臺と勸むるを、義理ある母への孝行と思ひ、あいと泣顏せずに賣られしも、蓋し境遇の感化なるべし。一度鳥水の隱居に請出されし身も翔しては「今の身の上のしがなさや裏に針あれど裲襠の着心馴るればまた其中に歡樂」ありと嘲ち「かほどの玉を冥加なや、草深きに投込み露に見まがはれて消ゆるも惜しければ」と「自負」惡念を煽る時節に、母も同腹なるを見澄まし「生娘に回るべき希望」はなし、「色を賣りてなりと母樣にも安堵させ我も浮む瀨に逢ひたし」と身賣の口を搜がす中、江戸のお侍衆ときゝて我が實父のなつかしく、前田新右衛門の妾となりしも人情の自然なるべく、一度傾城となりし身は資本入らずの爲し易き商法、此の外にあるまじと思ひつき、又色を闊がんの心を起しゝも理と見えたり、さて新右の妾となりての心盡しにも、其の情け深きさが能く

見々、新右死して後巽腹の姉と三枚橋にて「彼れは銭打の乗物」此方は「塵埃の中にしよんぼり立」ちてのせわしく本意なき對面に心濁し、胤はかはらぬ石見守の娘ながら、彼は玉籠の御息女に生れ、我はかくし子の日陰ものとて下賤の土に根を持てば其のまま、草花と開ける此身！　羨ましきは姉樣なり」と思ふにつけ、鳥水の隱居と名所見物に贅澤を盡くし昔をしのび、姉に惠みを受けて一入「身を敢果なみの種となり」それ是れが因となりて「かくては何の思出あり長命ふるや心に問はれて愧かしきことなり、我二十二歳、これよりを盛とも云ふべき身にして」と心動けば理性も自ら手傳ひて

新右殿が遺記念の此子を干死にせむは、我萬人に情を汚されんより、數十倍も亡夫に謝罪なき仕誼なれば、我奉公して此子は里に遣り、見事に成人させて細くとも前田の家を繼がせたき了簡。

（六）

になりて再び身を賣り、いとし子を「里親に渡して諄いほど頼みましたを繰返して」の泣別れ、露重げなる牡丹花が再び廓へ歸り咲きまて無理のなきは老練也。やがて佐太夫となりて、

姉は大名の奥方とて、見たりや、行列の威勢は飛鳥も翼を斂めんに、我その妹として味噌漉携げて腐らむは、神ぞ、神ぞ、神ぞ口惜しからずや、さりながら運拙くして夫を持ては皆な死なれ、これまての萬事末凶ならざるはなく、末々の辻占惡ければ、正路の立身出世は覺束なき事なり。凡そ人間に生れながら、良かれ惡かれ其名を唱はれずして土に返るは、蠅の夏に生れて秋果つるが如し、芳名を傳へずば、あられぬ名にてもあれ世に知られ、其れにて姉に楯つがむ。

と不思議の望を起じゝは、思ふに屢々の失望に心ひがみ、持前の意地が世の障礙に反撥し、かゝる心を生ぜしめしものか、「大不具となりて世間を氣味惡がらすべきぞ」、「勘當帳に反古の價を下げばや」など思ひたちたる、仙と呼ばれ、お花と呼ばれし頃の、優しく情け深きとは打つて變りておそろし。これは榮華の姉を羨み、薄命の我が身を疎み「末々の辻占惡しければ」など迷信も加はりて、憤悶のあまり自暴の心も起こり、クワッと取逆せたる際に生得の名聞負けじ魂など手傳ひ、實際は左程の殘忍無法をせんの心なきも、自身への附け元氣に、心の表面にかかる壯語を列べしか。多感の性には此の類の變珍らしからず、蓋し此の一時狂とも名くべき熱情は佐太夫に通徹す、例へば新堀左源太が父を讒訴して自滅せしめきと聞き「おのれ斎生武士」と唾吐き懸けし、後藤八郎が父の放埒の意見を頼みに來りし時に「折惡しく小癪に障れる事のありて自暴酒の醉心に浮かれて散々に罵り」し、いづれも熱情一時に燃ゆる癇癪のわざなり。たとし一時に沸き昂る熱情なれば冷るもまた速なり。彼の田島が行き届く深切に感じては刑せられきと聞きて「愴惻骨を刺し悲嘆腸を拷れば咲誇りし花、忽ち凋れて色香を失ふこと限なく」高阪時雄が心からの戀、文七が主思ひの誠心に動かされては、我が貯への金をもて救はんとし、新堀左内が我れゆゑの自殺と知りては「紀念と遺れる塗枕の其の人の定紋に線香を供へて心ばかりなる回向」し、其の外遙に父を慕ふて江戸に上りしなど、暫時は滿腔の熱血を惜しげもなく或る一事に注げど、事の去るや、行く水のまた歸らざるが如し。此の忽ち熱して忽ち冷る性情は彼れみづから意識せざるところにして、而かも其が男をたらす第一至妙の魔力なりき。此の故に佐太夫が手管を悉く熟慮の末、工風の詐謀を見るはひがごとなるべし。優人が場に登りて劇中劇を忘るゝ如く、佐太夫も屢々虚を離れて我れ知らず實の境に入り、好まぬ客をあやなすにも、時

としては無意識の情其の心に動きて情人に對する如き感ありしか。換言すれば些にても客の性の美點を見ればこれに多少の同情を寄せ、屢々我れを欺くことあり、彼の疣大盡との添臥に大盡が滿身の疣を撫でながら、此の

男富貴の家に生れながら、いかなる業因か如此
被厭の疵物に出來て世に不足といふことを知ら
ぬほど此不具を朝暮の惱として天地を怨み父母
を怨み、其の身を怨み嘸や世中の敢果なかる可
し(中略)此容貌にては誰も〳〵厭ひて何處に行
けばとて、戀めける所には、穢多非人の樣なる
心扱ひせらるべく、自身にもさりとは大概知り
ながら、なほ煩惱已み難くて、通ひ玉ふ心中の
可哀さ、可憐と、徐ろに不便を催しければ、佐
太夫凡人の魂を入れ替へ、心を盡して大盡を持
成しける。

とある、又田島が「假初の御所爲の中にも非凡個所の見ゆれば五月晴れに月影を拜む思ひして羞かしながら佐太夫其處に迷ひ」身の素性をあかさせたく「この御所存を打明けたまはんには善かれ惡かれ其には論なし、佐太夫が命捨て〻露ほども御用に立つならば後ちとは云はず即座に相果て御覽に入れ參らすべし」と言へる、こは對手の殺し得まじきを觀破しての苦肉の手管と言ひけさばそれ迄なれど、寧ろ一時は死んでも見せん心となりぬと解する方、彼が一時狂の特質にも協ふべくや。又正助が佐太夫を賴みて石室に金の才覺をさせ石室を「白痴と云はぬばかりの口上自己は情人の所存」なるを憤りて、妾の「眼には一知半解の美男よりも、實意ある蕃瓜が好もしい姿に見々まする」と罵れるなど、いづれも人の難儀屈辱を見ては、我が上のやうに烈しく同感し躍起となる性の所爲なり。斯く同情の强きにも拘らず、客をたらして多くの金をせしめしは如何に、これ其の熱情の唯だ一時に止まり、やがて忽ち冷却すれば

なり。同情長く續かば無法にも大金を欺き取るやうの事は爲しがたかるべく、熱情久しく冷却せずば早晩間夫出來て全盛の人氣を落すべし、さればとて全く熱情なくば、いかてか深く男を迷はし得べき。斯く考ふれば佐太夫はいとよく傾城の理想を代表せり

(中略)今概括して佐太夫が性情の著しきを數ふれば、第一、暫くは情熱熾んなれども忽ち冷却す、第二、剛情と名聞氣と一團となりて一種の俠氣をなす、第三、華美、驕奢を好む、第四、男に惚れず、金に迷はず、義理人情に脆し、第五、縱横の手管、第六、手管の爲めに手管を用ふる殘忍の性是れなり。是の箇條は一方に於ては江戸氣質の精髓と言ふべく、一方に於ては江戸傾城の精髓ならずや。すなはち紅葉は江戸氣質を打ちて一團となし、以て理想的傾城佐太夫を作りたり、案ずるに江戸氣質を發揮するには、恐らく佐太夫の如き女性を描くよりもまさる好方便なかるべく、又かゝる役目に適する作家今紅葉の外に絶無なるべし。紅葉曾て句あり「小判かむ音聞かせたや初鰹」と、蓋し彼が本願は「伽羅枕」に於いてほゞ達し得たりと云ふべし。

と、こは後藤宙外氏の見たる佐太夫觀にして、かねて紅葉が描かんと試みたる江戸氣質なるものに對する同氏が評論なり、深切鬯達、よく正鵠を得たりと言ふべし。紅葉の常に描かんとしたる江戸氣質の中心觀念のいかなるものなるかを、略々知るに足らむか。

四　その喜劇的才能と悲劇的才能

紅葉の喜劇的才能と悲劇的才能との比較は、さまでに興味多き問題にあらず。何となれば紅葉は先天的に喜劇詩人たる素質を有したりし作家にして、その文學的に成功したる作物は比較的喜劇に多かりしを以てなり。而かも紅葉は、之れを認識してか、然らずしてかを知らすと雖、兎に角喜劇に專念ならずし

て生涯の述作多くは悲劇的の結構にかゝる。こゝに於て多少の研究的興味を見出さずんばあらず。見よ紅葉の才は實に圓轉滑脫、文を着くれば玲瓏を極めずんばやまず、字を成せば瀟洒の致に至らずんばやまず、到るところに輕滑の才を用ゐて、人をして一味の輕き催眠術にかゝらしむるの妙を見る。これ紅葉が滑稽才を有する所以にして、當時諷刺的の筆を遣るものに、小杉天外あり、櫻庭篁村ありきと雖、その先天の才能に到りては紅葉ひとりその厚資を縱にしき。されど紅葉が喜劇的作物の結構は、その中心思想を以つて人を笑はしむるにあらで、畢竟するところ、その文字の魅力のみに之れ依れるものなりき。かるが故に彼が滑稽的作物は多くは創作的のものにあらずして、モリエール其他の飜案なりき。(概して言へば紅葉は寧ろ創作に成功するにあらで、飜譯に成功すべき人なりき、その字句に忠實なる點に於て、創造的思想に缺乏せる點に於て)而かもその

文字の魅力は他者企不及の微妙境を極めて、單に文字のみを以ても、人を笑倒せしむるに足るものありき。更に進んでは紅葉は悲劇を物しつゝ、开は作者が望める如き悲劇と成らで、却て开が喜劇となるが如き奇觀さへ生ずるなりき。たとへば悲劇の主人公にして胸に萬斛の悲愁をたくはへ、四圍の獄火に吁咈の聲を放つべきものが、紅葉の筆の餘りに輕く、餘りに圓轉滑脫なるが爲めに、都ての喜劇的の言語動作をなすが如きこと、往々にして是れなきにあらざりき。たとへば『金色夜叉』の間貫一が、戀の光を自ら消して人生の暗黑面に、個人の悲哀を慟哭しつつあるにかゝはらず、況んや之の憂をせめても慰め得んかとて伊香保に行けるにかゝはらず、況んや貫一は性來洒落なる冗舌を好まざる性格なるにかゝはらず、下の如き言動あるを見よ。

「閑寂なのも可いけれど、外に客と云ふ者が無くて、全で恁う獨法師も隨分心細いね」

託言がましく貫一が言ひ出づれば、

「然やうて被居いませう、何と申したつて此の山奥で御坐いますから、全躰旦那がお一人て被入ると云ふお心懸けが惡いのて御坐いますものそれは爲方が御座いません」

婢はわざとらしう高笑しつ。

「成る程、是は恐入つた。今度から善く心得て置くことだ」

「今度なんて有仰らずに、旦那も明日あたり電信でお呼寄になつたら如何で御坐います」

「五十四になる老婢を呼んだつて、お前、始らんぢやないか」

「まあ、旦那は那麽好い事を言つて被居る。其老婢さんの方てないのをお呼びなさいましよ」

「氣の毒だが、内には其限より居ないのだ」

「てすから、旦那、づつと外にお在んなさるので御坐いませう」

「そりや外には幾多ても在るとも」

「あら、御馳走て御座いますね」

「何有、能く聽いて見ると、それが皆人の物ださうだ」

「何てすよ、旦那、貴方、本當の事を有仰るもんてすよ」

「本當にも嘘にも其通りだ、私なんぞは那麽意氣な者が有れば、何爲しに這麽青臭い山の中へ遊びに來るものか」

「おや！どうせ青臭い山の中て御座います」

「青臭いどころか、お前、天狗巖だ、七不思議だと云ふものがある、可恐しい山の中に違無いぢやないか。其處へ彷徨、閑さうな顏をして唯一箇て遣つて來るなんぞは、能々の間抜と思はなけりやならんよ」

「それぢや旦那は間抜なのぢや御座いませんか那樣解らない事があるものてすか」

「間抜にも大間抜よ。宿帳を御覽、東京間抜一人と附けて在る」

の如き、斯の如き會話を使ふ主人公を以て、悲劇的人物間貫一となす、誰か之れを領せんや。この會話の如きはこれ解語の花に圍まれたる洛陽の風流才子が言葉にあらずや。紅葉が圓轉滑脫を極めざれば止まざる性は、あたら悲劇をして斯の如きに了らしめたり。換言すれば圓轉滑脫の筆は、悲劇を敘するに喜劇を遣ると同一の筆法を用ゐたるために、最初の第一目的を破却し了んぬ、かくの如くにして紅葉の喜劇的才能は證明せられたり、これ然しながら紅葉の喜劇的手腕は、その落想はた脚色の面白きにあらで、唯だ之れを盛れる器――即ち筆――の面白さこれのみ、されば紅葉の會話の到るところに潑剌として生氣を煥發し、一誦頤を解くを禁ぜざらしむるものあるを見るにあらずや。吾人は此處にもやがて彼れが江戸氣質なるものを尊び、之れに幾んど囚へられつゝあるが如きを見る。紅葉の滑稽才は、人をして、眞個に我を忘れて、腹を抱へつゝ放焉たらしむるが如きには到らず、唯だ眼前口頭の駄洒落や、物の間違ひ、はき違ひ、語呂落し如きにすぎざるものに、破顏するまでに止まるのみ。吾人は江戸的氣質を呪ふものにあらずと雖、彼れ紅葉がすでに之れに累せられたる如く、唯だ徒らに輕捷を尊び、敏活を欲し、眼前口語に横はれる膚寸の悲喜に、淺く悲しみ、淺く喜ぶ果は、遂に人生の事實に深く悲み、人生の事實に大に笑ふ能はざらんとするに到らんを恐る。

更に彼が悲劇的の才能を檢せんに、すでに屢々述べたる如く、彼は華美、いなせ等を以て作りあげたる江戸氣質てふ一個の概念に、多大の興味をもちたるが故に、作中の人物も、性格とよりは類性の方發達し、隨て紅葉をして、類性の研究は或る程度までは成功せしめしかども、性格の研究は（殊に自家の實驗圈外の悲劇的人物の性格に到りては）實に放焉として相知らず、かくの如くにして彼は境遇悲劇を作り得たりけれども、性格悲劇は未だしかりき。

彼は悲劇を作らんとするにも、悲劇的の人物を作らんとはせて、悲劇的の境遇を作りたりき、彼が筆端に露はるべき人物は、いかにしてもその性格を以て悲劇を作り出すに足らざりき。第一期の作物に於ては『巴波川』『南無阿彌陀佛』の如き、第二期の作物に於ては『多情多恨』の如き、第三期の作物に於ては『金色夜叉』の如き、その主人公は、曠野のリヤ王の如く、マクベクの如く、先天的に悲劇的にあらず、又たとひ多少悲劇的の人物たるべき要素はありとするも、紅葉の拉し來る人物は、常に單純にして、盡に盡あり、底に底ある人物もなく、自ら自己の矛盾に泣くものなく、性格撞着に自ら燃ゆるものなきが故に、之れをして悲劇的の行路を辿らしめんには、紅葉先づ自ら悲劇的の境遇を筆端に揑出して之れを此の主人公等に寄與せざるべからず。かくの如くにして紅葉は、『巴波川』『南無阿彌陀佛』『おぼろ舟』の如き短篇は兎に角、やゝ長篇の悲劇には、多くは主人公の性格より悲劇を描かて、之れと共に舞臺に出て來る副主人公を數多く點出し、その副主人公によりて更に幾多の事實に舞臺を賑かにして、僅かに長篇の悲劇を作り得たり。されば紅葉は悲劇には不成功なりしかども、比較的如上三篇の如き短篇には成功したるが如し。長篇に到りては全然一失敗に陷りたり。

紅葉の悲劇は悲壯美よりは悲哀美に成功したり。彼れが常に投じ來る主人公は、無垢、無邪氣、一本氣、純潔なるものにして、その女主人公も『巴波川』のお蔦、『南無阿彌陀佛』のお梅、『おぼろ舟』のお藤共にこれ可憐、貞淑、孝順等の性質をそなへ、利己、傲慢、復讐、憎惡、野心等の畢竟の胸を蔽ふなし、かるが故にその悲劇や悲哀美を描くに恰好、涙

を見るのみの悲みにして、涙を見ず泣聲を聞かずして、自ら胸中の獄火に腹膈を燒き盡す眞個深刻の慟哭は、絶えてなし。後藤宙外氏も「紅葉が作の人物が衝突に逢ひて蹶くや、死を賭して蹶くもの殆んど無し、遊戯三昧のものが十が九を占めたり、是れその人の致命點に衝突を起らしめざるに由るなるべし」と言べり。

かくの如く論じ來れば紅葉の長所殆んどなきが如しと雖、要するにこの江戸的氣質を描きて、自家の筆の之れに恰適するところに到れば、他人百年の刻畫、遂にその髣髴だに描き能はざるところのものあり、又この悲哀美を以て優れる悲劇の、可憐なる女主人公が、些細なる世間の遭逢に逢ひて蹶くや、纖月の眉に、舒べて盡しがたき一味悲愁の影を翳し、紅袖に涙を拂ふてよゝとして泣き伏すところに到れば、玲瓏の筆、可憐の描寫、涙、花を染めて千年枯るゝなきを思はしむ。

五　紅葉の男女觀

紅葉の人生觀を論ぜんとして我れは確とためらひぬ。汗は人生觀として論ずべくあまりに輕く淺く、換言すれば紅葉は人生の悲喜の事實を瞥見したるとき、彼は之れに對して、哲學的はた倫理的に、深遠にして根據ある見解を下さんとはせて、殆かもその作の主人公が遊戯三昧に泣き且つ笑ふ如く、紅葉も亦唯だ之れを興味ある事實として、輕くは遊戯三昧の玩具とし、深きも之を藝術の對象として、直ちに之れを措き去つて、未だ深く之れを研鑽するの餘裕なかりし也。去ればわが紅葉の人生觀を描かんとしたる筆路は、此處に歪辷して、紅葉が男女觀を檢するに到れり。吾人の見るところを以てすれば、紅葉は女性崇拜の詩人（比較的の言葉なれど）なりしが如し。女性崇拜と言へる言葉には語弊あれど、近代文藝描寫のセンヂユリアスチックとなりてより、なべての作家が男性女性に對する態度は、ささの半ば讃美的、半ば謳歌的なりしに引きかへて、恐ろしき判官的態度となりて、酷しく冷かに剖判するを例とするに到れり。此の間にありて紅葉は兎にも角にもその作中女性に對して讃美又は謳歌の分子の含めるところ確かに女性崇拜の名を享くるに庶幾し。

されど多くの人の經歷中に見る如く、年所を經るに隨つて、紅葉も亦自己が餘りに女性の美所を過算せしを知りたるものゝ如く、晩年の作は寧ろ男性を貴賤し、女性を賤賣するが如き傾向ありき。『巴波川』『おぼろ舟』等の作物に顯はれたる、可憐、無邪氣、貞淑、穩雅の少女と、『金色夜叉』に顯はれたる、自己の愛情を以て、よく金力威力に換へ得るの、慾塊肉塊にすぎざる女性とを較照すれば思ひ半ばに過ぎむ。而かも男性に於ては却て前期の方に之れを高售して、後期に之れを低量したるの感あり、『不言不語』の民の助、『おぼろ舟』の松本も、舌端思想共に輕く薄き風流才子にして、何等節操の名の之れに加ふべきものなきにかゝはらず、『金色夜叉』の貫一の如き、『多情多恨』の柳之助の加き、男子として多少の節操あり、人間として多少の重量を有せるを見る。されど要するに紅葉は晩年に到るも依然女子を貶去せし人にあらずして、猶ほ多少の美所を認め、之れを肉のみを以て評し去るの酷なるを見て、却て精神的に之れを批評したりき、

紅葉が何が故にかく女性の暗黑面を抉摘せざりしかと言へば、こは氏が形躰美を重んじて精神美、換言すれば洞察の針を透してさぐり得べき人間核心の美に重きを置かざりし爲めに、遂にかくの如くなりし也。以下姑くその

六　形躰美と精神美

に就て論ぜんか。蓋し紅葉の如く形躰美を尊みたるものはあらざるべし。見よ紅葉がいかに人間の衣

裳や、身の圍り、動作等を精緻に、繪畫的に、分析的に、排列的に、その先天的綺麗優巧の筆を極力應用して描寫を試みたるかを。而して彼が最も得意とし誇りとしたるところは、此の衣裳、身の圍り、動作等を精緻に描きて、而してその身分、心的狀態、性格等を、象徴的に仄めかさんとしたるところにあり。其の成功したるものは

『白絹の目を一面銀絲に拾ひ、背筋は四寸巾に紅絲にて拾ひ、此に違鷹羽の定紋を金絲にて盛り上げにしたるは御簾に見立ての櫺襠なり、領には小形銀鉤を附け、五色の下糸は地を曳くばかりなる眞藥玉を釣下げたれば、八文字の高足のッしりと踏下す毎に此玉背に搖く』

の如き、最後の八文字云々の句、『伽羅枕』の佐太夫が道中姿をうつして點睛の妙を得、生々然として活虎の勢あり。かくの如きは可なれども、彼が餘りに形躰美を好むや、やゝともすれば繪畫的に過ぎ、排列的に過ぎ、分析的に過ぎて、却て讀者をして何等のイルージョンを起さしめず、唯だ綺びやかなる文字の累々然として蒐まれるを見るが如きの觀なるもの少なからず。

『連れたる女は、二十歳を二つ三つも越したるべし、銀呆返しを引き約めて、本甲蒔繪の挿櫛根深に、大粒の淡色瑪瑙に金脚の後簪、堆朱彫の玉根掛をして、髮の一髮をも亂さず、極めて快よく結ひ做したり。葡萄茶の細格子の絹御召の勝色裏の袷を着て、羽織は小紋縮緬の一紋、阿蘭陀模樣の七絲の袱紗帶に金鎖子の纖きを引き入れて、嬌かしき友禪染の襦袢の袖して口元を拭ひつゝ、四季袋を紐短かに挙げたるが、弗と此方を見向ける素顏の色蒼く、口の紅も點さて、較や、裏寂しくも花の咲過ぎたらんやうの蒲哀を帶びたれど、美目の盼たる色香尙濃かにして、漫ろ人に染むばかりなり』

の如き、讀者諸君、果してこを讀みて、一個盼たる女性を想像し得る乎。否、紅葉が現はさんとして努めたるその努力に比例し得るだけの結果は果して得らるべきか、唯だこれ呉服店の陳列品の說明を聞く以上幾何ならず、餘りに排列的ならずや、餘りに分析的ならずや、かくて文藝は繪畫の附屬物より大なること、多からざるにあらずや。かれが形體美を尊むの結果はかくの如く極端に發達して、今の例の如き、狹山と共に自殺せんとして伊香保に來れる女性お靜らしきところは毫もなきにあらずや。そのときの貴一の如き形躰の美に何等の注意力を有せざるものが、唯だ一瞥の下に看取したるらしきところは毫も無きにあらずや。かれはかくの如く形躰に成功せんとして却て精神的に破却されたり。

女性崇拜もやがて此處に起因す。彼は女性の形躰を見たり、彼は女性の暗黑面を探るべく餘りに洞察（インサイト）の力に缺けたりき。江戸的の女性が有する、華美、俠氣、まけじ魂は、夥しく彼れの嗜好を刺擊して、遂に女性の美所を描かざる能はざりしなり。『金色夜叉』の宮の如き滿枝の如き、幾んど物質的奴隷の如き性質境遇にありてすら、猶ほ且つ一方に專念一意、情人を思ひ、情人の爲めに犧牲たらんとするの意あるものにあらずや。

七　時代精神と紅葉

今日よりして紅葉が作物の跡を辿る、紅葉は慥に時代精神の描寫に努めたるものゝ如し、而かも忌憚なく言へば紅葉は此の目的を達し得ざりき、紅葉が初期の作物に於て極端に江戸氣質の發揮に努めたるも、亦は所謂江戸氣質――文字が顯はすところの如く、德川時代の江戸氣質――にして明治の東京人氣質にあらず、その晩年の『金色夜叉』等に描かれたる、お宮の如き、紅葉自身に於ては、慥かに當代の娘氣質を描寫したる如く思惟したるならんも、お宮

は斷じて明治式の女性、否極端に言へば日本の女にあらず。性格の矛盾はよし、性格の不自然はよし、人間とは矛盾せるもの、不自然のものなれば也。されど宮の如きは、不自然、矛盾等の域に入るべき人にあらで、單に空想を以て形作りたる人形にすぎず、貫一とても然り、殊に熱海海岸の貫一がお宮を說き、お宮を叱るところ、純本鄕座式の空想的一幕を小說の形に表はしたるにすぎず、紅葉は時代精神の形を描きてその時代精神の、底下の底、裡面の裡を透察せざりき。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

要するに紅葉の尊むべきところはその形式也。その江戸氣質の如き、實驗圈內を描くにあたりて、自家の筆力の最も恰適するとき、水盡きて雲起るが如く、一氣に迸涌し來たる才情双絕の境也。されば紅葉は單に思想のみを以て律すべき文人にあらず、更に之れを文章によりて月旦し、玆に初めて眞に千古の評價を下されむ、紅葉も亦一代の文豪也。單に思想を以て論ずるとき、上述の如き、今日の文界の思潮よりすれば、當時よりは大に賤買すべきものなるが如しと雖、請ふその文學的勳功は之れを次章に於て彼が文章を論ずるところに見よ。

中　その文章

第一期

人の文學的過程に對して、第一期第二期第三期等の區劃を附與すること、果して之れを月旦するに最上乘の法なるや否やを知らずと雖も、古來多くはかかる方法を取れるもの〻如し。殊に紅葉の如きは、その思想こそ多大の變遷を見ざれ、その文章の如きは、明治文章の形躰混沌未剖の際に遭遇して、種々の文躰を試み、時の風潮に隨て己れも又種々の工夫を凝らしたる時なるが故に、之れを三期に分けて論ずる事、最も妥當にして、最も興味あるが如きを見る。且つ之れを三期乃至四期に分たずんば、その變遷の甚しき、到底一時期中の一人の作と見るべからざるが如きものあり。されど其の三期といふもの、見る人の心ごゝろに依りて種々の庭徑あるべしといへども、吾人の見るところを以てすれば、最初は西鶴崇拜時代、第二は言文一致時代、第三は即ち漢文を以て骨とせる文躰によりて雅俗折衷をやり、自家創搬の一新文躰を出せるときを指すとせむ。

第一期は最も作物の多きを含む『巴波川』、『新桃花扇』の如き、比較的清楚なる時代より、『伽羅枕』の如き、濃柔絢爛を極めたる時代と、『不言不語』等の如き、古文と俳文との研究の結果の彫しく顯はれたる時代とを含む、年時を以て言へば明治二十二三年より二十八年に到る。第二期は即ち『多情多恨』を中心とせる時代にして、年時に於ては少しといへども、此間に紅葉が言文一致に對して貢献するところの多きを思へば、輕々には看過すべからざるものあり、第三期は即ち『金色夜叉』一篇を以て之れが全部を代表と見るを可なりとせむ。

第二期

『新著百種』の『二人比尼色懺悔』によりて、紅葉は文壇に聲名を馳せぬ。こは殆んど文章の功によれりと言ふべし。されば『色懺悔』以前に多少の作なきにあらずと雖、紅葉の文章を論ずべき左券として擧げて論ずべきものは『色懺悔』以下の作のみならむ。當時井原西鶴の小說の淡島寒月氏の手によりて紅葉、露伴等に傳へらるゝや、その簡勁にして警拔、而かも平淡の裡に一味淸艶の妙ありて人情の曲折を巧みに描寫するところ、太だしく當時寫實主義に傾きたる人々によりて珍重せられ、西鶴物は一時小說界文躰のヴーソリチーとなりぬ。殊に最も多く之れを祖

紹じたるは即ち紅葉、露伴の二氏にして、紅葉に於ては『色懺悔』には猶ほその俤なしといへども『巴波川』『新桃花扇』に到れば既に西鶴派の文躰はその脊髓骨となれり。試みに『新桃花扇』の一節を引かむ。

『過ぎにし昔語、今はかゝる馬鹿ものなし。わが祖父一歳京都一見の折から、東山の月に浮れての歸路、四條通を過ぐれば、古道具の露店夜燭の星を列ねたるに、此所は名に負ふ九重の帝都、場所がらとて小町か草紙洗の匹もや、耳など缺けて雨晒の木地のままに疎まれ、其所等の隅へ投遣りてあらむも知れずと、そゞろに堀出心出て、、木彫の羅漢めける老夫か店に佇みて鵜目を睜れど、何所にもあるものは錢もらひと敏捷漢にて、かうとひねりたるものも見當らざりき。』

其の他『此ぬし』の如き、『夏痩』の如き、『戀の蛻』の如き皆然り。かゝる文躰は、一種のアートとして、紅葉の如き才人が、十二分の巧みを凝らすに最も適したる如し。

されどかゝる文躰は西鶴の如き警拔無比の奇才にして初めて、複雜なる人情の曲折を描寫する事を得れ、若し單にその文躰の巧妙にのみ眩惑せられて、西鶴的奇才にあらざるものが、斯の如き文躰を用ふるとすれば必らず其處に多大の弊を招致せざる能はず。西鶴の文は警句の連續也。警句にして此の文躰初めて生く。若し警句的才能なくして、此の助動詞少なく、クローズ短かきものを用ふれば、思ふこと言ひ盡し得ずして、短鞭馬腹に及び難く、冗長の弊あるもの此の文躰を用ふれば、アート多きに過ぎて、思ふ事を嬌飾するに過ぎて、長鞭却て馬腹に達し易からざるの恨無からず、紅葉は才人也、かゝる文體に一意耽溺して、西鶴翁が後塵のみこれ拜せんは忍ぶところにあらず、すでに『二人女房』に到りて當代流行の言文一致體を試みんと企てぬ。されど『二人女房』は純然たる言文一致にあらずして、半は雅俗折衷半は言文一致と言へる、一種奇絶の作物となれり。當時いかに紅葉が文體といへるものにつきて、血を刻り心を削りしかを知るに足らむ。

されど才人紅葉は猶ほ容易く西鶴派の雅俗折衷を捨つるものにあらず、开は猶此の一文體の蘊奥を極め盡し、その潭底にある物の悉くを浚ひ盡したる後にあらざれば也。先づ『伽羅枕』は出てぬ。次て『おぼろ舟』も『三人妻』も同じ文體を以て試みられぬ。『伽羅枕』の文體は、本篇上の紅葉の思想を論ずる章に數ヶ所引用したれば之れを參照せられるれば、ほぼその一斑を窺ふを得む。之れと同徑路にあるものなれども、茲に同時代所作の一節を拔かむ、こは紅葉が自然を見、自然を描寫するに、當時いかなる觀察と方法とを取りしかを見るに最も恰當なれば也。

『九月十三夜の月清みて磨きたる如し。風爽かに渡りて今結髮の鬢に吹き入り、湯あがりの溫肌を拭へる餘は來過し群立の梢に鳴るなり。踏分くる小徑の八重葎には、月影を宿せる露のさら〳〵と亂れたるが指頭に冷つき、虫の千萬聲前後に音を爭ふなど、秋節の骨體と云ふ處を我一人が物にして閑行のおもしろさ、一直線に見通しの木立一簇曇れる中に一點星の燈火の影を我宿と眺めて一屈曲雜木山の下なる細道を傳ひ行けば、月の位置變りて今まで見ぬ遠景、畫を展べる如し』

（前章『紅葉の思想』の次に、別に紅葉の自然觀を論すべき豫定なりしも紅葉の自然觀は取り立て、論ずべき程の價値なかりしが故に之れを略しぬ。なべての國の文學史が、その『自然主義』なるものが起るべき前に有する、一種古典的の自然の描寫の如く、紅葉のそれも、何等清新なるところなく、何等生命のやどれるところなし。こは紅葉が旅行好きに似もやらず、眞に自然をながめ、眞に自然の一部分に自己を汨入して、彼の大自然の中に又一個自己の生命の宿れるを見る如き、生命ある近代的の自然觀を有せず、唯だ漫に春といふ感じ、秋といふ感じ、乃至は

淋し、快し、長閑し等といふ感じを表はさんが爲めの標象として、春夏秋冬の風物を、言葉巧みに點出したるに過ぎざれば也。）

かれは斯の如くして西鶴の長所を取りて自己のオヂリナリチーをも之れに加へ來れりと雖。性來『凝り性』にして文章の爲めに身心を忘るる彼れは、更に古文、俳文の研究を重ね、此處に『不言不語』の如き文躰を試みぬ。『不言不語』を書かんが爲めには、彼は『源氏物語』を再三熟讀したりと言へり。吾人は此の篇の飜案なる事を聞けりといへども、『源氏』夕顔の卷の筆致のよく此篇に似通ひたるものあるを認む。殊にその文躰の如き、從來のものとは幾んど其の趣を異にし、古文研究の影響著しく顯はれ、西鶴調の如く、名詞どめの如き躰なくして却て『給ふ』、『ぞるそれ』、『たまひけり』等の古文躰を加味し來れり。その一節を引用せむ、

『其事と胸に覺あれば、赧む顔を打背けて、此には得堪へず起たむとせしを、旦那樣の引住め給ひて、嘘の數を言へとて肯き給はず、爲む無くて。何も出てすと申せしに、奥樣、彼分にては一つにはあらじ、三つなるべし。之は民樣に伺はむとありければ、御客樣は頭を撫でゝ、未だ三つまでにはあらねど、一つにてはあらじ、一つ半〳〵とて立たせ給ひければ、一つ半にては寧ろ二つに近しとて、旦那樣は大笑あそばしけり。』

の如き、センテンスも西鶴の如く、鐵片をきざみたる如く、短かくして力あるものにはあらで、やゝ長くなりぬ。されどかくの如く雅俗折衷に發展し盡して。すでに有る限りを極めたるに近きや、此處に柳暗つきて花明來る。彼は全然言文一致躰に走れり。

第三期

言文一致躰の文章は『不言不語』以前に是れなきにあらず、前章にのべたる『二人女房』を先驅として

『隣の女』も『冷熱』も、輕妙なる言文一致を以て之れをやりぬ。『二人女房』は猶ほ未成品の感あれども、『隣の女』、『冷熱』の如きは、從來、雅俗折衷といへる文躰、終には西鶴脈の筆致に大なる桎格を受けて、描寫の細に入るを得ざりし點まゝ無きにあらざりしを、言文一致の自由なる形を借りて、彼が才は又別途に發展しぬ。別途とは何ぞや。輕妙なる描寫、殊に男女の會話、動作等を描くの微細の穿鑿に入れる事これ也。されど雅俗折衷躰を借りて悲涼の事實を描かんとするにあたりてさへ、輕滑洒落の筆路となり易かりし彼は、自由な言文一致躰を取るとともに、輕妙はやがて、餘りに輕く、餘りに浮きたるものとなるものとなるの弊を伴ひ來れるものなきにあらず。

『お增は戴いた物を帶の間へ挿入れて、賴まれた物を懐へ移して、内へ入る出合頭、臺所の口で、はたと炊婢の老婢に行遭ふと、

『おや〳〵、お前さん何處にお在だの』

『其處にさ』と兎脱る後から、とんと一つ肩を拊いて

『好可減に浮氣をおしなさいよ』

『あら、厭なお客樣さんぢやないか、他聞のわるい』

『はい、はい、御免なさいまし、あの人が附いてると思つて氣の強いこと、おゝ、可恐、可恐』

と首を掉りながら、匆々と女部屋の方へ行く。

折から奥の六疊で主婦の呼ぶ聲。

『增、增や』

『はい、はい』と二歩ばかりも駈出すと、

『其處の煙草を少し出しておくれな』

お增は早速納戸の袋戸棚から煙草の箱を出して持つて行くと、主婦は蝸牛の殼のやうに炬燵を扣へて、長々と腹這ひに臥倒つて、赤本の探偵小説を見て居たが、跫音を聞きつけると、倦怠さうに臥

回りながら

『お前今迄何處に居たの』

『私でございますか』とラムプの側にどつさりと坐つて、

『あの、御新樣』といふ拍子に兩膝をぽんと拍つ。

『また炬燵へ入れてくれかい。ちつと裁縫をおしなね、此夜長に。お前、此間あげた帶側はどうおしだ、心はもう張つてあるんぢやないか』

『これから懸るんで御坐いますけれど』

『ぢや炬燵は十分の間だよ。入ると直に坐睡をするから否さ』

『あれ、炬燵ぢやございませんよ。少しお目に懸けますものが』

『又何か買つたのかい、お前は眞箇に浪費が所好だよ』

『あれ、また違ひました』とお增は搖り上げて、面白がる。

『何だよ』と主婦も隱されるほど見たくなる。

『頼まれ物で御坐います』ふゝと笑ふ

『頼まれものとは』

『四角なもので、白いもので書いたもので』

『そんな事を云つたつて解りやしない、物は何でも可いから誰から頼まれたのさ』

『いの字でございます』

『いの字？、いの字ぢや解らない、その次は』

『いの字』

『亦いの字かい』

『いの字が二つ續くのでございますよ』

『ぢや（いゝ）だね』と姑く考へて、

『えゝ、もう憤れついた！　言つておしまひなね』

主婦の急ぐほどお增は落着いて

『其次がひて御坐います』

『いゝひ？』

『其の次がとの字』

『いゝひと？。馬鹿におしてないよ』

飴細工、引のばし冗長等の批難を八方より受けたるも此の時代なりき。次に『多情多恨』に入る、『多情多恨』は紅葉が言文一致躰にて物せる作物中の傑作なるのみならず、實に紅葉一代の傑作也。紅葉も亦常にしか自ら信じ自ら言へりきといふ。『多情多恨』の文章もやゝ冗長の嫌なきにあらねど、『隣の女』、『冷熱』等に見る如き芥蔕や渣滓は殆んど拂ひのけられて、當代言文一致躰の間にありては、その苦心の結果たるもさる事ながら、言に瑩然として完玉の如きを見る。紅葉が在來十年の作、何れの篇を以て見るも、文章の點に於ては、千練萬鍛、一隋音なしと雖、その熟練の果は此の『多情多恨』に於てほとんど至まる。『多情多恨』以前には、同じく完璧といへども、文章上に所謂山なるものありて、夥しく力の充實せる點と然らざる點とありきといへども、『多情多恨』の文は汪洋として大河の如し、何れをその範例として拔くべきかを知らざる也。吾人は唯だ紅葉が試みたる言文一致躰は『多情多恨』に於て殆んど完成せられたりと言ひてやまん。

第三期

次て來るべきものは漢語脈を多く交へたる『金色夜叉』の文章これ也。彼が文章上に費やせる向上進歩の念は、此處に又言文一致、雅俗折衷躰（在來の）よりは、一歩蟬脫して、自家獨特の新機軸あるものを出さんとして、最も勁く、美しく、華々しく、力ある文章を以て、最も自由に描寫を試みん事を企てぬ。彼が『多情多恨』に於て試みたる言文一致躰の如きは、現代の文人の、今日に於ては之れ以上に出づるもの多かるべしと雖、『金色夜叉』の如きに到ては、和文、漢語、雅言、俗語を自由自在に頗使活用し、日本の文章を遣る事に於て、その巧の極に到り盡し

たる人にあらざるよりは到底、之を摸すべからざるものありて存す。

『人此裏に立ちて寥々冥々たる四望の間に、爭てか那の世間あり、社會あり、都あり、町ある事を想得べき。九重の天、八際の地、始めて渾沌の境を出てたりと雖も、萬物未だ盡く化生せず、風は試みに吹き、星は新に輝ける一大荒原の、何等の旨意も、秩序も、趣味も無くて、唯濫に邈く横はれるに過ぎざる哉。日の中は宛然沸くが如く樂み、謳ひ、醉ひ、戲れ、歡び、笑ひ、語り、興ぜし人人よ、彼等は儚くも夏果てし子孑の形を歛めて、今將何處に如何にして在るかを疑はざらんとするも難からずや。多時靜なりし後、遙に拍子木の音は聞えぬ。其の響の消ゆる頃忽ち一點の燈火は見え初めしが、搖々と町の盡頭を横截りて失せぬ。再び寒き風は寂しき星月夜を揖に吹くのみなりけり。唯有る小路の湯屋は仕舞を急ぎて、廂間の下水口より噴出づる湯氣は一團の白き雲を舞ひ立てて、心地惡き微溫の四方に溢るゝと與に、垢臭き惡氣の盛に迸るに遭へる網引の車あり、勢ひて角より曲りにければ、避くべき遑無くて其中を駈拔けたり。

こは『金色夜叉』第一卷の冒頭の一節なり。こは猶ほかゝる文體の創搬期なれば、微細なる點を叙するには、やゝ適せぬの恨をまぬがれざれど、而かも『唯有る小路の……云々』のところ、寫生文も亦及び易からざるの妙あるにあらずや。殊に『金色夜叉』は卷を追ひ章を重ぬるに隨つて、此の大體の熟練、いよ〳〵熟し、いよ〳〵自在となり、その後篇の『放火』を叙す一段の如き、かゝる漢文脈を以てせる文章を以て、かゝる微細の叙寫を敢てせるもの、實に空前にして絶後なりといふも誣ひざらんとす。やゝ長けれども此處にこれを引用して、名玉の光を映さむ。

『風は猶も邪に吹募りて、高き梢は箒の掃くが如く撓められ。疎に散れる星の數は終に吹下されぬべく、層々凝れる寒は殆んど有らん限の生氣を吸盡して、さらぬだに陰森たる夜色は益々冥く、益々凄じからんとす。忽ち此の黑暗々を劈きて、鰐淵が裏木戸の邊に一道の光は揚りぬ。低く發りて物に遮られたれば、何の火とも辨へ難くて、其の迸發の朱く烟れる中に、母家と土藏との影は朧に顯はるゝともなく奪はれて、瞬くばかりに消失せしは、風の强きに吹敗れたるなり。良有りて、同じほどの火影の又映ふと見れば、早くも薄れ行きて、こたびは燃えも揚らず、消えも遣らで、少時明を保ちたりしが、風の慳の絶間を偸みて、閃々と納屋の板戸を傳ひ、始めて騰れる焰は炳然として四邊を照せり。塀際に添ひて人の形動くと見えしが、仍暗くて了然ならず。

歎息の間にして火の手は縱横に莖りつゝ、納屋の内に亂入れば、噴出づる黑烟の渦は或は頽れ、或は疊みて、其の外を引蟠むと與に、見え遍りし家も土藏も堆き暗黯の底に沒して、闇は焰に破られ、焰は烟に揉立てられ、烟は更に風の爲めに碎かれつゝも、蒸出す勢の夥しければ、猶ほ所狹く漲りて、文目も分かず攪亂れたる中より爆然と鳴りて、天も焦げよと納屋は一面の猛火と變じてけり』

この放火の火勢の漸々闇を破りて强くなり行くところ、紅葉氏の大手腕にあらずんば到底かくの如く描く能はず、その文字の洗練も亦實に足りて、一句動かすべからず、一字增減すべからず。紅葉が所謂絹ぶるいにかけたる文章は、この綺麗絢爛の極に達しぬ。明治の今後いかばかりの名文家輩出すとも到底これ以上の絢爛を極むる事は難からむ。紅葉に於てもかゝる文躰に於ては之れを以てその第一峰上に立てるものとや思ひけむ、文章上の向上心に富みたる彼は、更に一轉化せざるを得ざりし。宙外氏の語るとと

ころに依れば、紅葉は氏に語りて『どうも今度の文章は(「金色夜叉」)は顯才新誌でいけない、之れを書き終つたら是非言文一致に立ち歸つて、今までのとは違ふ、もう少し綾のある文を書いて見やう。理想的言文一致で是非書いて見やうと思ふ』と言へりきとか。然れば猶ほ紅葉は之れ以上に、文章に一大發展をなし、以て明治文章に更に貢献するところあらんとせしに、此の一卷猶ほ結末をなさずして溘焉として行く、惜しむべきの至にあらずや。

以上紅葉の文章を三期にわかちて論じぬ。その文學界に對する紅葉が勳功と位置とは次章に於て之れを說かむ。

下　紅葉の文勳

紅葉の思想と文章とはほゞ之れを說きぬ。次では紅葉の文壇に對する勳功を說かむ。第一に紅葉の勳功として擧ぐべきは、明治の文壇なほ燒硝不毛の蒙昧期に屬せるときにあたりて、德川遺蘖の戲作者肌を排し、西鶴一流の寫實を標榜して、兎に角にも明治文壇當初に、明治文學らしき色を設彩せしこと是れ也、こは逍遙博士の最も多く負ふべきところならんも、その作物に於ては紅葉を以て隨一に押さゞる能はず。第二は文章界に於ける功勞なり。紅葉の思想はさまでに多く明治文壇に貢献せりとは言ふべからざらんも、誰れか紅葉の文章の明治の文壇に貢献することの多大なるを拒否せむ。紅葉は屢々門下生に語りて、わが體は文章を裏打ちがしてあると言ひけるとか、げに紅葉の文章は明治の文壇が生みたる最も珍らしく美しきものなりき。

紅葉が文章の爲めに爲せし苦心の意外なるや、到底尋常人が思ひ及ぶところにあらず、又その功勞の大なる事も到底想像の上にあり。日本文字の少きを憂ひて、漢語の熟字を用ゐて之れに傍訓をふること、

紅葉の手を以て殆んど完成せられぬ。殊に紅葉の凝り性なるや、支那小說にあるところの、珍らしく、活字模樣の面白きものを取り來りて之れを日本の傍訓にあて、那樣、恁麼、豈夫、這麼等の文字を作り、白木の位牌を妙ならずとして榛の位牌といふ文字を作り、人力車は面白からずとして俥といふ字を作る等、文章の爲めに費せる彼が苦心はいふばかりもなかりき。宙外氏曰く『故紅葉は文章報國の四字を座右銘にして居られたゞけあつて、實に文章に忠實な人で、之れが爲めには非常に刻苦せられ、不斷に推叩又推叩といふ態度であつた事は、何人も知るところである。氏が横寺町の書齋を訪うた者は、氏の机の前に當たる障子の硝子に、折々種々な文字の縱横に書いてあるのを目擊したであらう。彼は讀書その他の機會に、常に求めて居た、或る思想に對する或妥當な文字を不圖搜し當てた時に、備忘の爲めに書かれたのであつた。彼の中には落想その他に關するものも、無論雜つて居たであらうが、主として當字の妥當なのを選んだのが大部分を占めて居たかと記臆する。氏は當字などは假名をたよりに讀むのだから何でも可いと云ふ說には大反對で、苟くも漢字を使ふ以上は充分穿鑿して出來るだけ雅馴な、妥當なのを取るべきだといふ意見で、決して粗略にはせられなかつた。其の一例を擧げると、氏は着物のシマといふ字には大に苦んでゐた。普通に縞と書くが調べて見ると、シマの義は更に無く、縞衣玄裳などゝ使つて白色の衣だ。そこで、已を得ず。一時柳條にシマの假名をふつて居た。けれども其れにも滿足せず、晩年には「島から渡つた織物の義だから、寧糸扁に島の新字を造つて見たが、却て便利てよい」との說で、之れを用ひて居られた」と、良匠の苦心や字奚し墨泣く、又一佳話といふべし。かくの如きもの明治の文章界にその影響を與へて、漢字を自由に頤使する事、言文一致體の應用、その他あらゆる文章上に多

大の補益をなしぬ。第三に紅葉が功勳として擧ぐべきは、その門下子弟の養成にして、現に風葉、秋聲、鏡花、春葉の四氏の如き、嚴として文壇の重鎭たり。その門下に對する親切の如き、實父實兄よりもまされるものありて、而してその傾向については各個人の自由に任せたるが如き、實に文藝の師としては古今その匹類に罕也。かるが故に風葉、秋聲二氏の如きは、舊寫實主義の餘弊より蟬脫してよく、現時の

思潮にも一家をなすを得たり。文藝界のリーダーとして此の人の亡きは明治文壇の恨事と言ふべし。

以上の諸論、紅葉の文士としての價値を評價するに猶ほ十分ならず、唯だ吾人が見たるところを記したるのみ。故人に對して罪を得る少からざらむ。遺靈幸に吾人が微衷を入れて、之れを寬恕せよ。

第四章　逸話

滑稽類纂　序

我が友京の藁兵衛は生粋江戸前の才子なり。夙に落語の光風霽月の胸懷を維ほしいまゝにして、酒三百年の文字を以來我江戸滅亡し、滑稽のあり舌頭に流盡くす。今日、獨り此の好漢の魂を傳へて妙々たるの棄名太平樂を並べ、筆下に落ちさ嫡嫡とるは我輩の爲に長へに頗るに物看板を下ぐるもの謂ひつべく、因りて三斗の金飲を箔を云ふと爾。

紅葉山人

四逸話

交遊娯樂等

▲變な奴　氏の病中、胃癌の特効藥なる白屈菜に就きても、大に盡力したる翁屋藥店の主人安川某、神田裏神保町に開業する時、豫ねて硯友社連中とも交際ありし處より、其開業式には社の連中をも招ぎたるが社の連中は又假裝會を催し、各自思ひ〳〵の風俗して來れと云ふ事になり、巖谷小波氏は其打合せの爲め、例の藥店に至れり。と見る豫備門の汚き制服を着し、怪しげなるズックの靴を穿ち、手には紙の卷きたる三尺許なる物を携へ、眼をキョロづけながら、左の肩をあげて猫脊になり入來る者あり、小波氏も變な奴と思ひしが、よく話合へば之れなん尾崎紅葉氏なりけり。其卷きたるは何ぞと問へば、翁屋開店祝のビラ若くはプワンシーボールの當日に鳥渡した演劇めけるもの〳〵催しある由にて、其書割を書く爲め態々買ひ込みて來れるなり。氏は凡て斯かる事なすを好めり。

小波氏が初めて氏に會へるは明治二十年頃、まだ『我樂多文庫』の寶品とならざりし以前にて、石橋思案氏を介して硯友社に入り、初めて小說を作りて送れるを、氏が撿定して揭載せりと云ふ。斯くて二人は文の上にて相知るに至れるが、小波氏が初めて氏を見たるは實に彼の翁屋藥店開業前なりき。而も小波氏の目には、一箇變な奴として映ぜしなり。何ぞ圖らん後年に至り硯友社の同人として、殊に俳句仲間として無二の親交を結び、終焉に至るまで兄弟も啻ならざる間柄とならんとは。

▲君も句を作るか　氏が三田英學校より大學豫備

門に入れる時、進文學社よりは川上眉山氏亦同門に入り來れり。初めは無論互に文藝の嗜ありとも知る筈なく、眉山氏も唯だ尾崎は、機智に富み才氣の勝ちたる生徒なり位を知れるのみなりしが、一日偶然にも眉山氏は氏と隣席して講義を聞けり。其時氏が筆記帳の端に發句めきたるものを記せしを見て、「や、君も句を作るのか」と云ふを手ほどき、句の話が出て其れを動機に「それぢや一度遊びに來給へ」「よし行かう」となり遂に二人の深交を形づくるに及びぬ。

▲一見舊知の如し　後藤宙外氏が抱月、天外、青々園、不倒の諸氏と『新著月刊』を發行せるは明治三十年の春なりき。皆年少氣鋭若き血潮は内に溢り、白髪何の尊ぞ、年少何の咎ぞと氣負へる頃とて、當時既に小説界一派の牛耳を執れる紅葉、露伴の諸氏に、敢へて循突うの野心はなきまでも、決して其援助を乞ふなどを潔しとせず、從つて其第一號發刊の祝宴を開きたる場にも、此二氏は招待せざりき。

（二）

其後春陽堂より『春陽文庫』發行せられ、編輯主任尾崎紅葉とありしが、其實際の編輯者たる堀紫山氏より『新著月刊』に對し、盛んに攻撃の矢を放ちたるに、寶言葉に買言葉、『新著月刊』の同人等亦氏に對して盛んに應戰せり。然るに三十年夏『新著月刊』に『作家苦心談』を掲載する事となり、宙外氏は牛込横寺町に氏を訪へり。以前の事もあり宙外氏も内心疑懼の念を抱きて、或は門前拂に逢ひはせずや、さなくも感情を害し居るならんと思ひ居たりしに、意外にも直ちに上れと書齋に通され、非常に心よく其創作に就て、由來、着想、種々の苦心等長時間談されたる態度、心に些の城壁を設けず、一見舊知の如きものありしより、宙外氏が初め考へしとは甚しく相違し度量の大なる快活なる人と知れ、其後二氏の間は分つべからざるものとなれり。

世間にては二氏の間を想像して、一方は早稲田派、一方を硯友社派とし、其間何等か反目せるが如くに考ふるものもありしが、文士の交際上決して黨派などのあるべき筈なく、意氣の投合は學校の相違、出身の徑路の相違などによりて、其結合力を害せられざる也。されば兩氏の親交は氏の死に至るまで、嘗て變る事なく、氏の病中門生相寄り慰問として『換菓篇』を奉らんとするや、宙外氏亦『御信心』の作を付したる程なりき。

▲文友會　明治十六七年の頃、大學豫備門にて文を以て樂とする連中により、『文友會』なるもの起されぬ。其仲間五六人ありしか、其發企者は丸岡九華氏にして、氏も亦其仲間の一人なりき。九華氏は其後商業學校に轉じ、中途にして筆を投じぬ。硯友社の爲めには惜しき人を殺したれど、本人の爲めには其方益なりしならんとは、氏の晩年談れる處なり。

彼の硯友社の起らんとする時は、久我氏と氏とは六七歳の頃より交あり、眞の竹馬の友にて、病中も大に盡力したる人なり、九華氏に勸めて入社せしめしなりと云ふ。

▲彼は面白い奴　石橋思案氏が初めて氏に逢ひしも亦大學豫備門時代なりき。之れより先思案氏東京師範學校附屬小學校《今のお茶の水の師範學校附屬中學校所在地》に居る頃よりの友人久我龜石氏が、今度豫備門へ尾崎德太郎と云ふ男入學せり、中々面白い男なれば交際しては如何と思案氏に勸めたるより兩氏の交は初まりぬ。互に逢ふて話すに及び、双方より面白い奴と思ひ思はれ、まだ入學當時の他に友人も少く、二人は一見舊知の如く意氣投合して、遂に兄弟以上の中とはなれり。

其初會見の翌年即ち明治十七年の七月には、今の工學士池田實太郎氏と三人にて江之島に遊びし事あり。其頃はまだ汽車は横濱迄にて、神奈川にて下車し後はガタ馬車に搖られて藤澤まで、其れよりはてくてくの歩行にて江之島に至り、鎌倉、金澤、横須賀を廻り、四日目に歸京せり。之れ兩氏の親密とな

（三）

れる動機にして、思案氏其行の紀行を氏に示せるに「石橋！こんな物を書くやうになつたか」とて喜び、添削し評語を入れしとぞ。其後『我樂多文庫』の發行となり、又其販賣となり、兩氏は全力を擧げて之れが爲めに盡せり。

▲あばれ者　明治十五年の頃、東京府の構内に第二中學と云ふあり。之れ氏の入學せる學校にして。其時二級上に山田武太郎なる少年ありき。此少年は其級中の年少者ながら、漢文、國文、和歌、詩、戯作も作れば、字も善く、畫にも亦中々巧みにて、兎に角多藝多能の才子なるが上に學科も中以上なれば校中評判の少年なりき。然るに氏は十四五才の頃には、なか〳〵の亂暴れものにて、課業の時間を逃げ出しては運動場に飛びまはり、瓦廻、軟毬、石ぶつけ、相撲、撃劍、凡そ惡作戯と云ふ惡作戯はなさぬものなかりし程なりき。之れに反し山田は極めて溫厚にして、運動場へ出づるも氏等の中間には入らず、

（四）

超然として獨り靜かに散歩などし、全然年少詩人の俤ありしと云ふ。此の氷炭ほど相違せる性格の二少年は、何時如何なる動機をもつてか、遂に親友とはなれり。尤も五六才の時分、同じ長家の一軒置きの隣同志にて、共に遊べる事もありしとかにて、其後益々親密となり、學校の登降は云ふまでもなく、學校外にても互に訪ひつ訪はれつするに至りぬ。

其れより間もなく氏は三田英學校に入學し、次て大學豫備門の二年間を經るまで、兩人の音信は不通なりき。然るに氏が二級に進める時、山田武太郎氏は四級に入り來れり。久濶の二人が顏を見合はせし時は、思はず可懷涙の催せられ、手に手を採りて直ちに舊交は溫められ、共に居所の芝なるを幸ひ、相携へて通學の途次、文藝の議論を爭はすに至れり。之なん後の山田美妙齋氏其人なりき。

此時既に山田氏は小說の筆に馴れ、『堅琴草子』の一篇を作り、三歲の上なる氏をば、あッと云はせし手腕を有せり。兩氏はやがて硯友社を成立せしめぬ。されど明治廿一年美妙氏は、金港堂の聘に應じて硯友社を裏切し、氏をば孤城に殘し置きて、新に出てたる『都の花』の卷頭文に一世の注目を引けり。流石の氏も此れには一方ならず憤怒し、遂に自ら筆を取り猛烈なる絶交狀を送れり。

爾來二十年、氏の終焉に至るまで、兩氏の間は氷解せずして止みぬ。

▲頻りに辯じて居る人　氏のまだ飯田町にある頃、即ち明治二十一年十一月、山縣悌三郎氏『少年園』を發行せり。當時廣津柳浪氏は寒貧書生にて、谷中團子坂に寓し小說『大和錦』を編輯し居たりしが、『少年園』の編輯に高橋と云ふ人あり、其人と柳浪氏とはかねて交ありし處より、『少年園』の發行祝宴が下谷池の端長酡亭（今の湖心亭）に於て催されし時、招かれて其席に列りし事ありき。其時席上を見渡せば、彼の高橋某を除くの外には一人として知人なく、只だ其中の一人頻りに辯じて居る若い人あり、而して柳浪氏はまだ其の誰なるやは知らねども、人の『紅葉山人』『尾崎さん』など云ふを聞き、文章上にて見たる紅葉山人は斯くも若き人にはあらずと思ひ居たりしが、遂に高橋某によりて其の紅葉山人に紹介せられて一驚を吃したりと云ふ。

其後同二十二年の頃、柳浪氏は『新著百種』中に『殘菊』を書き、其原稿料の大部分を親族にやりて家をもたせ、殘金七圓五十錢にて、飯田町に轉居せり。其時氏は自分の書生時代に使用せし机、火鉢の二品をば、轉宅祝に送れりと云ふ。柳浪氏は其當時非常に貧困の身なりしかば、氏は吉岡書店に談合して、『小文學』を發行し、柳浪氏を以て編輯人となせり。かく人の窮するを見れば、何か仕事を拵へて與ふると云ふ、至つて同情に富める敬服すべき人なりき。

▲鼠の巢のやうな室　『新著百種』と云へば氏が出世作を掲載せる雜誌にして、其頃文壇の一勢力とな

れるものなるが、氏は其挿繪を頼む爲め富士見町の薄闇き長屋に武内桂舟氏を訪れぬ。此緣にて兩氏は長き親交を結ぶに至れるなり。氏は後人に語りて曰く、余の武内を知れる初めは、書の方よりも其人物に惚れたり。當時武内は富士見町の長屋の鼠の巣の如き室に燻りて居ながら、太平樂を並べて赤貧など意に介する風なかりし元氣は、又た世の常のものにはあらざりき、と。武内氏は硯友社にても比較的古き方にて、且つ氏の死に至るまで、變らざる交りを續けたる人なり。

▲六法を踏むやうな手付　『我樂多文庫』時代に水蔭亭主人と名宣りし江見水蔭氏は、小波氏とは杉浦氏の稱好塾に於ける莫逆の友にて、初めて硯友社に入る時も小波氏の紹介によれり。水蔭亭主人の素志は、萬卷の書を讀まずんば、須らく千里の道を行くべしと云ふにて、常に好みて山川を跋渉し、内に至れば必ず筆を取りて物書く好者、其の始めて社を訪へる時は、紺羅紗の古羽織に托鉢僧の如き大笠を冠り、六法を踏む如き手付して入り込めるには、流石の氏も一驚したりと云ふ。

▲交友　交際は廣きが如くにして　割合に狹まかりき。之れ氏は非常に自我の強き性にて、自分よりも目上のものに對し、ちやほや心にもなき諂を呈し、或は氣乘する事の嫌ひなりし爲め、其交際は多く對當の者及び目下の者なりし。

▲君僕の親友　君僕と云ひて、互に解け打隔てなき交際をなせるは、小波、思案、其他二三氏に過ず、彼の柳浪、岡田博士などとは貴方私の交際ぶりなりき

▲干渉好き　友人に對しては、非常に親切にして世話する爲めには、殆んど我れを忘れて働くと云ふ程なりしが、從つて友人の惡事は又た心より怒り、正面向つて忠告をなし、少しも憚る處あらざりき。之れが爲め反つて世の誤解をも招ける事も、人と喧嘩せる事も少からざりき。但し其怒りも決して長く

心に持つやうの事とてはなく、一旦怒りてそれを終れば忽ちもとの心に立歸り、以前よりは反つて肝膽相照らすに至ると云ふ風なりき。されば友人にして氏の忠告を受けざるものは、殆ど無しと稱するも誣言にはあらぬ程なり。皆此の忠告には耳を傾けざるなく、氏に對しては既に一歩を讓れるもののみにて、誰れありて反對に氏に忠告を試むるものはあらざりき。唯だ岡田虚心(博士)のみは、其職の法律にある程ありて、頭腦冷靜にて、時折は直言する事ありしが、氏も岡田氏には一目を置き、其明晰なる頭腦のよく事理を判斷する點に常に敬服し居たり。

▲泣いて諫む　一日小波氏に對し例の忠告を初めたるが忠告さるゝ本人は別に心にも止ず聞き居るに氏はほろ〳〵と涙を垂れ、諄々として說いて倦まざるには、小波氏も今更の如く其厚情を感謝せりとぞ。

▲足の裏を搔き合ふ　明治二十二年四月氏と小波氏と打つれて、湯河原に遊べる事は前にも記したるが、其時は互に原稿用紙を携へ行き、大に書かん計畫なりしも、身躰だれて思ふやうに興浮ばず、毎日毎日山歩き、ネツキなどに無聊を慰め居たるが、ふと一日『搔きッこをしやう」「宜からう」と云ふ事になり、二人は蒲團の上に正反對に寢ながら、火箸もて足の裏を搔き、「此處か」「もう少し上だ」などと盛んに搔きッこをしたる事あり。

▲硯友社の文士劇　明治二十三年一月五日と云へば一昔も二昔も以前の事なり、今日に至り頻りに文士演劇などの流行を見れど、其源は遠く此頃より發せるものか。即ち硯友社の連中相集り、小石川は佐藤某の家の庭を舞臺とし、稽古は其頃思案氏の別莊の根岸にありしを幸ひ、之にて充分練習し中々の大仕掛なりき。

其衣裳は白布にて製し、大晦日に桂舟氏の家にて繪の具をつけ、大なる岩の書割など牛込北町にありし氏の家の庭にて塗り上げしと云ふ。さて其下題は

と云へば、『增補太平記』。是れは片岡八郎が戰死して幽靈の出づる場所、其次に柳浪氏作の『積怨切子燈籠』。其筋は九州の話にて仇討ものなり。宗虎丸と云ふもの女に化けて良民に養はれ居たるが、盆踊の夜仇敵を殺すと云ふ、二三幕のもの。之等皆脚本は水蔭氏の手になる。終狂言は『花競八才子』にて八人の男出づ、つらねは各自分の作を集めて作る事となり、氏などは中々多かりき。殘らずにて六幕、難しの眞物を入れて、非常に盛なるものなりき。

此催しにも氏は卒先して采配を振り、終の『花競八才子』には自ら出演し、『色懺悔』の戰場の卷などはいち早く劇に登せたりき。

▲名流との會見　金港堂より發行せる『都の花』に、露伴氏の『露團々』の掲載せられ、露伴と云ふ名のみは知れるもまだ一面識もあらざりしが、間もなく淡島寒月氏の宅にて面會せり。又本郷眞砂町へ氏一人にて出掛け坪内逍遙氏に面會せるも此頃の事なり。其後やがて須藤南翠、森田思軒、巫庭篁村の諸氏とも面會せりと云ふ。元來氏は自らも云へる如く「飛行自在」の方にて至る處に歩きまはり、彼の山田美妙齋等出嫌の人とは、若きより趣を異にせりとぞ。

▲珍らしい話があるよ　大橋乙羽氏は始め二橋散史と號し、石橋思案氏を便りて硯友社に來れるが、其頃は好んで彼の『纍卵之東洋』的悲憤文字を書ける頃なりしが、遂に氏とも一方ならぬ交誼を結ぶ事となりぬ。かくて明治二十七年の秋、京都の新聞にありし小波氏が、博文館より聘せられて歸京するや、紅葉館にて歡迎會のありし席上、氏は小波氏に私に耳打して曰く、「君、珍らしい話があるよ、波邊乙羽は博文館の養子になるぜ。而して此の事は僕の他には、誰れも知つて居ない。」と。其媒妁は全く氏のなせるものにて、小波氏が博文館に入る事になりしも、乙羽氏が養子になる事も、皆氏の肝煎なりしなり。

▲罵倒と警句　少し氣に入らぬ事あれば、面と向つて誰れにても頭ごなしに罵倒するが氏の性質にて之れが爲めに氏を解したるものにも誤解せられたる程なるが、苟くも氏の門に至りて先生と云ふ程のものは、何時までも子供あしらひにし、少し氣に染まねば忽ち罵倒する。風葉、鏡花の諸氏などは實に側の見る目も氣の毒なるまでに叱られたるものなり。それは文章の上のみならず、少しにても間抜の事あらば、後とは云はず其場にて、居たたまれぬ程の惡口雜言、而も其れが二時間とは續かずして、一時はなぐり倒すやうなる權幕にても、當人が少さくなりて玄關に悄げて居れば、氏は二階より下りて「おい湯に行かう」と云ふ調子。其容子は今の如き烈火の如く憤れるものとは決して思はれざる也。而も亦其諄々たる小言が、明快なる辯舌にて警句百出、人の肝を貫くもの、假令へば何か損じて、「此れが破損れました。」と云へば「何、破損れたんぢやない、破損したんだらう。」と云ふ筆法、一言にしてぐうの音も出てざるなり。

時には餘り警句の巧みに出づる爲め、小言を聞きながら思はず笑ひ出す事あり、其時は又た、「叱られて笑ふ奴があるか。」と叱責の上かけ、時によれば氏自らも、自身の警句に笑ひ出して了ふ事さへありしと云ふ。

▲日本一　文祿堂主人とは京の蘐兵衛といへる頃よりの親友にて、氏が『仇浪』を同堂より出版せるにあたり、氏が書籍の体裁に頻りに苦心せるを、文祿堂は莞爾として、御安心なさいまし、貴下の小說が日本一なら、意匠はわッしが日本一ですと、二人一時に大笑せりと云ふ。

▲机の横の紙片　氏が机の横には幅三分許に剪りたる多くの紙片置かれたり。こは其の原稿を書くに當り、書きては消し消しては其紙を張り被ぶせて書き正し、又消しては張り被ぶせて書き正すに用ふる

ものなり。されば氏の原稿を見るに、厚き處と薄き處とにて、ぼこ〳〵せり。故に新聞一回分の原稿をも、一日にして書き上げざりし事ありき。此れ全く句一節を練る爲めに、三時間四時間を費し、甚しきは數日を經て辛つと會心の句を得ると云ふ調子なりしが爲めなりき。

▲中指の蛸　氏は又常に中指を嚙みつゝ呻吟して書く癖あり、其中節には蛸を生じ、知らざるものゝ怪しむ程なりき。氏之を示し、戯れて曰らく、余の文章は全く此蛸の中より出づる也と。紅葉と指の蛸、之れを故人長三洲が詩作中、筆に顫く事あらば、其紙に己が好める古詩を書きて書きて、書き拔きて遂に漆を塗れるが如くせざれば止まざりし心意氣にも似通ひたり。

▲美文一篇に三日　此れも氏の作に苦心せる一例なるが、未だ學校にある頃同級の川上眉山氏講義の最中ふと氏の方を見るに、氏は熱心に講義を傾聽するものゝ如く、何かノートブックに書きつけつゝあり。其時間はあまり重要ならぬ學課にて、筆記する程の事にあらねば、氏の平素を知れる眉山氏は、不審に思ひながら受業を終りぬ。講義終りても氏は依然として席を離れず書き續け居るに、近より見れば豈計らんや講義の筆記と見しは、一篇の美文なりけり。其後其美文を完成するまでには三日を要せりと云ふ。さて出來上れるものは、僅々三四十行のものなり。唯だ一氣に書き流しても事濟すべきものなるべけれど、中々其れにては滿足せず、家へ歸りてよりも苦吟又苦吟、殆ど全心を之れに奪はれて、飯を食ひながらも傍に引寄せて見、寢る時にも枕元に置いて見ると云ふ始末、一寸したるものにても凡て此調子にて、決して一句一章と雖も苟くもせざりき。晩年に至るまで此風は遺り之れが爲めに、兎角筆の進みかね、從つて經濟は常に苦しかりき。他の多くの作家の如く己が意に滿つると否とは問はず唯だ黄白の爲めにするものとは、全然類を異にせるなり、之れやがて紅葉氏の紅葉氏たる所以か。

▲二つの綽名　一を『來三行』、他を『酒の中の直寢』と云ふ。

『來三行』は『頼山陽』のもぢりにて、此れも其苦吟、遲筆なりし一例なり。武内桂舟氏四番町にある頃、氏の宅は來客ありて思ふやうに筆とれぬとの事に、桂舟氏の二階を借り、此處ならば靜かにて心ゆく作も出來得べしと、奇麗に掃除してかゝりしも、一日の間にたつた三行を書けり。處が變れば矢張り書けぬとばかり、氏は一日にして桂舟氏の家を辭せりと云ふ。以來友人は呼びて『來三行』先生と曰へり。

『酒の中の直寢』とは『武内の宿彌』のもぢりにて、氏は大なる下戸にて三杯のむやのまずにぐた〳〵に醉ひつぶれ、時も處も選ばばこそ、どろりと寢込むより『酒の中の直寢』先生と呼ばれたり。

▲人を引つくる力　氏には天禀に人を引つくる力ありき。人を魅するが如き其の快辯と相待つて、斯くは硯友社中に重きをなせるは云ふまでもなき事にして、此等以外に、尙ほ大なるものと云ふは、その極めて溫き情と、强健なる意志と及び周匝綿密なる注意力となり。されば人の世話をなし、友人の爲め、門下の爲めには、自分の苦を忍びて盡せし事も多く、且つ味方の爲めには陣頭に馬を乘出して、敵の矢面に立つの意氣込あり、後に居て號令をかくるにあらで、自ら先鋒となるの氣慨ありし事、之人に推服せられし大なる原因なり。

氏は又涙に脆く、情に厚かりしが、一度是非の斷をつくれば、其終りまで成し遂げずば止まぬ勇氣と忍耐とあり、又た一度氏に會へば一見舊知の如く、會ひ度し、行きたしの思を起させしは、其の心に城壁を築かず、何人とも胸襟を開きて打談るの態度大なる原因なり。其能辯は唯だの俗談平話にても、忽ち光彩陸離たるものとなして、面白く聞かしめしと

云ふ。

▲文士講談會　晩年に至りて『文士講談會』なるもの起り、氏の談話筆記は諸方の雜誌新聞に掲載せられたるが、之れ全く其能辯に起因して起れるものにて、實にや氏の談話には、文章以上の妙味ありて、之れを筆記すれば、氏が苦心の文章も及ばぬものとなれるなり。されど此は長く續かざりしを遺憾とす。

始め同會の起るに就きても、談話にては音聲の抑揚、身振、手眞似等に助けられて初めて面白みも味も生ずるなれ、之れを平板なる文字にあらはしては如何やとの疑問はありし。

▲演說はまづい　氏の座談は實に天品にして、決して他の摸すべからざるものありしが、其演說に至りては、其座談ほどに巧ならざりしと云ふ。併し文士講談會は確かに一新機軸を出せるものと云ふべし。

▲『御浮氣止め』　一面氏は自他の情を親密に結び付くる微妙なる力を有したれば、多くの人に愛せられ慕はれ、それをば長く變はらしめざりしなり。嘗て宙外氏牛込肴町交番の後なる川鐵と稱する烏屋に至り、一友と軍鷄を食しつゝありしが、突然女中が朱盆へ燒芋二つを載せて持ち來る。是れは彼方の御客樣よりのお贈物なりと云ふ。見れば盆の中に墨黑黑と『御浮氣止め』の文字あり。其文字の一見紅葉山人なるに、さらば氏も此處に來合せたるかと、初めて氣付き、其室に至り見れば門下生五六名を率ゐて、盛んに談笑しつゝありき。氏が此燒芋を宙外氏等に送れるは單に一時の惡戯にあらで、再び書生時代の事を顧み、現狀を改悛して大に奮勵せよとの諷刺を含めたるなり。宙外氏は其頓才の趣味あり洒落なるに、且つ感じ且つ謝し、其盆は烏屋より貰ひ受けて、携へ歸るや、文字を刻らしめて、今尙ほ大切に保存し居ると云ふ。

▲書生の歌　氏の作れるものにて、初めて活版になり世に賣出されたるは、「新躰詩選」の中に掲載せられたる、書生の歌てふ珍無類のものなり。彼の外山博士が初めて新躰詩なるものを創め、當時大學生等の盛んに市中を歌ひ歩ける頃にて、其文章の非常に拙劣なるを歎き、山田美妙氏は「敵は幾萬ありとても」を作り、氏は此「書生の歌」を作れる也。

書生の歌

緣山散史

國は何處ぞ百里外
親しき人と手を分ち
立ては堅き志
矢竹心のいさましく
きつゝなれにし敝衣
股に錐刻し壁穿ち
粗食に堪へて膝枕
身を立て名をば揚雲雀
千歳にかをる功績を
勉めよ君よ勵めよ君

花の都に程遠し
賴みし親の膝を去り
岩をも徹す桑の弓
吾妻の空に遙々と
いつかは飾る綾錦
千辛嘗めて又萬苦
假寢の夢の覺る間も
とりの群なる鶴となり
立てん心を忘れじな
將相何て種あらん

諸葛もむかし書生なり

▲藥店のラベール　氏が終焉に到るまで何かに就けて、非常に盡力したる安川政治郎氏が、其昔嘗て神田區南神保町に翁屋と稱する、藥店を開ける事あり、其賣品の白粉、藥品などに用ふる引札、ラベール、及び包紙の上書などは凡て氏が筆を採れりと云ふ。他のものならば、其樣な事は御免を蒙るべき筈なるに、氏の性狀として、友人の事となれば一生懸命となりて、何事にまれ盡力する、『花の雲』と云ふ引札を初め、毒藥に貼るべき『御用心御要慎』、屠蘇袋の上書きに至るまで、凡て氏を煩はしたるなり。其他化粧品、白粉の包紙などに、鹿と紅葉をあしらひたる趣向を立て、色の具合、圖案の事まで、それ〳〵指圖せりとぞ。されば こそ氏の病改まると聞き安川氏が當時大阪にある身を以て、忽ち馳せつけ、死に到るまでの手篤き看護をなせるなり。

▲涙に富める人　萬事が此の藥店主人に對する筆

法なれば、氏が人を動したる事の大なる、固より其文章の卓越せるに基因する處多かるべけれども、其れ以外何人に對しても、極めて溫かき心持を以て當り、眼には常に同情の涙ありし人なりし事こそ、其の特筆すべき源因なれ。

▲宿を斷はらる　彼の『我樂多文庫』の賣品となるや、氏が其頃住める飯田町の二疊の間にては狹しとて、煙草屋の二階を借り受け之に引移りたる事は前述の如くなるが、其烟草屋と云ふが、前記雜屋の向側なるより、店主安川氏の申込みにて、最初は五六人の書生連中相集まりて、小說など書くとの事に、さらばさまで騷々しくもあるまじと、心よく貸したれば、各々一脚の机を新調して、紙屑籠と原稿箱とを携へ、威勢よく烟草屋の二階へ繰込ぬ。

何を云ふにも『我樂多文庫社』の初めて出來たる事なれば、皆な嬉しさの堪へきれず、相寄り集ひては、片方に妙な咳拂ひをするものあり、又一方にては活版屋の小僧を捕へて、紙數、印刷料の談判を始むるものあり、此方に駄洒落るゝものあれば、彼方には脛推するものもあり。夫れは〳〵意想外の大騷動を演ずるなりけり。而も其騷動は何時果つべしとも思はれず、夜の七時になれども八時になれども、中々靜まるべき氣勢はなくて、益々騷々しく、興至れば、座り相撲、腕押、遲くなれば面々の腹が減く。乃ち何時の間にか蕎麥屋に注文するものありて、かけを取寄せ、天どんを持ち込むと云ふ騷ぎ、十時十一時になれども鳴りは容易に靜まるべくも見えざるに、驚けるは其烟草屋の主人なり、筆を持つて字を書く連中のさまでに騷々しきは固より豫想以外の事、どしん〳〵と座響きの拍子には下の間の時計のふんどんははたと止む。此れには流石の主人も閉口して、遂に「お貸し申して置きながら、今更斯かる事申し出づべきにはあらねど、今のまゝにては肝腎要の商賣が出來ぬ。時折客ありても、天井の雷の如き音響、笑聲に膽を消し、呆氣に取られて見て居るのみ、且つは我れも年來の腦病なれば、斯かる騷ぎを聞けば、頭挫かるゝやうなり。甚だ相濟まぬなれど。」との事に中介者安川氏は、氏の處に至り此由傳へたるに、例の江戸ッ兒張りなれば、肝癪にぐッと障りしと見え、聲を勵まして云ふやう、「怪からぬ事を云ふ奴かな、若きもの數人集まれば、少々の馬鹿も云へば冗談も言はん。其れ位の覺悟は其初になすべきもの也。頭割れるやうなりなどとは、生意氣極まる言辭かな。」と、袂を拂つて早速立退きにかゝり、復た各自机と紙屑箱と原稿入とを提げて、其日の夜元の二疊にぞ舞戻りける。以て硯友社創立時代は、如何に慘憺たるものなりしかを知るべし。

▲店受の捺印　烟草屋よりお拂箱となりし硯友社連中は、一先づ二疊に舞戻りしとは云へ、五六脚の机を入るゝ處もなく、暫しは椽側の隅に積み置きけるが、何時迄も斯くてあるべきにあらねば、遂に九段中坂の上なる今の活版所のある向に一軒を借受くる事となりぬ。此時思案氏借人となり、氏は店受の捺印をなせり。此處に辛やく硯友社本部を設けたり。

其家と云ふは、下は六疊と三疊、二階は四疊半に二疊。此頃の狀態は氏が嘗て『紅子戲語』中に詳述したる如く、實に亂暴極まるもの、集れば十人二十人、居らざれば鼠の跳梁に任すと云ふ有樣、晝夜心張棒の必要なく、泥棒忍べばとて、紙屑、机、筆の外には物品なければ、却つて後悔しつらん。

▲作物の朗讀　同じく中坂の時代には、氏を初め思案、漣、眉山、虛心、九華の諸氏、一作成る毎に皆なの前にて朗讀する習ひなりしが、各々苦心して作れる物を讀み上ぐるに、聞く者はこゝは乙なり、彼處は面白しなど漫評を下す。氏が『紅子戲語』を書ける時にも皆を集め、例の美しき聲にて朗讀せるが、其朗讀の絕妙なる、他をして氏の文章の出來上るを樂みにして待たしむる位なりしとぞ。

▲目の下が眞黑　氏が文章に苦心する事は有名なるが、其出世作なる『色懺悔』を作る時にも左の如き逸話あり。

氏が熱心に『色懺悔』の作に從事せる頃、時の親友某氏を訪へるに、先づ驚きたるは氏の兩眼の下は、墨の滲める如く眞黑なる事なり。怪疑に堪へず其由を問へば、其れは自分にも今まで氣付かざりしが、『怨言の卷』（色懺悔の中にあり）の條を書ける時、餘り思ひ詰めたる爲め、非常に悲しくなりて、涙頻りに出てたるを、手に墨のつけるをも知らず擦れるものならんとの話。此れのみに止まらず、氏が作物に苦心する事と、熱中する事とは實に他の想像すべからざるものあり、右の自作に感じて筆を止め、物悲しくなりて思はず涙を流す位は、別に珍らしき話にはあらで、多くの作家が經驗する處なるが、氏には此類の事殊に多かりき。彼の『伽羅枕』を書ける折にも、ふと物凄くなりて筆を止めたる事ありし由自ら談れり。

▲熱いと云つて素裸　嘗て神戸の丸岡九華氏を訪へる事あり。氏は例の浴衣がけに紺絞の兵兒帶、其又尻の先をちよきりと結べる風も可笑く、偶々主人の留守なるに　突然の訪問なれば家内の人も驚きて、お珍らしやさアまアお通りと、愛想よく迎ふれば、氏は何の遠慮もなく、此處の家は二階の方が涼しいてせうとばかり、づん〳〵二階へと上り、熱いと云つて直ちに素裸になり、ごろりと寢轉んで本箱より書籍を亂抽して居る處へ、主人は歸宅せり。兎角して夜に入り、豫ねて約ありし故中村花瘦氏來り、尾崎君は來れるかと云ふ。家内の人は其先刻來りて二階にある事を告ぐるや氏は潛かに下へ降りて梯子段の下に隱れ居て、中村氏のそれとは知らず二階へ上る後より、突然わッ。中村氏は爲めに非常なる驚き方、梯子段より轉がり落ちし程なりし。其後二週間許は主人の在不在のお構なく、二人わい〳〵騒ぎ散らして歸れりと。

▲そんな篦棒な話があるか　嘗て厚木の宿の親戚を訪ねんとて、藤澤の停車場より車に乘れるが、其處邊の車夫は皆な雲助上りにて、東海道にても有名な人の惡き處。愈々厚木の渡し場まで來れる時、向は厚木の町なれば、此處にて下車せよと云はれ、約束の錢を渡して渡舟を呼ばんとせしが、車夫は例の如く旦那此れぢアいけませぬ。いけぬとは何の事、約束ではないか。と此處に談判は初まれり。約束なれば約束丈け遣れば、其れで兎や角云ふべき事はなし、其樣な甘いものとは譯が違ふ、と頻りにたんかを切る。車夫亦中々手強し。そんな篦棒な話があるか、約束の賃錢を貰つて置きながら、是れぢやいけませぬとは何の巫山戯ぞ、文句あらば警察までと鞭を片手に舟に乘れり。車夫は此れに屈せずいたく怒り、河に乘り出てし舟を目がけ、石礫を雨霰と投げつくるに、流石の氏も閉口し、口でこそ威張りもすれ、石礫には唯だ舟底に潛伏るばかりなりき。

▲これは不甘と云つて皆喰ふ　友の家に至りても朝魚屋來れば氏自ら出て來り、此海老は宜し、此鯛は甘さうなり、などと一々指圖し、人の細君を捉へて、此れを斯うして煮て呉れ、あゝして燒いてと注意する。命に隨つて料理しても、此れは不甘いと頭ごなしにけなしつくる。然し不甘いと云ひながら皆な喰ふ。又た湯の歸途などにて西瓜の大なるを二切位買ひ求め、それを平氣な顏して提げ歩き自分も喰れば子供にもやる。此れは神戸の九華氏の家に滯在中の事なり。

▲他家の食物の罵倒　『君の所の飯はまづいなア』と頭からけなしつけ、『何か食ふ物はないか。』と自身臺所へ押かけると云ふ風なれば、大抵の細君は驚けど、却つて其遠慮少なき處に氣も樂なり。斯く罵倒しながらも食ふ事は決して廢さず、自ら揚言すらく、『僕は食に忠なる者だ』と實に然なりき。

▲婚禮祝の參謀長　氏は硯友社時代より、何事にまれ其主動者となるを常とせり。九華氏の婚禮の時には、長さ六尺もあらんと思はるゝ枕を造らせて鴛鴦の衾にかつぎ込みけるが、其枕は近所の八十幾歳になれるお婆さんを頼み、それに裁縫せしめたりと云ふ。其中に入るべき籾がら四斗幾升。此の趣向を構へたる參謀長は、云ふまでもなく氏なりしなり。

▲世話好　又た社中の者の難儀するあらば、獨り氣を揉み、東西に奔走して或は醵金を募り、或は贈物を集め、之れを取纏めて本人を見舞ふを常とせり。

花瘦氏の死せし時、遺族の世話より葬式の費用に至るまで、皆な氏が奔走して友人に寄附を求め、贈物を頼みて、よくその後始末をつけしめたり。されど生前氏と花瘦氏とは何等特別の親交ありしにはあらず、否な時には血氣に任せて花瘦氏は却つて、氏に對し亂暴をし失策をなせる事もありしなり。而も猶且つ斯くの如し。

（一八）

▲端唄　前記翁屋藥店が初めて『花の雲』てふ白粉、下を賣り出せる時、其需めに應じて作れる端唄あり。

春風にそよぐ柳のみだれ髪、寢起のまゝの花の顔、
向ふ鏡にはづかしく見る目おぼろの遠山櫻、雲とまがふや薄化粧、婀娜な姿に思が增すぞへ

（本調子かき送るの替歌）

又た小野小町が『あなめ〳〵』をもぢりたるものあり。九華が我流の活花を見てと題して

活けやうを見るに付けても馬鹿め〳〵
梅とは言はじ薄生ひたり

凡て斯る類の惡戲を好めるなり。

▲折刀の辨償　嘗て硯友社の催しにて文士劇を演じたる折、借物の刀一本折れたるに、氏は舞臺より歸り來り、着物は脱ぎたるもまだ頭には大百を蒙りながら、道具屋の男とさし向ひ火鉢の前に蹲み其折刀を前にして、一圓貳拾錢には負からぬか、向は本箔なれば二圓までと云ふ。お前の方にても困るべけれど、何分此催しは各々金を出し合ふての事なれば、其處の處を呑み込みて、一つ我慢をして呉れと、弱り切りたる談判の樣の、物凄き横顔と相映じたる可笑さは、得易からざる奇觀なりしと、後年氏の友人等は相集ふ毎に、之れを話して吹出すとぞ。

▲眼病と根太　友人數人と京都に遊び、吉野の花見に行ける折、氏は偶々眼病と、股の根太に苦める事とて、其の眼籠をかけ、跛を引ける有樣は、全然山本勘助を見るが如く、一同に罵られながらも、負けぬ氣の本人は、精分の爲めの眼病、根太なりと、些かも屈する色なく、歩く事は決して諸君に負けぬとばかり、途中月ヶ瀬、笠置の山と經歩くほどに、根太は次第に痛み出し、遂に駕籠を賃して他の諸氏之れを護衛する有樣には、大谷吉隆も忍ばれしと云ふ。

其夜長谷に一夜を明し、翌朝は多武の峰を越えて愈愈吉野に向はんとするに、氏は病氣の爲め歩行叶はず、車を以て壺坂にかゝりぬ。徒歩の連中は後れて辿る途々血膿の滲める反古紙の落ち散れるを見、其の痛みの唯ならざるを想ふ、登り行きて氏が臥したる處に至り見れば、果して腫物を吹切りし爲め、斯くは血膿の出てたるなりと。併し痛みは之れが爲め非常に薄らけるも、歩く事は無論出來ねば、吉野見物は駕籠の中。まるで殿樣と云ふ格、多くの同勢に護衛せられて、所々の見物を濟ましぬ。是れより先、氏は日を限りて祈れば治するてふ、長谷の日限地藏に願をかけたれば、其利益壺坂にて驗はれたるものと、頻りに難有がりしと云ふ。

▲朝寢坊　宵張の朝寢坊は氏が生涯を通じての習慣なりき。作に夜を更かす者には、止むを得ぬ事なるが、嘗て京都に小波氏を訪れし時も、小波氏が朝起きて新聞小説の一回分を書き終りし頃起き上り、『どうだい出來たかえ、もう書いた？早いなア。』と、其時時計は十一時を報じぬ。

（一九）

▲創作と時　明治二十一二年まで原稿は夜分書くを常とせるが、其頃より日中認むるに至り、其の作品の華麗なる、日中の森羅萬象に似たり。嘗て人に語りて曰く、『私は日の當る室へ幔を張つて、墨を磨れば其の墨のキウ〳〵とするやうな時が一番書き易い。』と、其れが何時の頃よりか、復た夜になりぬ。氏の作にも其れと共に變化あり。又同時に健康を害するに至れるなり。

▲『巖谷は怪からぬ奴』　萬物に熱中する性なれば時折矛盾する事あり、日頃は非常に懇意にせる友にも、些か氣に入らぬ事あらば、忽ち罵倒を浴せかくる事は珍らしからざりき。氏と無二の親交ありしと云はるゝ小波氏に對しても、病中、依托仕事の一日二日遲れし爲め、『巖谷はおッ附け仕事を、怪しからん奴だ。』おれが丈夫ならあんな奴とは絶交してしまふ。』と圍ける事あり。此れが固をなして不圖人に誤解せられたる事もありしが、そは未だに氏を識らざるものなり。其時も小波氏が斯く〳〵の次第なりしと說明せしに、直ちに怒り解けて機嫌舊の如く、貰ひし名古屋產の梨瓜を送れる程なり。

▲深更戸を叩く者　氏が玉突の相手は小波氏なりしが、氏は例の凝り性にて非常に熱中するにも拘はらず、小波氏は又た萬事樂天主義の、玉突も勝つも負くるも氣にせぬ性質なれば、何時も氏は相手の不熱心を憤慨せり。或る時二人打連れて近所の玉屋に至り、競技を初めたるに、小波氏は五時頃より豫ねて招かれたる寫會に臨むとて出て行きしが、其夜十時頃宴會より歸り來り、將に寢んとする深更表の戸を叩くものあり、出て見ればそは氏が引續き玉を突きて、勞れ果てたる身を泊めて呉れよと哀を乞ふなりけり。

斯く凝り出せば極端に走るの傾あり、大弓、寫眞、俳諧等凡て右の類にて、或時は寫眞器機を持ちて、終日山野を跋渉し、遂に一枚の得る處なくして歸る事も珍らしからず、小波氏洋行中嘗て君の子供の寫眞を撮りて送らんと誓ひしも、果たさずして止みぬ。之れ其の意に充ちたるものを得ざりしに因るなるべし。又俳席などにても、字句に餘り凝り過ぎて、句を成さずして止む事多かりき。

文章は別として、斯く凝る割り合に巧ならざりき、玉突然り、弓然り、寫眞又其類に洩れざりしなり。

▲醉ふと坐眠　未だ大學に學べる頃、眉山氏と共にどんよりと霞める春の夕、急に思ひ立ちて龜井戸に遊べる事あり。道々は種々文學、學校の話などしながら、向ふに着けるは四時過ぐる頃なりき。歸途は、既に夕方なりければ會食したるに、氏は何時になく酒を呼び、大に醉うて大に氣焰を吐けり。さて愈其家を出てしが、醉步蹣跚二人はうと〳〵しながら進むうち、氏は突然土手より辷り落ちぬ。土手下は泥田にて、其中へ踏み込みしなり。驚きて飛び上らんとすれども、足場あしければ行く事もならず、されば動かぬ譯にも行かねば、眉山氏は恐る〳〵下り來り手を引かんとすれば、足下の土は崩れて二人共泥土の中、『何うだい、とう〳〵深みへ入つて了つたね。』『此處で足拔しても、著作の方は然うは行くまい。』『足を洗うのも學校の方が落だらう、ハ、ハ、ハ。』

▲競走の勝者　學校時代は盛んに遊戯をなせるものにて、テニス、ボート、ベースボール。殊に足の速力は非常に疾く、競走には重に優等の褒を得たりき。

▲半日の間腹を空して　何か食ひに行かうぢやないかと話が出づれば、道の遠きなどは其意とする處にあらず、何處が妙と云へば、直ちにそれへ出かける、區の二ッ位隔れる處へは平氣なものなりき。或時某料理店の開業あり、地方より出て來れるものにて、其の料理の餘程珍らしき由を聞き込むや、早速出かけて、京橋の邊を殆と半日の間、腹をすかせて、

る〳〵捜し廻れる事あり。

▲弓　明治三十年頃、氏が冒を忠ふるに至りてよりは、主に弓術を稽古し、六分位まで彎きたり。玉突、寫眞、銃獵など、他の嗜好は時々變りたれど、弓のみは一貫せり。

一日某弓術家の七分五厘なる黒塗の尾州弓を携さへ、氏を訪ひて其銘を乞ふ、氏乃ち『黒冠者』と命じ、後徐ろに客に語つて曰く、『弓に銘を付ける事、今も昔も悉く誤れり。甚しきは金龍、飛龍など銘ずる者あり。此れ等は花魁の源氏名と紛らしく、以ての外の事なり。武器は武器らしく、而も無邪氣に風流なるこそ望ましけれ。又或るものは、弓の極意の歌よりつくべきものと心得居るやうなれど、之れ亦誤れり。』と以て氏が弓に對する觀念の一斑を窺ふに足るべし。氏は日置流にして、六分内外の薩摩弓を好み、矢は篦の古さを愛して、弓勢強く引絞り、やがて切つて放せし後までも滿身の力の、尚ほ右手に殘れる

心地好さ、體育と娯樂とを兼ねたる遊技は大弓に限ると、例も人に語れりとぞ。

▲仙跡　『我樂多文庫』の頃は、麹町區飯田町五丁目に住み、明治二十三年牛込區北町四十一番地に轉じ、廿四年の秋本郷區森川町一番地に移る。其時は堀紫山氏と二人にて男世帶を持てるなりき。同じく廿五年の春今の牛込横寺町に轉居す。夫人菊子を迎へしは此年にして、三女一男を遺して逝ける也。仙跡飄蓬、後の過るもの綿々低徊の感に堪へざるものあらん。

▲書風　初めは長三洲を學び、後蜀山を摸し、又た唐樂の跡を慕ひ、更に弘法道風に出入して、氏獨特の書風をつくれり。

▲金鍔と天麩羅　『食鬪の紫苦き菊蒲哉』と吟ぜし山人は、瞑目數時前大悟徹底の語を吐けり。昨晩は金鍔を半分許食つて見たが、寧そ天麩羅でも食つて了つたら……と。

▲一飯不忘君　往昔の文者もものかは、我紅葉山人の文章に忠實なる、彼の七たび生れ變りてと言遣せしによりても知らるべき事なるが、興到り想動きて文を行るや、天才の人に有り勝なる一氣呵成筆々飛ぶが如き慨こそなけれ、凝性なる氏は幾度か訂正し、抹殺し、終には美しき手蹟に原稿紙は悉く黒塗せらるゝを常としたりき。

されば彼の大作『金色夜叉』『多情多恨』の如き新聞小説の續稿も、後の一回の出來上りし後ならでは送附する事なかりき。

▲習字して慰問　氣の腐りて書けぬ時は、習字して悶を遣るとは、常日云へる處なりき。

▲生生の垢　氏の弟子泉斜汀氏は氏の健康なりし頃より、其の湯沐に待して、背の垢を流すを例とせり。氏常に斜汀を誡めて曰く『お前は己の背中を擦つて垢が出るやうにならなければ、文章は上手になれないよ。』と蓋し幾月日を經て流垢が上手になる頃ならでは、との意を寓せるなり。

死體解剖の時、斜汀は柩を護りて大學に赴き、手術終るまで涙堰きあへず傍にありけるが、縫綴畢りて其手足を洗ふに方り、斜汀は深き感に打たれけん、啜り上げつゝ海綿を把りて丁寧に氏の四肢を拂拭するにぞ、齋藤松洲氏傍より『もう好からう』と注意せしに、斜汀氏は顧みて彼の流垢の事を物語り、『此れがお垢の流し了ひと思へば、感慨に堪へません』と跡は又涙なるに、一座思はず袖を濕したり。

▲三人の間貫一　氏の傑作『金色夜叉』は屢次劇に仕組まれて、諸所の劇場に演ぜられしが、會葬の途中川上音次郎は不圖心付きて傍人に向ひ、『今日は間貫一が三人お供に立つて居ます。』と云ふに何故かと問へば、『私の外に中野（宮戸座）と藤澤（東京座）の三人です。』と

▲作物中の人物と氏　傑作『多情多恨』に於て、柳之助の如き酒落なる人間を描けるが故に、之れより

想像して、柳之助が氏の半面なるかの如く傳へたる雜誌もあれど、氏は決して然らず、一度愛すれば其欠點をも見出しかぬる程情には脆かりしも不義を惡む事非常に强く、激すれば形にあらはれて、『金色夜叉』に貫一が、金を催促する時、蒲田が之れを席上にて捉ふる場あり、其の蒲田位の意氣込ありし人なり。されば人の門下生が其の師の惡口をなすをば、恰も自分の門下生が自分を惡く云ふほど惡めり。

▲髮の苅方　頭を五分苅にするのは、西洋の懲役人の如くして宜からず。鳥さへも頭には鷄冠を有するならずや、まして人間たるものがクリ〳〵坊主の毬栗になるのは甚だ妙ならず、との持論よりして、氏の苅方は當時の流行とは少しく趣を異にして、前を房々と長く、周圍は極短く、一種獨特のものなりき。門下生の中にも之れを習へるもの多し。

▲床屋　行きつけの床屋は神樂坂の和良店と稱せし寄席即ち今の高等演藝館の側にありき。氏は床屋に限らず、料理屋、下駄屋、呉服屋等凡て自分の用を便ずる處は容易に替へざりき。「同じく錢を使ふならば、自分の土地に錢を落すが私の主義なり」とは其の常に云ふ處なりしとぞ。

▲理想の妻　氏が理想の妻は『多情多恨』中のお種の如き女なりと。『尤もお種はあまり不愛相でいかぬが、たまには夫に向つても『おいよ』てな言を云ふやうな妻でなくてはならぬ。』とは嘗て氏が洩らしたる處なり。

▲「化及吾」　大學病院を退き、芝の樺島氏の別莊に居たる頃なりき。宙外氏、鋭花氏と相携へて氏を見舞ひし時、傍に讀さしの『莊子』あり、恰も其時『化及吾』てふ印の彫刻なりて屆け來れるより、鋭花氏『化及吾』の意味を問ふ。答へて曰く『こりやァ莊子の中から選んだのだよ、詰り死ぬるお鉢が己の處へ廻つて來たと云ふ意味さ』と。早く既に此時死を覺悟せるなりき。

▲罵倒と漫畫　氏の罵倒に巧みなることは有名なるものなるが、嘗て興に乘じて、門下生の諸氏を罵り揶揄し、筆を取つて小栗の顏は斯うなり、泉の腰つきは斯うなりと、漫畫を書ける事あり。其漫畫は別に日頃習へるものにはあらざりしも、其顏や姿のよく似たるには、座に居たるもの〻感服したる程なりしと。

▲述懷　病床にありし時、門弟泉氏に向ひ、『人間も色氣はなし、食氣はなしとなれば、宛然仙人になり了はるもの也。十圓の札が先達より紙入にそッくり遺れるが、却々使ひ切れぬ、散歩に行きて、種々なものを見ても、目下必要の物は買ふ氣になれど、少し後まで保存して置かうと思ふものは、決して買う氣にはなれず、些かでも金にて遺族に殘し置かんと思へば。』とて更に微笑を洩し、『矢張り人間は、一圓か二圓の金を持ちて、彼れを買はんか、此れを買はんかと、三方四方へ迷ふ時代に越したる面白さはなし。』又日外の述懷に、吾々は到底貧乏して終るやう、先天的に生れたるものなれば、詰らぬ皮肉を不意と云ひては、人に恨まれたり、氣に障つたり、飛んでもなき我が不利益を招く事も珍らしからず。之れ全く天然自然に金の出來ぬやうに生れたるが爲めか、呵々。』と。多才禍を招ねくの類か、氏は奇警なる語を盛んに吐きたるが故に、其氣性を知らざるものは、感情を害したる事も一再ならざりしよし。されど其平生を知れるものは、一方に溫かき而して親しげなる顏容を見て、罵られながらも却つて之れを悅ぶの風ありき。

▲日常の生活　氏の生涯には、原稿料の外殆んど收入はなかりしが故に、生活は貧しと云ふにはあらねど、明治第一流の大家のそれとしては、小さき生活なりき。加ふるに所謂宵起の錢は持たぬといふ潔癖の江戸ッ子式を發揮さすことゝて、內外の交際もおろそかならねば、さもありなん。

食物は隨分凝る方なりしも決して贅澤にはあらず、横寺町時代にも神樂坂下の島金へ、ビフテキ一人前宛誂へて、之れが御馳走のつもり。使は何時も玄關の泉氏。長女藤枝嬢の雛の節句にも、門下に振舞ひたるは天狄羅なりき。其後膳の上が三品となり、五品となり、七品になれるに氣付きて、我れながら驚けりと自ら語れる事あり。

衣食住の中にて、食物に最も趣味を有し、其次は住居。西洋風に住みたしとか、斯く〳〵の住居を欲するとか、望みはありたれど、遂に之れを實現せずして止みぬ。衣服は最も淡白なる方にて、大抵は夫人より今年は春衣を新調せられよ、それではあまり見つともなしなど、注意ある程なりき。されば時には結城木綿の地味な千筋の表に、花色の裏をつけて洗ひ張りの糸織位の羽織を引かけて居る事などありし。

▲合乘の教授　門生泉氏を連れて、秋の向島百花園を見ての歸途、仲店前にて馬車に乘り、上野にて下車し、氷月にて小倉しるこ一椀宛を取り、腹をしたゝめて其れより合乘にて牛込の柿木横町の坂まで歸れる時、合乘は恁う云ふ工合にするもの、身躰を斜するんだ。

▲衣服は質素　衣服は決して品物の撰り好みをする必要はなし、唯だ垢の着かざるサッパリしたものを着ればそれで澤山なり、との主義にて、門下生の衣服の見立をするにも、粋きなもの、異なものと云ふ見繕ひにはあらで、見ッともなく丈夫向のを撰べり。てら〳〵と饒式のは大嫌、くすんだるを好み、一つの衣服を七八年も着くる事珍らしからざりき。されば垢の付けるものにてはなく、態々粗末なる衣服を着けて、磊落がる事が非常に忌む處なりき。

原稿を書く時には、垢の付かぬつぎはぎのドンックなど着け居れり。嘗つて、『古ぬのこ、花に對して羞ぢて出てず』てふ句を作れる事あり。足袋は儀式か、餘程の寒天ならでは穿たず、湯には毎日缺かさず行けるほど、さつぱりして垢も足袋も嫌なりき。

▲嫌なもの　以前は豆腐と言文一致が大嫌にて、文章はなだらかに誰れにでも易々とよめるやうに書け、女中にも讀めるやうにかけとは常に門下を戒むる言葉なりき。

▲衣服の色　氏が好みは茶色とお納戸なりき。柄は羽織ならば小紋の不意氣なる型を撰び、帶も衣服も總てお納戸、茶、こげ茶なりき。

一躰に地味なるを好み、嘗て夫人の小紋を自ら見立てたる時も、餘り地味にて夫人には適せざりし處より、自分の下着にせる事あり。又た日本婦人の衣服に就ての意見は、縮緬が最もよろしく、其他のゴワ〳〵せるものよりはしなやかなる縮緬の方、如何程よきか知るべからず、彼の襞の一種趣き深きは日本服特有の美とさへ賞せりき。

▲食物の好み　料理屋中華の鶏の椀に金ぷら、甘調の照燒。茶飯のあとが、梅園の汁粉、又漬物の旨きを非常に好み、酒は極めて少量なりしが、好める方なりしかば、晩酌など老人相手に必ず一酌宛傾けたりき。それも二猪口か三猪口にして寢て了う事は、前述の如く有名なる話なり。

▲當字の撰擇　『文章報國』の四字は氏が座右の銘なりき。さればこそ文章に苦心せる事は屢々記したる處なるが、横寺町の氏が書齋を訪ねたるものは、其の机前に當る障子の硝子に、種々なる文字の縱横に書き連ねられたるを見たりしならん。此は讀書の際、其他の機會に、常に求めて居たる或思想に對する妥當の文字をば、不圖搜しあてたる時、備忘の爲めに書けるものなりとぞ。當字など假名を便りに讀むものなれば、斯くまでの苦心は要なき事のやうなれど、氏の意見は大に然らず、苟くも漢字を使はんとするものは充分穿鑿して、出來る丈雅馴、妥當なるを採るべしと云ふにあり。

着物のシマと云ふ字にも大に苦みて、普通縞と書けども調べて見れば、縞はシマの義にあらず、縞衣玄裳などゝ使用して、白色の衣の事なり。已む事を得ずして、一時は柳條にシマの假名を振れるが、之れにても他かず晩年に至り遂に、『島より流れる織物の義なれば、寧ろ絲扁に島と云ふ新字を造れるが、却つて便利なりと人に語れり。其當字の如き末技まで苦心する事、凡そ斯くの如き類なりき。

▲取材の苦心　氏は右に述べたるが如く、徒らに文字穿鑿の如き雕虫の技に拘々たるのみならず、構想取材にも亦世の常ならず刻苦せり。構想の事は外にあらはれざるが故に、實例を擧ぐるに難けれども、其取材に關しては、先づ彼の『金色夜叉』の熱海の景を描かんとするや、身態々其地を踏み、鹽原の事を描かんとしては、彼の地へ滯在して研究せり。若し作中人物の服裝、持物等に不審の事あらんか、一々其道の專門家を訪ひ、遺憾なく調べたりき。ゾラが

馬車の事を描かんとして、多くの日數と費用と苦心とを以て調べたる話をして、其れ位の意氣込なかるべからずとは、氏が常に語る處なりき。

『多情多恨』中の人物葉山なるもの、主人公たる柳之助を待合に誘ひたる條に、隣座敷の二上り新内を寫さんとし、其合の手などの事に就ては、態々遠く某老妓の門に足を運びて、教を乞へりとぞ。

▲人生對落想　氏嘗て人生對落想の問題に說き至りて曰く、『私は人生がすべつたの轉んだと考へて書くことはない。其れで小說は一躰かけるものぢやないんだ。其りやア自分にしても、世の中を見て何とも考へない事はない、社會は斯ういふもので、斯うあるべきものだ位、考へないことはない。爲永が人情本を書き、京傳が洒落本を書いたのとは勿論考へは違つてゐる。人生觀が何うしたの、世界觀が斯うしたのと、ひどく大業なことを云つたッて仕樣がない、其れて小說が出來るもんぢやないんだ。詰り文法を講じながら文章をかくやうなものだ。私は不斷は世の中のことを考へて見る事も無きにしもあらずだ、が趣向を立てるに當つて、其樣なことは考へたことはない。

▲七生文を作らん　死の前日病勢漸く進みしを以て、數日來看護の爲め詰切りの門下生一同の外、最も親交ありし、五六人の友は、徹宵して枕邊に侍せしに、氏は到底自ら起たざるを豫覺し、先づ門下生に對して慈愛溢るゝばかりの遺訓を與へ、今後益々精進して、互に勵まし互に進め、余も亦七生まで生れ變りて文章を作らん、と云ひ、更に家庭友人に對して葬儀の事まで殘る方なく遺言し、併せて屍體の解剖を大學に托し、世間同病に罹るものを治療するの參考とせば、微軀死して榮あり、との言葉さへ漏せり。依りて遺族は其命を奉じ、遺骸を大學醫院に送り、解剖に附したり。

▲江戸ッ子氣質　死生の問題の如き、早くも胸中に決せる氏は、臨終に及びて苟くも亂れず、例の江戸ッ子氣質を發揮して、遺言するやう、葬儀は成るべく質素にせよ、死んで花を供に跟けたとて何になる。又輿を舁く恰好は餘り見好きものならねば、野邊送りは是非駕にして呉れ、而して四隅には白の蓮華を挾むのだ、それから配り物も余は燒饅頭は嫌ひなれば、銀座の菊廼舍へ注文して、よね饅頭の潰し餡にて、赤と青と白と色判にし、余の印を燒印にするのだ……印は石橋に托けてあり、又折なども餘り氣取らぬ方却つて可しと、從容自若として語る樣、之れが死に行く人かと疑はるゝばかりなりし。

▲『換菓篇』　文壇の美談として囃されし、門下生の奉贈せる換菓篇の一冊は、死に前つ二日製本成りて氏の枕頭に供へられたり。氏は愛撫子の如く、此れに關係ある見舞の人に、手づから本を抽きて、却々能く出來ましたよ、と言葉を添へて與へつゝ、病の身に在るを知らざるものゝ如くなりき。

▲臨終の洒落　竹冷小波の諸氏枕頭にある時、氏は紙卷煙草常磐を喫しつゝありしが、頭を上げて言ふやう、此常磐は咽に障らないから結構だ、僕は之を『臨終烟草』として居る。併し常磐と臨終とは大に撞着してゐるねと、諧謔一番微笑まれし頬の色の、死灰の如くなるを見し時の、二氏の心や如何なりけん。

▲往生　絶命の日に先立つ三日の朝病漸く革りしより、病狀幾變化して、折々興奮し又た昏睡に陷ることもありしが、肚裏心底の大覺悟は、牢として嚴の如く、眼覺むれば、訪問の見舞人に對し、一々禮を述べて言語明晰一糸亂れず、靈泉化して雲に上りし後までも、在りし溫容の宛然其まゝ、尋常聞き及ぶ胃癌患者が苦惱の死狀とは打つて變りし大往生をぞ遂げられけり。

▲紅葉全集の出版　氏は平生貯蓄の心掛なかりしが故に、遺産など殆どあるなく、僅かに葬式の費用位を餘すのみなりき。されど友人等の厚き盡力によりて、沒後十千萬堂設立せられ、其生涯中に書ける作物を集め、『紅葉全集』を出版せしが、其賣行非常によく、氏は生前よりも寧ろ死後に於て富祐となれりと云ふ。

春夜水蔭小波と會飲して曾遊の舊夢を談ず

盃にうつろふ顏や
春十とせ

（紅葉句帳）

第五章　終焉の記

尾崎紅葉君序
巖谷小波君序
京の藥兵衛撰

滑稽類纂

訂正增補第四版

美本全一冊
定價金五十錢
郵税六錢

◎夫れ滑稽は哲理にして、實に處世上の要素たり。今や文物日に月に盛んなりと雖も、惜い哉該要素に缺くる處あるを憂ひ、古今の珍本數千卷を涉獵して、

◎元祿以降二百年間の

▲笑話▲俳諧▲狂歌▲狂句▲古語の類を蒐集して、之を

●神祇●釋教●君臣●親子●武士●醫師●疾病●貧福●商估●婚姻●戀情●雜夢●無常●歌俳●謠曲●茶の湯●立花●圍碁●將棋●淨瑠璃●演劇●角力●交友●飲食●慾情●音音●不學●奴婢●乞食●倫盜●遊里等

◎其他、森羅萬象に關する滑稽數千章を各々部門に類別したる空前絶後の奇籍也。

五　終焉の記

紅葉山人病篤し。

明治卅六年三月三日、風漸く暖く、梅花離に綻べり。此日大學病院の一室には、時ならぬ人のぞよめき、十四五人の友人門生に取卷かれ、山人は靜かに病軀を横へぬ。

看護婦入り、助手來りて、愈々診察は始まれり。先づ其細りたる肌を脱げば、肋骨露はれ、色褪せたる容躰に、居合せたるもの一同悄然として聲なく、唯だ顏合はすばかりなり。生來の優姿に、日頃は衣服もあり、さまでとは皆思はざりしを、今や其の甚しき衰弱の儀を見て、皆々啞然たるのみ。兎角して診察を終りぬ。

夜食は何にすべきや、看護婦の問へるに、

『何があるね。』と山人は淋しく笑みて問ひ返す。むつのある由答へしかば、

『其れにしやう。』と輕く。

泉氏傍よりむつなど召上りては如何と云へば、

『家ぢやものとえらい物を食つて居らア。』

と厭はしき面色して、取あはざりき。常に食事の事に關しては、他より干涉らるゝをいたく蒼蠅がれるなり。

斯くて入院の日より五日許は過ぎぬ。

入澤博士日々の診察は、玆に悲しむべき事を發見せり。曰く山人の疾は胃癌の徵候あり矣。聞くもの驚き迷ひぬ。まさかとは皆人の萬一を恃む果敢なき望みなりけり。其れと聞きたる二三氏も二日三日は心痛めて明かせしが、愈切開する事とならば、種々の會議には、友及び門下一同も連らざるべからず、斯くてあるべきにあらねば、遂に櫻田會館に一同會して、切開すべきか、否かの相談ありしが、何分衰

弱の身なれば、若し切開せんか其場にて危き事もあらんとて、一先づ此れを見合はす事に決し、仝月の十三日退院せり。

退院前醫師は日を見て其胃癌なる旨を本人に宣告せしが、流石の山人も此れは稍々意外にて、其夜は萬感交々胸に徂徠し、『死』といふ事にも考へ及びて、悶えもし悲しみもしつれど、以後は充分覺悟し了ばんぬ。とは云へ日頃の負けじ魂性は、全癒の望みなきまでも、必ず病氣に打勝つ意氣込。余は決して從容として死する能はず、まだ爲すべき事は數多殘れり、されど愈駄目と定まるからは、人に餘計の世話をかけ、自分も苦む必要なし、唯だピストル一發の潔き最後を遂げんとは、屢々云へる處なりき。從つて元氣は中々盛んにて、床に就く程にてはあらざりしなり。

紅葉山人病益篤し。

仝年七月六日、熱つ苦しき午後三時頃の日光西窓

に差したるを見て、急に腹部に痛みを覺え、再び起たざる床に就けり。

爾後も元氣は決して病人とは思はれぬ程にて、仝月の廿七日には神樂坂に散歩せり。越えて八月その十一日には夫人と共に、アイスクリーム飲みに出掛けたる事もありき。快晴の日などには、彩美しき夏の夕の雲足を眺めつゝ、もう少し身躰の自由ならんには、打連れて早稲田邊の逍遙もがなと、常に洩らせる由。

病勢は日を追うて募り行き、九月より十月に入りては、早や歩行も物憂く、或日神樂坂の齋藤てふ唐物屋に行かんとて、樺島氏(醫師)へ電話をもつて問ひ合せ、其許を得ながら遂に中止したる事もあり。

因みに云ふ、夫人と相携へて散歩し、氷屋などに立寄れる事は、結婚後彼のアイスクリーム飲みに出掛けたるが始めてなり、他の媒酌をなせる時も夫妻車を列ねし事さへなかりき。退院後、芝の親戚の別莊にありし時、しけ〳〵夫人を顧りみて、共に勸工場へても行きて見ずやと云へるを聞きし夫人は、徐ろに暗涙を催せしとぞ。

夜分能く睡眠せしが故に、左迄の疲勞もあらざりしが、或夜、彼の胃癌の妙藥白屈菜を採收の爲め、戸田ヶ原に行けるものゝ夜更けて歸らざるより、藥採りに行き却つて怪我などせしにあらずやと、非常に心配し、平素より門下生のことなどは一方ならず心配する性なるに、今は又た病中の事とて感情も激しく、其夜は一晩眠り得ざりし程なりき。爾後絶えず夜は眠り得ざるに至れり。

枕邊に伺ふ門生の顏を見ては、『何か珍談はないか、』と云ふ。談はよけれど身躰の勞るゝ恐れあれば、皆遠慮勝に爲したりしも、一夕泉氏見舞に至れる時、婦人連の看護に勞れつらんと、少し代りて擦らんと云ひしに、『ぢやアやつて見ろ。』

脊中を擦りながら、若し差支さへなくば、夜更しは

馴れたる身なれば、今後夜伽に參らんかと云ひしを『それては來い。』との言葉なれば、其翌夜は泉、山里兩氏、蚊帳の中に入りて、一人は煽ぎ一人は擦りぬ。之れより夜伽は始れり。

其夜の曉方なりき、庭の百日紅の枝を見て、向ひに振下れるは簑虫ならずや、昨夜鳴けるやう覺ゆと言ふ。取りて見れば果して簑虫なり。其由を云へば、盆栽に這はせ置くやうにとの命、葉など盛んに食ふ虫なりと云へば、『それては木を枯らすといかんから何處か脇の方へ。』との言葉。前々より虫など餘り殺したる事はなかりし。

夜伽の始まれるを聞き傳へ、小栗、德田、柳川諸氏を始め、毎夜二三人宛門弟交る〳〵之れを勤むる事となりぬ。一人にては淋しとて、必ず二人乃至三人、多き時は五人位宛山人の所謂まづい面を並べたれば、本人もいたく滿足して、嬉しいとの言葉を繰返したり。茲に云ふべきは、小栗氏は甘きものを好

まねば、山人の之れを食する度、家内の人氏の爲めに酒を支度するに、氏は心苦しく思ひ、いつも正宗の二合瓶を携へて伺候し、初めの間こそ山人の前を憚りたれ、後には公となり、『今晩は酒があるか。』持ち來れる由を云へば、『枕許て話しながら飲め。』於是泉氏と共にチビリ〳〵傾けながらの夜伽せしとぞ。

初めは十二時頃より明け方まて伽をしたるも、斯くては却ッて睡眠の妨害なればとて、後には下に控へ居て、夜中の二時と云はず三時と云はず、目覺めたる頃病床に侍りぬ。

紅葉山人病危し。

終焉の二三日前よりは、唯だ昏々と眠るのみ、誰か呼べとの事に、呼び來るも、別に話するにてもなく、又眠るなりけり。

仝卅六年十月二十九日、秋風徒らに哀れを催す頃とはなりぬ。行く雲に、しぐるゝ雨に、悲しき秋の

（四）

姿かな。此日は實に山人絶命の前日なり。

午前四時頃の事、柳川氏は豫ねて骨董、刀劍に趣味を有せるが、此時、ふと氣付きしと見え、山人所有の宇多國宗の短刀、白鞘なるを久しく見せ給はず錆の出でやゐざる出して打粉ふらんと云ひつゝ、刀掛より取りて抜き放てば、明晃々として一點の曇なかりし。誰か知らん此刀、其翌朝白衣の上の守刀とならんとは。

仝日午後六時半、栗本博士診察をなし終へ、別室の安川氏（おきな家）に今晩あたりは警戒せよとの注意を與へて歸りぬ。此時丸岡氏來る、同氏より友人方へ電報す。友人親類略覺悟はせるもの〳〵、かゝる間際に至るまて終焉などとは皆思ひ及ばざりき。一は其の明快なる頭腦の、唯二時間前までも餘りには、さり過ぎたる程なればなりき。夫人は木澤氏（仝生病院長）よりの注意にて少し以前より其月中との事を知り、内々門弟に耳打せり。されど皆、まさかとの未練ありしなり。

斯くて廿九日の十二時頃に至り、容躰も宜しく急變はなかるべしと、集まれる人々も一先づ引上げ、夜伽は石橋、安川兩氏。

明くれば三十日、其の午前三時とはなれり。

枕邊に侍るものは樺山氏の母（夫人の母）、樺山直次郎氏、夫人、泉氏、看護婦。山人眼を見開くや、皆んな此方へ寄れとの事、云はるゝまゝに居並べば、玄關へ集まつて喧嘩などしてはいけないとさう言つて來い。次いで誰か友人は來らずやと問ふ。此時石橋氏入り來る。

愈々遺言せんとするなりけり。

家族に對する遺言も略濟める時、石橋氏の顔を凝乎と視て、『オー石橋！まだ居たのか。』『實は君の容躰が餘程惡いものだから、友人の總代として殘つて居た。』『さうか。』

次に文學に對する意見の遺すべきはなきやと問はれ、莞爾として曰く『僕は此れまて筆を執つて……倒れたんだから文學に對して別に意見と云ふやうなものはない。』

玄關に控へたりし門生等も、遺言との報に今更の如く胸塞しながら、二階の病室になだれ入り、枕邊を取卷きて。『先生々々』と口々に呼びぬ。其聲に兩眼キと見開き

『まづい面を持つて來て、見せろ。』

其れに應じて居合はす七人、顔を揃へて差覗けば、一人々々名を言へとの命に、『小栗です。』『泉です。』『德田です。』『柳川です。』……

一々頷きて、さて『お前たち、相互に扶け合つて、おれの門下の名を辱しめないやうにしろよ。——病中は忙がしい所を毎夜かはる〳〵夜伽に來て呉れて滿足した。どうか病氣に捷つて今一度生返り、世話をして遣らうと思つて居た事もあるが、もういかん。是れから力を合せて勉强して、まづいものを食つて

も長命して、唯だの一冊一篇でも良いものを書け……おれも七度生れ變つて文章の爲めに盡す積りだから……。』と悲愴極まる遺言を帶して、一座欷歔の音の洩るゝのみ。何と云ふべき言葉も知らざりき。

稍暫らくして、十三夜は幾日かと問ふ。傍より來月の三日なる由を答へしに、靜かに夫人に語るやう、『十五夜には皆んなを呼んで御馳走をしたから、片月見になると悪い、十三夜にはおれが居なくッても皆んなを寄せて團子でも食べさせろ。』と微笑を洩らしつゝ、『おれもさうすると穴の中から一句を詠まうよ。』

聞くもの皆な聲を上げて泣き入りぬ。

靜かに西の方に向き直り、合掌し了りて、

『直さん〳〵。』と突然呼びぬ。直さんとは夫人の令兄、醫師樺島直次郎氏なり。而して注射を迫りぬ。そはモルヒネを多量に用ひて、命を奪へ、止めを刺せよとの意味なりけり。餘り興奮せざるやうにと、樺島氏注意するや、山人は憤然として、『そんなに女女しくちや仕方がない、どうせ命が無い者が、悶へ苦んで二時間や三時間生長らへて何になるものか。——さア小栗鐵砲を持つて來い。』

小栗氏も此れには直と應じかね、躊躇ふ樣なるに『これ！鐵砲を持つて來んか。』小栗氏も困じ果てゝ、周圍には婦人方もある事なり、其樣な事は出來ぬと申上ぐれば、『理窟の分らぬ奴ぢやないか、此の苦みをして生きて居たつて何の役に立つものか、お前等が其樣な事を言ふは、死んだことがないからだ。嘘だと思ふなら死んで見ろ。』一同もなす處を知らざりしが、餘り興奮して心臟に變動起りては一大事、一先づ次の間に控ゆるが可からんとて皆下る。醫師は此時氏の言葉もだし難くカンフルにモルヒネ少量を混じて注射せり。

此れより氣分稍晴れて、鐵砲の事も云はず、非常に落着きて、何か甘い餡氣のものが食べたしと云ひ出でぬ。餡氣のものとて何もなければ、栗とんは如何と問ふに、唯だウンとばかり。軈て戸棚を搜し金鍔のありたるを持ち來れば、金鍔結構とて一口食しぬ。次には お汁粉が食べたし、併し時刻も遲ければ懐中汁粉をとて持ち來りしも、以前の金鍔にて胸つかへたればと、其儘止しぬ。

暫く控へ居れば、小栗、泉と呼ぶ。二人其れへ至り頭へながら枕邊に座す。時に泉斜汀氏。原口氏來れるよし申上ぐれば、頷きてさて文庫のことは如何にするやと問、こは豫ねて山人の意見により、其藏書を門下諸氏に貸する爲め、泉氏の二階に其れを置かんとの事なりしが、今文庫と云へるは、其の本箱は如何するやとの意味なりき。泉氏それは私等の方にて、堅牢なるものを造らんと答へしに、又頷きぬ。

斯くて、平生夜伽せし頃と少しも違はざる極めて穩かなる調子にて、小栗氏に向ひ、

『今夜は酒はどうした。』

持參せる由答へし時、泉氏又口を添へて、德田氏鳥と松茸の煮たるを持ち來れりと云へば『三十日近くにえらいな、——酒を持つて來て飲んだら宜からう。』

然し酒は下にて飲み盡せり。さらばとて某氏に酒と大なる盃とを命じ、その至るや例の如く泉氏と小栗氏の間に据ゑ、これにておれが一ぱい飲むとの事に、波々と注げば、手に取らんとせしも、衰弱甚しき爲めそれも叶はず、管にて口に注ぎ、さてあとは一口づゝ飲み廻はしぬ。

門弟との別盃終れり。

『石橋！是非解剖して呉れ……。』

石橋氏が思はずア、と生返事するや、『何だ生返事なんかしやアがつて。』と罵倒し、『乃公を解剖すると新聞屋なんざア種が殖えて喜ぶだらう。』と云ひて微笑みぬ。

次ぎには葬式の事に言ひ及び、是非怨籠にして、其の四隅に白き蓮華を挿むやうに、葬式は質素にしなくちやいけないぜ。其れより遺品の分配、總て滯る處なく言ひ了れる時、正に四時三十分。

天も此才人が死を惜めるか、此時俄然車軸を流す大雨を下し、一種云ふべからざる感慨を誘ふなりき。

夏の夜の明け易く、雨は降りながらほの〳〵と東の空明けかゝる。

『石橋、曇天だナ、何、雨が降つてる、どうも天氣の惡いのが一番いやだ。』と顏打顰めぬ。

其後遺言の勞れにて、スヤ〳〵と眠れるが、ふと又眼を覺まして、向に懸れる「剝し曆」を見て、『今日は二十八日かえ？何、三十日だ、さうかぢや剝して呉れ。』と石橋氏の紙を剝ぐを見濟し、次に『潮時は何時だへ？—生れる時も潮時だからね。』と永刧を生命とする文學者の言として味深き語を洩らしぬ。

軈て夫人を呼び寄せ、『喜久！手拭を熱くして、香水を附けて持つて來て呉れ。——汚くなつて行くのは嫌だから、おめかしするんだ。』

兎角して朝の六時を報じぬ。

石橋氏靜かに枕邊に近づき、『どうだえ乳でも飲んで見んか。』と云へば、『さうさナア、飲んで見やうか。』と快く頷きて、少量飲めり。

其れより布團を布き直し、床のものは總て新しくせよとの事に、其れを濟まし五六人手を添へ、再び布團に横はりしが、以後は昏々と眠るのみ、夜の十時頃再び目覺めしが、其れより次第に物言はずなり行き、今一度書生等を呼びて能く言ひ置き度き事あり、モルヒネの注射せんと云ひつゝも、唯だ眠れり。夫人心づけて皆を呼び寄せんかと云へる折しも、今は氣分惡し、二時間ばかりの後にとばかり、遂に其事は果さずして止みぬ。

午後十一時、紅葉山人病愈危し。

人々の耳より耳へと靜かなる而も恐ろしき囁は傳はる。病室は寂然として、折々時計の軌る音と欷歔の聲洩れ來るのみ。

隔ての襖の北の一端細目に開けられたる間より、白衣の看護婦頻りに出入し、廊下に彳める醫師と相見て私語す。

燈影水の如く靜かに滿室を流れたり。外面は雨降る氣勢す。

十一時は十分を加へぬ。醫師入りて、もはやカンフルの注射の効なきを宣告したり。

此れまで病室の些かなる物音にも慄然として心轟かせしを、今は吐息の音さえ聞えずなりぬ。看護婦またあらはれ、醫師と共に內に入れり。

月の入、引潮、といふ聲電の如く耳を衝く。

嗚呼明治三十六年十月三十日午後十一時十五分、紅葉山人は遂に逝けり矣。噫。

病中

躰量十貫目といへるに

我痩もめやすき程そ初袷

風葉子必携夜伽一壺

秋も雨も夜も物かはの其酒か

（紅葉句帳）

附録

追憶談

故尾崎紅葉先生著　芝居　全一冊
美本　郵税共三十錢

一篇八章、これを小説にしては、令夫人、胸算用、黒紬、並に金盃あり。これを小話にしては、倭字、電話、鼓なる哉、及び藥禮あり、山人の作、人の見ざるなく、讀まざるものあることなし、如上八章の内、世評既に例の如く噴々たるものあり、然も、義に因て筆を末開の地に入れたるもの、人の知らざるが少からず、如斯は異とすべし、一たび手にするものは新に寶玉を取つて蹴するの快なくんばあらず、表裝また優美清雅、繪畫色彩これに合ふ、之を書架に置く時其の文、其の書ともに比すべきものなからん也

東京日本橋　文祿堂書店

追憶談

尾崎未亡人談

△尾崎の追懐談と申しましても、もう之れまでに大概方々の雜誌や新聞に出て居ますし、別に珍しい事も無いやうて御座いますが、折角の御出ですから、一つ二つ――これとて皆様よく御承知の事だらうと思ひます。

△食物の八ケ間敷かつた事は評判になつてゐる位ですが、實際どうも妾などは一日その方ばかりにかゝつてゐるやうてした。あゝして始終夜分に書物をしたものですから、夜夜中でも何でも構はず食物を拵へさせては食べるのです。その傾向も年々募つて來るし、云ふ事爲す事もだん〳〵嚴しくなるやうでした。で、もう短い生涯てはありましたが、其間に食物と云ふ食物は食べ盡したと云つても可い位なんてせう。

初めは胃もさう弱くはありませんて――胃癌になる人は一躰に平常あまり胃の弱いものてはないと云ふ話ですね――だもんですから、氣に入つたものがあればそれを飽まて食べる、菓子でも何でも氣に入れば隨分澤山食べましたものです。が、中々容易に氣に入らないてす、餘程我儘の方でしたから、他所へ行きましても、決して長く辛棒が出來なくッて、直ぐ歸つて來るので御座いました。

△父讓りか知りませんが、子供が皆どうも胃が弱う御座いまして困ります。一番總領の方は生れると間もなく亡なりましたが、三人の子供――長女藤枝子次女彌生子長男夏彦――も生れた當分は散々胃腸て苦みました、此節では先づ別にどうと云ふ程てもあ

りませんけれど、夏彦はまだ學校へも遣らないやうな次第なんです。

△尾崎は子供の事に就ては餘り構はぬ方で御座いました。云はばまア子供嫌ひの方でしたよ。然し一旦子供が病氣にでもなりますと、大變心配致しまして、それが爲め新聞の方もつい休むと云ふやうな事は珍らしくありませんでした。

△妾が尾崎の處に參りました事に就てのお尋ねですか。何有別に之れと云ふ程の事もありません。

さやう、明治二十四年の三月でした、恰ど妾が十九の時横寺町へ參りましたのです。然し幼い時分には久我純之助と云ふ方の寺子屋へ、尾崎も通つてゐましたし、妾も參つてゐましたので、顏だけは其頃から存じて居ました。其後尾崎は大學の方へ參りますやうになつて、其の住所――尾崎の母は早く亡くなりまして、祖父と一緒に麴町に居ました――も離れましたので、逢ふ事もありませんでしたが、妾の兄は久我さんとも懇意にしてゐました處から何時しか久我さんが中に立つて、前申しました通り久し振りで尾崎とも逢ふ事になつたので御座います。尤も初め寺子屋時代はほんの子供の時でしたから、横寺町へ參りました時は、まるで初めての人に逢つたやうでした。

（二）

其頃尾崎は祖父と祖母と三人で居ました。其處へ妾が行きまして、暫らく四人で居ましたが、其中に泉が參りますし、それからだん〳〵賑やかになつたので御座います。

△どうも暑い處を折角の御出でしたのに、詰らん事でした。あの尾崎の事は泉が詳しく存じてゐる筈ですから、あれに御聞きなすつたら、何か又御話があるかも知れません。

紅葉君の性格に就て

江見水蔭氏談

其時代の文壇の風潮

紅葉君の性格をお話しするに就ては、先づ其當時（明治二十二三年より同二十六七年まで）に於ける我文壇の風潮が、如何なる狀態で有つたかと謂ふ事を知らなければならない。今でも多少其傾きが有るが、其當時の文士の多數は非常に衒氣が盛んであつて、名は言はれないが或る者は生噛りの外國文學を知つたか振りに振廻し、或る者は佛書の通を振廻して、座禪を組むとか、法衣を着るとかして（私なども浮かされた一人だが）人を脅かし、或る者は碌々讀み得もしないのに、人が來れば洋書を出して繙いて居ると云ふやうな次第で、自分を誇張し衒ふことに腐心しないものは殆んど無かつた。故に口には却々高尚な事を言散らして、知らない者は本統に豪いのかと考へる程假面々冠を得て居たのであるが、其處へ紅葉君が赤裸々で躍り出して、イクラ口で大きな事を言つて、仙人がり、高僧がり、大哲學者、大詩人がつて見せた處で駄目である。詩人だつて人間だ、おまんまを食べずに生きて居られるかい、と云つた樣な調子で、大詩人がる連中に殊更突掛つたものであるから、今迄外見ばかり美しい超脫的な說に衒惑されて居た讀者や批評家は、紅葉君の態度が餘りに卑俗に見えたので、鉾先を揃へて非難し攻擊したのであつたやうに考へられる。斯く紅葉君は平凡なる眞理を無遠慮に發表した爲に、甚しく世間から誤解されたけれども、此非難攻擊は時を經るに從つて薄

らいて、紅葉君死後の今日に至つては、君の品性の卑しくなかつた事に就ては、何人の異議を挾む者も無いやうに成つたと考へる。

其性質

紅葉君は非常に感情の強い人で有つた。只其一例に過ぎないが、曾つて僕が片瀬に浪人して居た時、自分で沙魚を釣つて之を燒いて藁束に刺して贈つた。所がそれを大變に喜んで、（燒沙魚に思ふが君の痩をしも）と云ふ句を讀んで寄越して呉れた。凭う云ふ風に何事にも能く感じ能く思ふ情の人で有つたが、或る種の境遇の爲に意志を以て無理に此情感の激發を抑制しやうとした。それが爲に意志と情感との衝突は、外面にこそは顯はさなかつたけれども、却々烈しかつたやうに僕等には見られたのである。が時としては到頭抑へ切れなくて、意志の壓抑を破つて洩れ出たので、僕は寧ろ其意志を取去つての情感の

迸りを多く歡迎して居る。義俠心に富んで居たことや、研究心即ち物に凝性であつた事は、既に僕が言ふまでもなく誰でも知つて居る所であるが、何しろ紅葉君は（來る者は拒まず去る者は追はず）と云ふ主義な人で、自分を賴依つて來る者の爲には、全力を擧げて盡して遣るのであつた、今現に文壇に名を打つて居る名士の中で、門下生以外に、曾つて紅葉君に原稿の添削や、周旋や、其他種々な面倒をして貰つたり恩を受けた者が少くなく、其世話を受けた先生達が少しも其恩を思はずして、加之惡口を突いたり皮肉な手段を執つて攻擊したりなどしたのも無いではない、けれども紅葉君は憤りもせず何とも思はないで、其者共が後になつて又色々な賴みに來れば、前と少しも變らないで親切に世話したのである。これも皆恩を賣らうと謂ふ下劣な考が無いからの事で有つた。此點は故人の美德中の重なるものと考へて居る。

硯友社創立の理由

世或は紅葉君の硯友社創立を以て、文壇に黨派を樹て、自己の權勢を張る爲にしたのであると言ふ。けれども此言たるや其當時の文壇の狀勢を知らず、且つ紅葉君初め吾々硯友社同人の心事を明にせざるに基いたもので、其間違たるも甚しいものと謂はねばならぬ。抑硯友社の起つた所以と言ふものは、當時假名垣魯文一流の所謂戲作者肌の人は既に衰へたりと雖も、其系統に屬する人々は猶勢威を擅にして居たり、それから篁村、南翠諸氏の勢力を有して居たので、漫りに新進作家の頭角を露はすべき舞臺がなかつた。爰に於てか弱き青年作家が文壇に立つて行くには、是非團結して共同で舞臺を造る必用を生じ、他を倒すと云ふ目的ではなく、自家を起てるといふ熱望の爲に硯友社を組織したのである。爾後硯友社同人は多くは文壇に獨立して行く事が出來るやうになり、又三三子は實業界に身を投じたりしたから、最初社同人の目的とした文壇に立つの自衛策たる硯友社は社交的の會合たるに至り、今日では親族關係として永續して居る樣な譯で、唯我々が仲を好くして居るといふ丈を見て、直ちに閥を作つた樣に言ふのは餘りに酷てあると思ふ。何時の日に閥を作つて文壇に害毒を流したか、明治文壇の歷史を調べて貰へば分るので、何處か然ういふ面影を紅葉君が留めたらうか。有るならば一つ見せて貰ひたい。

作物に對する用意

紅葉君は自己を作物の上に現はすことを避けるやうに氣を着けたらしい。當時の作家の多くは、自己若しくは自己に近き人物を小說に飛出させて、之を理想小說の本領のやうに考へて居た傾きがあつたが、紅葉君は常に夫をしない樣に注意したからして、小說中の人物が紅葉君に似て居ると云ふ樣なのは殆ど

稀れである。『金色夜叉』の間貫一は紅葉君自身をモデルにしたのだなど、言ふ人も有るが、貫一の性格と紅葉君の性格とを比較して見るのに、決して其樣な形跡を認めることが出來ない。時として紅葉君の酒落なる一部が、貫一の或る個處に出て居ないでもないが、大躰に於て大いに違つて居る。話は餘事に亘るが『金色夜叉』の人物は大概他にモデルがある、併し僕は永久秘密として人には語らぬ積りだ。それから大底の作家は自己の作物に對する批評が當を得なかつたり、酷にでも失して居ると、無暗に批評家の惡を罵つて見るとか、辯解して見るとかするのであるが、紅葉君は決して其樣な事をしない。批評が如何に公平を缺いて居やうが、無禮を極めて居やうが、それに對しては何も言はないで、偉いか偉くないかは分る時に分ると濟して居た。曾て紅葉君の追悼會の席上で、高田早苗氏が之は實に文豪の大度量であると稱讃された事があつた。

（六）

逸話　一　奮發の動機

或る時僕と紅葉君と二人で、神樂坂の鳥金で飲んだ事があつて、僕が親族關係の或る面白くない事に就いて話をすると、紅葉君も之れと同じ樣な話をして歎じたのであつた。と謂ふのは、紅葉君が未だ子供の頃の事で、資產のある親類の主人夫婦及び其二人の子供と共に飛鳥山の花見に連れて行かれたが、昼食頃になると「德」お前は家へお歸りと云はれて、外の者共は海老屋であつたか扇屋であつたか、瀧の川の料理屋に入つて了つたので、仕方が無いから自分は只獨りきりで歸つた、すると矢張親類の婦人が居て、德さん一人で何ぜ歸つて來た、皆んな御飯を食べに行つたのに、お前だけ腹を空かして歸るといふ事はないよ、之は馬鹿にされたのだよ、姿がお錢をあげるから、今一度飛鳥山まで行つて、同じに御飯を食べてお出なさいと云はれて、偖は己れは邪魔がられたのか、馬鹿にされて居るのだなと思ふと、悲しいやら恨めしいやら、初めて其所で泣き出したと云ふので有つた。此樣な刺擊が澤山集つて、故人をして、大いに發奮せしめたのではあるまいかと自分は考へて居る。

二　外套の仇打

何時頃であつたか忘れたが、石橋思案君の外套が餘り舊式であつたので、硯友社同人が寄ると觸ると之を罵倒の的にするのであつたが、殊に紅葉君が例の酒落な口調で以て、皮肉な罵倒を甚しく加へたものだ。其後紅葉君が外套を新調したが、其外套といふのは例のコリ性から工風されたので、實に珍妙不可思議を極めたものだ、前から見れば陣羽織の樣である、後からは十德の樣に見える、廣い襟の附いた一見抱腹絶倒に價する代物であつた。之を見た石橋君は親の時より子の時と、自分の古外套を罵倒された俱不戴天の父ならぬ外套の仇を外套で取らうと、目茶苦茶に冷かすやら、馬鹿にするやら、罵倒するやらで流石の紅葉君もそれを着る勇氣も無くなつてしまつて、碌に手を通しもしないで廢物に歸せしめ、同人間の笑ひ草の種を作つた。之は凝り過ぎる一例だ。

三　分捕軍旗

僕が片瀨に居た時分は、よく漁夫の子供等と南京花火を投げ合つて、戰爭ごッこをして遊んだものだ。或る時紅葉君が小栗君(?)を連れて遊びに來て居たが、例の如く小供等が戰爭ごッこの勸誘に來たので、紅葉君に行かないかと薦めた所が、馬鹿な、そんな眞似が出來るものか小供ぢやあるまいし、と劍もほろゝの挨拶であつた。僕は紅葉君を家に措いて、海岸へ出て小供を相手に南京花火を投合つて夢中になつて居ると、突然後ろの砂山の上から突貫の

聲が起つた。見れば夫は先刻僕の蔦めを無氣に跳ねつけた紅葉君で、驅て砂山を驅け下りて來るや、小供等の軍に突入し。奮闘激戰して遂に其軍旗を奪ひ取つてしまつた、そして其軍旗を持つて僕の家に歸ると、「砂山の役紅葉之を分捕る」と紙に書いて張りつけて喜んで居たのであつた。之等は意志が情感を抑へ切れなかつた一例として見るべしである。

四　怨籠の柩

紅葉君が臨終に際して、葬式の時は柩を怨籠で遣つて呉れと遺言されたので、其遺言に從つて柩を怨籠で送つたのである。紅葉君恁う遺言をした眞意は、自分よりも目上の人々に送つて貰ふのに、其人々よりも高い所に居るのは失禮に當るからと云ふのであつた。之に就て僕は下の事を不圖思ひ出して、紅涙の潸々として頬を傳はるを禁じ得なかつた。それは、前年僕と紅葉君其他小波、乙羽、雪後の諸氏とで吉野の花見に往つたことが有つて、其時紅葉君が贈物の爲に一人金色の裝飾美しい怨籠に乘つて櫻を觀歩いた。紅葉君はそれを非常に心持が好かつたと喜んで居たが、今死する際まで其時の心持の好かつた事が忘れられないで居て、それで輿で柩を送つて呉れなどと遺言したのでは有るまいかと思はれたからである。

（八）

知られざる逸話

石橋思案氏談

鋏と糊

茲に鋏と糊と云ふのは普通に謂ふ意味とは異ふ、即ち新聞や雜誌やなどの切抜を繼ぎ合はせると謂ふやうな卑劣な意味では無いのである。紅葉君は元來が下書をすることなしに、直ぐ原稿紙に打つけ書きをしたもので、氣に入らない所が有ると、傍に大きな鋏を置いて夫で紙を切つて張着け、其上に書直すのである。それも一寸やそつとならば善いが、有名な文章の洗練家の紅葉君の事であるから、書いては張り着け張つては書くと謂ふやうな譯で、終には原稿紙に折目をつける事も出來ない程厚くして了ふのであつた。て紅葉君自身にもそれが五月蠅かつたと見えて、或る時僕の家に來て、僕が大阪半紙のノートブックに下書して居るのを見、己れも之から其樣仕やうと言つた事があつて、其後ほんの少爲遣つたやうて有つたが、矢張り鋏と糊の方が善いと見えて、又元に歸つて澁紙の樣に厚い原稿を作つて居た。

指を嚙む

紅葉君が原稿に向つて居る際などに想を練る時は、必ず右の中指の背を嚙む癖が有つて、中指の眞中の關節には常に胼胝があつたのである。而して此胼胝の紅葉君に於けるや恰も晴雨計の天候に於けるが如きもので、若し紅葉君の勉強して居るや否やを知らんとするときは、此胼胝の隆起の度の多少に依つて判斷するので。隆起の度が高ければ嚙む事が甚しいから、即ち熱心に作物に從事して盛んに想を練つて居るので、低ければ惰けて居るのだと分るのだ。最も此胼胝の居たのは、大學時代に拳固を以て机を叩く癖が有つたり、文久錢などを指の間に挾んで叩折ることを仕たりしたので其當時から有つたのだが、後に指を嚙むに至つて益々大きなものに成つたのである。

文字の苦心

凝性、研究性は紅葉君の特色で有つたが、其最も感

（九）

服すべきものは文字の撰擇に一通りならぬ苦心を費した事で、キヨロ〳〵とかゴタ〳〵とか云ふ樣な壘語には、果して如何なる文字を用ひたらば善からうかと謂ふ事を研究して、自家用の壘語集を作つた、惜しいことに今夫が何うなつて了つたか分らないで殘念である。又熟字の當塡め方に妥當でない所が有れば何時迄も考込んで居る。或る時讀賣新聞の小說を書いて。原稿は既に出來上つて居ながら、熟字の氣に入らないのが有つた爲に、二三日揭載するのを休んだ事さへ有つた程である。

謠曲嫌ひ

遊藝は大抵のものを好んだ。が什麼謂ふものか寄席に往く事と、音曲殊に謠曲を嫌つて居た。それに就いて頗る面白い話が有る。僕と巖谷小波君とが下手な横好に謠曲を遣つて居て、一處に寄りさへすれば唸り出したものである。所が紅葉君が矢張り同じに

居てもすれば、嫌ひなのを知りつゝ遣りもされないから、紅葉君は酒を飲めば處構はず寢てしまふのを利用して、酒を薦めて寢せて置いて夫を見澄まして僕等は唸り出す。興沸いて來て思はず銅鑼聲を張上げると、先生ポカンと眼を開いて床間などを枕にしてゐながら、頭も上げず恨めしさうな聲をして、又初めやがつたなア、など言つたものである。

好きな遊藝

遊藝の中で第一等に好きなのは大弓で、長男（死んだ）の名を弓之助とつけたのも弓の好きなのに基いて居るのだ。それで大弓を引きに往くのは牛込の獅子寺と極つて居るので、畢過ぎ頃から紅葉君を其家に尋ねて留守であつても、獅子寺へさへ往けば殆んど逢はれない事は無いと謂ふ程であつた。其弓を引くといふのも普通の人の樣に的を射れば足るのでなくて、研究家のことて有るから、矢の羽が何うの何が恁うのと一々講釋附で六ケ敷く遣つて居る、僕なども其講釋を幾度も聞されたものである。それに凝性であるから、弓でも矢でも何だとか彼だとか云つて撰擇したのであつた。第二に好きなのは玉突で次に寫眞をとることが好きであつて、寫眞機械などは素人にして隨分贅澤なものを持つて居た、が撮影したものは餘り善く出來なかつた樣だ。

下駄の伊達

江戸ッ子趣味の然らしむる所から、大に通がつた下駄を穿いた。牛込神樂坂上の上州屋といふ下駄屋が常得意であつて、ばら緒の鼻緒だとか何だとか云つて乙に氣取つたものだ。其又伊達な下駄を穿いた歩き振と來たらカラン、コロンと引摺つて容態を作つて歩くので、その一種風變りの歩振りの下駄音を聞けば、ハヽア紅葉君が遣つて來たなと合點されたのである。曾て大橋乙羽君の新婚披露が佐平氏の戸崎町の邸に行はれた時の事で、招かれた者や皆の寫眞を撮るといふので庭に出たのであつたが、撮影も了へて皆が家に入り嚮て式宴も濟んで思ひ〳〵に辭し歸らうとしたが、什麼いふものか獨り紅葉君の下駄が其影を隱してしまつて歸るにも歸られない仕儀、はて面妖な下駄に羽根でも生いたのかと騷ぎをした。所が探して見ると哀れ口惜しくも紅葉一代の伊達な下駄が、燒杉の藤の緒の庭下駄と一所に成つて居たのである。聞けば皆が庭に出て寫眞を撮つた後で下駄を片着けるとき、女中が庭下駄と思つて一緒に隅の方へ押片着けたのだと云ふ。恁う分ては流石の紅葉君も憤りもされず、以後友人仲間の笑草と成つた。

好きな唄

紅葉君は酒の席で十八番に唄ふ唄が一つ限り極まつて有つた「私の好きなは世界に二人井原西鶴シエ

キスピヤ」と云ふのが即ちそれである。以て如何に西鶴とシエキシピヤに私淑して居たかと知れる。

蕪蒸し

日本橋の玄冶店に藤村といふ京都の出店である乙な料理を食はせる家が有る。縦令江戸子だからと云つて、江戸料理ばかりも面白くない、たまには風變りなのも好からうと紅葉君と僕とで其の藤村といふへ京都料理を食ひに往つた。膳が出て椀の蓋を取つて見れば、茶椀蒸には大根おろしの様な物が使つてある。はて妙な椀蒸も有ればあるもの、所變れば品變るで色々な事をするものだと思つた。それにしても大根おろしの臭ひがしないのは流石巧妙いものよと讃めちぎつて歸つた。然るに豈に計らんや家に歸つてよく聞いて見れば、大根おろしの臭ひのしないのも其の筈、敢て拵え方の巧妙いのでも何んでも無い、それは蕪蒸と云ふのて有つたのだ。而かも知らなかつのは僕ばかりではない、通がり家の紅葉君まで其様だつたので、後で大笑ひになつて了ふた。

お薩が好き

紅葉君の薩摩芋を好むことは大變なもので、其時分一錢に二つ位の蒸菓子は可なりなもので有つたが、そんなものよりは寧ろ燒芋の方が善いと云ふので、僕の所に來ても燒芋の有る頃には必ず夫を茶菓子に出したのである。而して芋は薩摩芋ばかりでなく、里芋の煮ころばしなども好んで食つた。

廣津柳浪氏談

私が紅葉君と初めて面識したのは、今の文庫の前身で有つた少年園が、第七號の祝賀會を不忍辨天の中の長酡亭に催して、それに招かれて往つたとき席上で坪内君などと共に知つたのである。それから段々繁く交際するやうに成つて、遂に硯友社に入る迄に至つた。けれども私が硯友社に入つたのは、別に改まつて同人に成らうと言つたからでもなく、又紅葉君の方で入れと言はれたのでもない。只近しく往來し交際して居る中に、明治二十一年十一月頃に成ると、社會でも私を硯友社同人だと認める様になり、私自身にも其様な心持て居、紅葉君其他の硯友社同人もさう思ふ様になり、づる〳〵べつたりに仲間入をしてしまつたのである。

而し私は硯友社同人に成つたけれども、他の人々のに君呼ばりをする程にまで親密に至らないて、常に尾崎様とか廣津様とか様附に呼び合ひ、互に遠慮がるやうな氣味が有つた。それて私が作物を持つて行つて直して貰はうと思つて頼んても、什麽いふものか他の人のを添削するときのやうに筆を加へて呉れなかつた。斯んな鹽梅ては有り且つ私は死んだ大橋乙羽君と同時頃に硯友社といふものに入つたので、其以前から入つて居る他の同人のやうに詳しく紅葉君を知る事が出來なかつた。隨つて茲に話すのも遺憾ながら稍粗漏に失するかも知れない。

不言不語の爲之助の様な人物の性格が餘りよく活躍して居るが爲めに、紅葉君はそれ自身の性格品行をも社會から疑はれた事があつた。けれども紅葉君は決して其様に輕薄な卑しい品性の人では無い。金色夜叉の貫一が高利貸の手代に成り下つて、友人の鎌田の所へ貸金の催促に往つた時の様な、激逸の情が時としては表はれることが有るが、世人の謂ふやうな傲慢だの不遜だのと云ふ性質は少しもない。元來紅葉君は遲筆の方て有つたから、氣が乘つて漸く書き初めて居る所などへ面會を求めれば、初めての人のみならず相識の人をさへも謝絶した。併しながら若し此等の事を以て紅葉君の性格を疑ふやうなら

ば、其は謬れるの太しいものと謂はなければならない。

紅葉君の子弟に對する態度は甚だ嚴格なものであつて、子弟の作物などに向つては些の容赦なく嚴評を加へ、又抹殺したり添削したり殆んど原作の痕跡を留めない位にまでする事がある。けれども之は子弟を敎導する態度で、他の場合に在つては情愛の厚いこと傍から見て羨しい程であつて、宴會になど往つて土産でも提げて歸れば、自分の家の方へは持つて行かないで、小栗君、泉君、柳川君の居る方へ持つて行つて、皆一緒に語りながら食つたもので有る。

さう謂ふ關係からか什麼かは知らないが、紅葉君の門下には文壇の名士が幾人も出た、然るに露伴君の門下からは出ない。此邊の事情を詳細に調べて見たら餘程面白い事で有らうと思ふ。

紅葉君の作物の筆を執る時間は、初めの中は晝間を撰んで、日のカン〳〵當る樣な座敷の庇の所に白い

幕を垂げて書いたのであつた。それが後には全く夜間に執筆する樣になつた。泉君が曾て或る雜誌で最初から夜間に書かれたと云はれたが、それは泉君が紅葉君の夜間に執筆するやうに成つてから入門したので、其以前の事を知らない爲めで有る。

私の思ふ所では、紅葉君の作物の中では其骨の折れた又世評の高い金色夜叉の樣な長篇物よりも、若い時分に作られた『おぼろ舟』『夏痩』の樣な短篇の方が優に勝れて居る。であるから若しも紅葉君が金色夜叉時代に短篇物に全力を注いだならば、もつと偉らい作品を得ることが出來たてあらう。

紅葉君は芝神明町の紅葉山の麓に生れたのだと云ふ。曾て紅葉山人の山人は可笑しいと言つた所が、何に紅葉山の下で生れたのだから、全體其まゝを取つて雅號にしたのであると話した。父は谷齋と云つて牙刻りの名人で、其彫刻に成つた印籠だとか煙草入の根付、緒締などは、中々世人の喜んだもので有つた。けれども昔しから別て斯ういふ彫刻物の名人となると、氣が向かなければ、いつがいつまでも仕事をせず、常に好んで、花柳巷や劇場やの內に生活した。紅葉君は之を非常に苦痛に思つて、何も秘し立てする事も無いのに父の名を私共に迄告げなかつた。さう謂ふ風な人で有つたから、紅葉君は自分の身を處するには極めて純潔に高尙に、天晴立派な紳士たる體面を維持しやうと細心なる注意を爲して居たのである。

巖谷小波氏談

尾崎に初めて會つたのは、明治二十年頃、彼が廿一、私が十八の時でした。其時の尾崎の服裝はどうも奇態なものでしたよ。汚い、羊羹色に剝げた、豫備門の制服に、白けた帽子、其れにズックの靴の怪しげなのを穿いてゐました。

其後間もなく「硯友社」が出來、「我樂多文庫」が出る事になりましたが、當時尾崎は、狂歌もやれば、都々逸もやる、小說も書くと云ふ風で、四方八面に切つてまはつたものです。だから一寸想像すると、尾崎は何だか通人的な人物であつたやうですが、事實は其反對で、頑固な、武骨ものて、擊劍や劍舞に趣味を有つと云つたやうな人でした。此れには私も驚いたのです。

何時か遊びに來いと云ふ事で、其飯田町の宿へ行つたのですが、三疊の狹くるしい室、襖だの、壁だの、處さらはずべた〳〵と種々なものが張りつけてある。摺物、古い番附のやうなものから、包物の上紙、昔の繪草紙など、何んでも自分の好きなものは、凡て眼の前に張り付けると云ふ主義。机の上などが又めちや〳〵になつて、其の汚い事は夥しいものでした。然し先生話は非常に巧く、三時間四時間、少し

も客を退屈させなかつたです。私も其の家へ一二度話に行きましたが、其間以前から杉浦先生の塾で知己になつてゐた、江見を紹介する事となつて、或日二人で出掛けたんです。途中雨に逢つたので、江見は菅笠に、簑を着、私は足駄ばきの番傘と云ふ異形の服裝で、庭口から這入つたのには、尾崎も驚いたのです。其頃江見は頻りに其樣な奇行をやつて、喜んでゐたんです。後で尾崎から二人の有樣を書いて、それに狂歌をつけて送つて呉れました。

其れから非常に世話がすきで、一寸人が賴むと、宜しいと云ふので、自分の事は其方のけにして置いても、一生懸命盡力する。斯うしなくては什麼しても濟まさぬ人で、人の原稿など世話したのも隨分多かつのです。

又、人に忠告する事が好きで、友人のうちで尾崎の小言を喰はぬものはない程でした。門下の人に對しても隨分嚴しいので、側で見てゐても氣の毒な位。

其の癖尾崎を忠告する人は殆ど無かつたのです。此樣な風でしたから、多くの交友の中には、一寸した誤解から喧嘩をして、其れッ切り中の直らなかつたものもあるのです。私は格別これぞと云つて、云ひ合つた事などなかつたですが、或時私を非常に忠告した事があります。私の方では左程の事とも思はなかつたのに、涙をふるつて云つて呉れるぢやありませんか。所謂多感多涙の人でした。

勝負には非常に熱心でしたが、其れほど巧くなかつたやうです。然し其凝ると云つたら甚いもので、弓を引き出せば朝から晩まで、球を突き出せば之れ亦朝から晩まで、もう無我夢中になるのです。私が元園町に居る時分、近所に玉屋があつた。或時遊びに來て、私は夕方用事があるから、それまで球を突かうと云つて出かけ、私は二三番して出て了つたのです。それから宴會に行つて、十一時過ぎ家へ歸り、寢やうとする時どん〳〵戸を叩くものがある。開けて見ると尾崎です。あれから今まで突き通に突いて居たので、もう〳〵と〳〵に疲勞れて、今からとても歸れぬから泊めて呉れいと云ふんです。此樣な風で、萬事負け惜みの强い、凝り性でしたから、此れが其文章にもあらはれ、一字一句苟くもしなかつた。私と球を突くのを嫌つたのは、私は負けても勝つても什麼でも可いと云ふので、少しも張合ひがないからといふのでした、凡て可い加減にして置くと云ふ事の出來ぬ人でしたから、無造作に出來る事でも、ついおッくうになつて了ふ。友人同志で遠足などやるにも、前以て尾崎に知らせると、種々六ヶ敷い事を云ひ出して、ついお流れになる處から、其間際になるまでは知らせずに措いて、愈々接迫してから知らせるやうにして居ました。

其れから朝寢坊は晩年まで續きました。尤もそれは夜更しをする勢でもありましたらう。私が京都に居た頃二度ばかり遊びに來ました。一度は乙羽などと吉野の花見に來て泊つて行きました。一度は通知も何もせず、突然來て朝まだ五時頃ですドン〳〵戸を叩くものがありますから、開けて見ると尾崎です。此れ等は矢張り尾崎的の處です。實は泉の處から手紙が來て、一度會ふてそれから連れ立つて東京に歸る積りで、加賀に行く途中、關ヶ原あたりまで來ると、急に君の家が戀しくなつて立寄つた。今度は些少も君を煩はさず、一人で京都の食物を研究するのだとの話。四五日滯在して、一人でも隨分遊び歩きましたし、私と伴れ立つて諸方を見物したんです。

私は朝が早い方ですから、毎日、新聞の續き物を書き終つた頃、先生やつと起き上つて、『君は早いなア』と云ふのです。何有、私が早いよりも先生朝だと思つて起きるのが、何時も十時か十一時頃なんです。其かはり夜は幾らでも遲くまで起きてゐて喋る。食物は實際贅澤でした。人の家へ來ては其食物を鵞倒するのです。君の家へ來ると何時も不甘いもの

ばかり食はせると、頭からけなすので細君は閉口してゐました。

江戸ッ子風の人であつたに拘はらず、藝と云つては何にも出來ない、又た其嗜好も蟹カラの方でした。鳴物が嫌ひで、歌は唄はず、劍舞だとか大弓、撃劍、銃、ネッキ、竹馬等惡太郎的の荒ッぽい遊戯が好きでした。一寸考へると宴會の席などで、意氣な聲で長唄でも唄ふかと思はれるが、其れとは反對に蟹的なドラ聲を張り上げて衣至肝を唸ると云ふ風。

次に厚かつた事は、實に感心でした。私が京都から此方へ歸るに就いても、大橋から尾崎の處へ、此度小供專門の雜誌を出さうと思ふが、誰れか適當な人はと云つて來たので、其れは巖谷に限ると云ふ事になつて、早速私の方へ手紙を寄越しました。其當時私は恰ど行つてから二年目でもあるし、大分面白くなつて來た時ですから、今一年丈歸り度くなかつたのですが、どん〳〵手紙を送る、電報を打つ、何

時までも田舍に引こんで居ても詰らない、是非歸るやうに、其れには此度が非常に好い機會だからと云ふので、一生懸命に奔走して呉れたのです。其れから乙羽の大橋へ婿入したのも、矢張り尾崎の肝煎りなんです。春陽堂の先の主人が變りもので、尾崎とは殆ど友人同樣に懇意にして居ました。其麼事から春陽堂には隨分盡したものですよ。其他下らぬ人にも世話をしてやる。頼まれゝば厭とは云はれぬ性でしたから、其れが爲め迷惑を蒙つたり、馬鹿にされたりした事も多かつたのです。

其後私が西洋に行く時も、留守の世話から、途中で金に困るだらうと云つては、金の心配まで爲て呉れたし、向に居る時も、始終手紙を寄越して慰めて呉れました、手紙と云ふものは、手數も何もかゝるものでないが、實際は中々出せるものではないのです、其れを少しも怠らずつとめて呉れた、之れ全く其友情に厚かつた爲めです。其れから歸朝の際にも、歡迎會は恁麼の、金は彼麼のと一人氣を揉んで呉れました。

私の留守中から胃が惡いとの事でしたが、歸つてからは以前のやうに往來もせず、それも私が行けばよいのだが、忙いのでつい足遠になると向からも氣分が惡いとかて、滅多に來ないやうになつたのです、其後漸次病勢が募つて、愈々大學病院で胃癌と云ふ事に定つた。さア此れを尾崎に云つて聞かせるが可いか什麼かといふ事が友人間の相談となり、考へた上句、云ふのは一寸苦しいが、本人の爲めには早く知らせた方が可いだらうからと、小宴會を開き、其の席上で君の命も此の秋までがものは無いぞと、露骨に云つて了つたんです。其れと同時に死後では君の全集を出し、子孫遺族の世話は云々にするからと打明けた處が、尾崎も非常に喜びました。其れまでは、尾崎も晩年讀賣新聞から喧嘩をして出て了ひ、二六新聞でも病氣の爲め力の入つたものは書かぬので、餘り喜ばれて居なかつたし、一人で煩悶して居たんです。其麼場合でしたから、十千萬堂設立の話を聞いて大に安心したやうでした。

此の十千萬堂設立の事に就ては、築地の質屋の主人で川喜多嘉兵衛と云ふ人が大變心配して呉れたんです。此人は以前から尾崎を崇拜して、尾崎の爲めには如何なる事でもする、と云ふ意氣込で先づ十千萬堂の印税で遺族の世話をし、其基本金まで出さうと云つて居た。處が此人は八月中一週間ばかり病つて、殆んど頓死のやうな死樣をして了つたので、尾崎も大に力を落して居ました。が、其案も常に履行せられる事になつて、豫ねて期したる通り『紅葉全集』を出したのです。之れには博文館の主人も殆ど義俠的に出版を請け合つて呉れたのみならず、定價をこれ〳〵にして、三千部の印税は先きに渡して呉れるやうに、と云やうな注文を一々容れて呉れたのです。

其様な事はせんても、尾崎の妻君の實家は資産家でもあるし、心配は無用いが、負け嫌ひだから什麼しても細君の實家のお世話になる事を潔しとしなかつたやうです。また生きて居る間に、諸方と出版の交渉濟になつた手紙を見せたら、非常に喜びました。『紅葉全集』も常に賣行が大變よくて、尾崎は生前よりも死後に於て却て金持ちになりましたよ。

徳田秋聲氏談

私が初めて紅葉先生の門に伺つたのは、左樣明治二十五年頃でしたらう。今の法學士桐生悠々君と二人で、文學をやらうと思つて上京した時、原稿の書いたのを持つて居たので、先生に見て頂かうと思て行つたのです。其時泉が玄關に居ました。泉は之れまで途中で逢つたり雜誌か何かの口繪で見た事もあつたので、顔だけは知つて居たのです。先生はと尋ねますと、生憎其時はお留守でした。其後二度ばかり伺ひましたが、何時も折が悪くてお目にかゝれないです、一躰何時頃御在宅かと尋ねましても、不規則にお出かけなさるから、何時も定つては居ないとの事。で、仕方がないから手紙をつけて原稿をお送りしたのです。するとまづくていかんとかで、何んでも突返されたのですよ。

其れゞきり私は再び國に歸るやうになり、桐生君は大學の方へ入りました。——大阪に放浪し、續いて越後に放浪し、二十八年頃また東京に上りまして、今度は乙羽君の心配で、博文館編輯局の隅ッこに入る事になりました。何んでも百科全書のやうなものを手傳つて居ました。其頃泉が『外科室』で賞り出したやうに記憶します。泉は博文館へも一寸々々來ました處から、何時とはなしに話をする、話して見ると同國なので、懐しいやうにもなり、自然話がよく

合ふのでした。する中に、泉が先生は始終君の噂をして居らつしやるが、遊びに來んか、來て見るが可からうと云ふので、つい私も其氣になつて、又伺つたのです。今度は柳川が玄關に居ました。が、先生は矢張りお留守、辭して出やうとする時、臺所口から紺飛白の單衣を着た丈の高い影が内へ入つた、先生だなとは思ひましたが、引返すも可笑いもんですから、其まゝ行きかけると、恰ど寺の横町まで來た時、後から柳川が追ッかけて來て、先生が唯今お歸りですと云ふ。ぢやお目にかゝらうと戻りました、時に夜の八時頃だッたやうに覺えます。

先生は二階の二間ある中、入口の廣い方にお出でした。此れまで想像して居たよりも餘程ちがつて居ました。すました方、にやけた優男のやうに想つて居たのは、大きな誤りで、極さつぱりとした、磊落な方で、何んでも胡座をかいて、扇子一本持つて種々お話をして下すッたのです。話の中に、自分は近頃デッケンスを讀んでゐるが、彼れの作には非常にウイットがあるとの事、先生の文章にも矢張りそのウイットが多いやうです。其れから私に何か書いて見ぬかと。仰しやつて短い亞米利加小説の原文を下さつて、之れを譯して來いとの事でした。其晩歸ると二日ばかりして譯して持つて行きました。處が此んなに細かく書いては不可、半紙の厚いのにもッと大きく奇麗に書いて來いと云はれました。で又其晩方此度は一枚五行位の大きさに書いて行きましたが、其時は別に大したお話も伺はなかつたやうです。其小説は「近畿自由」とか云ふ新聞に載りました。矢張り其時でしたが、俳人の話があつて、中間の中で運座があるが出ないかとの事で、其れから私も一寸々々出かけました。

兎角するうち、小栗が發頭になつて、筥筍町に塾を開く事になりました。塾へは先生も始終お出になりますし、私が親しく先生に接したのは此頃です。

其れから先生の平常に就いて、思ひ出した事を一つ二つお話ししませう。

或時代には、發句の添削だの、序文書きだの種々な事をなすつたのですが、其れ等は皆彼方から引き、此方から調べ、それは〳〵念の入つたものでした。文章がまた一字一句も疎かには書き流されず、消しては張紙をし、又消しては張り紙をすると云ふ風。と云つて文章は決して晦澁の方ではなく、一旦すら〳〵と書き流して置いて、後からの添削に骨を折られたやうです。

又、習字する事がお好きで、何處かで字の形のいゝのを見つけると、それを紙にうつし机の前の硝子に張り付けておいて、暇さへあれば始終筆をとつて習つてお出でした。

住家については、理想はお有りでしたが、何分金の費途が多かつたから、其理想は實現せられなかつたやうです。お終焉まで其頃十一圓ばかりの家にお

出でした。或る時は貸家捜しをなすつた事もありましたが、遂々それも果たされませんでした。然し決して詰らぬ外見を張る事は好かれず、玄關など少しもお構ひなかつたのです。衣食住の三つは到底西洋人に叶はないと、常にさう云つて居られました。着物も別に美麗いものを着るのではなく、時には隨分亂暴なものを引かけてお出のやうでした。

旅行は好きでしたが、御承知の通り食道樂の方で家でもお菜が二品三品では承知が出來ぬ位でしたから、旅へ出ても食物に困るとのお言葉でした。それでも關西の方へ行かれた事もあるし、一番遠きいのが佐渡が島、其れから東京附近へも一寸々々お出かけなすつた。旅中、田舍の食物に就ては、隨分おこぼしになつてゐたやうです。然し餘程食ひ意地の發達してゐたものと見えて、大抵のものはまづい〳〵と云ひながらも、お食りにならぬものはないやうでした。何日やも牛肉のローズて飯を食うのと海苔で茶漬をかき込むのとが一番甘しいと、さうお仰つた事があります。

原稿をお書きになる時は、何時と云つて定つては居なかつたやうですが、まア大抵は夜分でしたらう。時には朝お書きになるのを見かけんでもありませんでした。

お子供さんに對する先生の態度ですか。さうですね、世の常の親が兒に對するとは、餘程異つて居ました。抱くとか撫でさするとかは滅多になさつた事はなく、まア何方かと云ふと構はぬ方でしたよ。然しさうかと云つて、決して不親切なと云ふ譯ではなかつたのです。自分でも其う云つてお出でしたが、子供に對しては親のなすべき事丈したならば、それて充分だ、なてさすつて甘やかすのは、決して賛めた事ではない。殊に來客があつた時など、子供が客の前へ出て菓子を強請るのを非常に嫌はれたのです。其れに就けて、或時湯屋に行つてお出ると女湯の方て子供が八ヶ間敷く泣き出した。すると先生大聲上げて怒鳴り付けなすゞた事がありましたさうです。其廢風に子供は一躰にお好きの方ではなく、二階で原稿をお書きになつて居ても、下てお子供衆がお泣きになると、どん〳〵下りて來て時によるとお叩りになるやうな事があつたのです。

お子供衆には、最初弓之助さんと云ふがお生れなすつたのですけれども、生れて間もなくお亡り、其次に女の子さんが三人、之れには先生も少々力を落してお出でのやうでしたが、一番後で夏彦樣が、お出來なすつた。此時分には最初とちがつて、大分お可愛がりなすつたやうでした。

柳川春葉氏談

紅葉先生は、至つて御親類の少ないお方でした。

兄弟は無論の事、吾々のやうに伯父伯母だの從兄弟だのと云ふ方が、お有りでなかつたので、總ての事を打明けて親しく談り合ふなどの事は殆ど無かつたやうに思ひます。唯だ妻君の方の御親類に當る人、即ち芝の樺島と云ふお醫者樣がありました。其の方が折々見える、其外に伯父樣と伯母樣とが御近所にあつて、其の方とは始終往復してお出でした。が、此れは尾崎家との交りて、先生とのお交りては無かつたのです。要之人が兄弟、親戚と談合ひ交際するかはりに、先生は之れをお朋友となすつだのです。

先生の友情に厚かつた事は他の方からもお話があつたでせうが實際吾々此れまで隨分多くの人とも交際つて見たが、先生ほど友人、門下に厚い方は、殆ど見かけぬやうです。之れ一は先生が前に云つたやうに親類緣者の少い孤立の方であつた爲めでもありませうが、私の考へるには、決して其ればかりではない、否な御親戚はお有りにならうが、なるまいが依然朋友には厚かつたでせう。隨分人の事にはよくお世話をなさつたのです。吾々所謂十千萬堂で敎へられた同人共が、時折喧嘩いさかひをする、それが一番先生の打擊らしく其樣な時に一番厭なお顏をなさる、始終一人ではいかぬ、なんでも一緒になつてやれと仰つたのです。

此れは世間でもよく知つて居る事ですが、吾々に對しての態度は、實際嚴しくもあつた。或者は鞭と繩とで敎へるとさへ言つた程ですが、其れは皆な吾々を思ふ誠から出た嚴しさで、若し吾々が子を持つたら、此麼もあらうと思ふのでした。だから吾々は寧ろ先生のお子供さんよりも、可愛がれたやうに思ひます。ですから、お亡なりになる時も、遺言、葬儀、財政等一切の事を、御親族、朋友のお方と一緒に吾々も立合つて、如何なる場合も除外せられなかつたのです。

て、お葬儀の際にも、人に助けられると云ふ境遇の人が死んで、彼は氣の毒だから世話してやらう、行つてやらうと云ふのとは全く反對に、先生は人を助け世話したお方ですから、あゝ云ふ風に大勢集まつて、其れが皆一緒に立働いて何くれ世話をしました。此れは常に自分でもお仰つてゐた通り、先生の生涯が或るものを敎へて居たのではあるまいか。

其う云ふ風でしたから、お家にお客の多かつた事は實に夥いもので、私は十幾年お家に居てよく知つてゐるが、一日に十人位の來客の無かつた事はありません。遊びに來る人。用事のある人、殆んど引切りなしでした。さうかと云つて、先生は唯優しいと云ふばかりではなく、隨分圭角のある方て、一方敵も多かつたのです。一度厭な事でもあつたものとは、斷じて交らぬと云つたやうな風て、人の處へ此方から行つて、萬邊なくお世辭を振蒔くなどの事はなさらなかつたやうてした。

癇癖は隨分强い方で、新聞の原稿など差迫つたのを忙しくお書きになる時、ふとした事からついお叱りを受けることがある、妻君は無論の事、とばちりを喰つて吾々も散々やられる事もあつたが、其時來客となれば、すぐ治まる、やれ〳〵と皆んなが息を吐くのでした。客は隨分歡待する方て、如何にお忙しい時でも、お引留めになるのが常でした。其樣な風に來客の多いため新聞の原稿が遲れた事もあつたやうです。

晝間は來客にさまたげられなさるので、筆をおとりになるは多く夜分でしたが、其の爲め勉强も思ふやうになさる暇はなかつたのです。原稿をお書きになるのは、大抵夕飯が六七時頃に濟んだ後——先生は極下戸てしたから、晩酌の五勺位もよく廻つて、お酒の後には必ずお熟睡になる、其一睡眠二時位——お起きになつてからなんです。だから時によると、朝の五時頃まて筆を取り續けて居なさる事は珍らしくなかつた。其れから、お眠みになるのだから、どう

しても目醒は十一時、十二時になる事もあつたのです。

吾々のやうな仕事をしてゐるものは、誰れでも夜がよく筆が進むと云ふのですが、吾々の徹夜するのは、期日に迫られて仕方なしにやる位のものです。然し先生は十年一日の如く夜更しして書きになつた。此れが一つは其の健康を害した原因でせう。

其れから先生は又遊び事に趣味をお有てして、鐵砲、玉突、寫眞、大弓、種々なものをお試りてしたが、碁と將棋とはどうしたものかお嫌ひでした。凡て茫然机の前に座り込んで考へて居る事が一番お嫌で吾々がお書齋に出入してゐる頃、一番お閑暇な時がお習字です。だから若し先生が手習して居らつしやるのを見ると、其のお暇な事が推察されました。

お好きな事で、一寸異つて居るのは錢湯好の事です、思ひがけぬ時、ふいと手拭とシャボンを持つてお出かけになる。其れは度屹筆の進まぬ時とか、何か倦さいだ時なのです。

其れから日常生活の上で、一番六ヶ敷かつたのは食事です。食事に就けては隨分苦心もなすつたやうだし、面白い事もありました、外では什麼であつたか知りませんが、家でも御飯時になると、それ〳〵覆倒るやうな騒ぎでしたよ。ものが不甘い時には妙な注文が出る、其れで未だ嘗て甘いとお仰つた事はありませんでした。偶〳〵一つ面倒くさくなつて二進も三進も行かぬやうになると、外へ飛び出して御飯をお認めになるやうな事もあつたのです。其れが別に贅澤なものをお求めになるのではなく、大根漬でも甘しければ可いと云ふ主義、唯だ甘いと云ふ程度が非常に六ヶ敷かつたのです。時折つまらぬ料理やなどへお上りになると、此れは家の料理よりも不甘いとお仰る事がありました、實際其れ位お家では料理の事も行届いて居たのでせう。

先生の道樂と云へば、多い中で一屹長く續いたものは、且つ一番熱心におやりになつたものは矢張り大弓でした。寫眞も隨分熱心の方でしたが、器械のいゝのと理屈以外、其の伎倆に至つては案外上手でなかつたとの話でした。

對膳嘲妻

吾妹子も古ひにけりな茄子汁

（紅葉句帳）

尾崎紅葉完

明治文豪傳之內

尾崎紅葉

明治四十年九月十五日印刷
明治四十年九月十八日發行

編輯兼發行者　東京市日本橋區蛎殼町一番地　堀野與七

發行所　東京本郷八十八番
文祿堂書店
振替貯金口座六六八二番

發兌元　東京市日本橋區博正町一番地

印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

不許複製

定價四十錢

久留島武彦先生著　鏑木清方先生畫

宮内省　お局生活

美本全一冊定價五十錢　郵税六錢

九重の錦深き宮中にお局と呼ふる、典侍、掌侍、掌侍、命婦、掌命婦の方々が、お部屋と稱する、御服掛、御膳掛、雜仕等の狀態を、如何して斯る事をもと、驚かれんまで、いと詳に紹介し長き邊りの御摸樣も、洩れ承まはるまゝ拜敍せる、世にも尊き珍書なり。

川上眉山先生序　各京門名家競技製作
山田旭南先生著　安田親彦先生畫

珍說　草花物語

美術印刷繪畫數種挿入一冊郵税共一圓

草花に關する口碑傳說を幾多の歲月を費して諸國に之を求め捜に愛度編成せられぬ露なり洩れん魔しき筆に、燃なる說き、烈か描き、怪異を點りし、孝子、俠僕、名匠、高僧の談話、血あり、情あり、涙あり一讀百嘆、只々其奇に打たるべし。

東京　日本橋　文祿堂　振替貯金六六八貳

空前絕後の美書

夏目漱石先生　島村抱月先生
上田　敏先生　馬場孤蝶先生　序

米國文豪ポー氏傑作集

天馬桃太纂譯

文祿堂發賣

コナン、ドイル氏曰く　今汝は如何なる短篇を撰ばんとする乎、汝は强健を要する乎、新奇を要する乎、簡潔を要する乎、興味の强烈にして印象の上に辛辣なる印象を生ずるものを求めんとする乎、然らばポーに行け、ポーは實に此等の有らゆる長所を有せり、予は信ず、ポーが絶世の創造的短篇作家なる事を彼の偉才あるモオパッサンと雖もポーの如き創造的天才を有せず

ギルフィラン氏曰く　ポーの物語は皆鬼氣人にせまり奇想天外より來る　上田敏氏曰く　ポーは米人にして歐洲の文學に非常な影響を與へた人である實に天才と言はうか鬼才と言はうか驚くべしだ

本集收むる所、淺野馮虛氏が畫なほ鬼氣の身に迫るを覺えたりといふ「黑猫物語」を卷頭に置き、其他何れも有數の傑作のみを集め、附するにコナン、ドイル、アンデルゼン、ヒューミラー、ナサニエル、ホウソーン、スーヴェストル等の名著を以てす。露佛文學の粗漫と淫靡とに飽ける者よ、來たつて英文學の眞趣を味へ！

遲塚麗水先生著

紀行文集

露分衣

印刷中

諸大家自選文集 現代日本之思想界

學術界及び思想界に於ける先進大家たる

坪内文學博士　南條文學博士
黒岩　周六氏　坪井理學博士
井上文學博士　丘　理學博士
元良文學博士　三上文學博士
竹越與三郎氏　有賀法學博士
桑木文學博士　佐治　實然氏
德富猪一郎氏　海老名彈正氏
島田　三郎氏　姉崎文學博士

如上の各位に就き、其高落中より最も其人自身の意に適したるもの一篇の自選を乞ひて、之を集錄し以て現代日本の思想を總括せり。發行に臨み更に誌で各大家に謝し併せて江湖に稟告す

東京日本橋區檜町一
振替口座六六八二　文祿堂

美本全一冊　二圓五十錢　郵稅十錢

木村鷹太郎先生著

眞善美

健筆を以て聞えたる木村鷹太郎氏の文學。藝術。哲學。政治。教育。宗教。歷史。兵事。等に關する論文美文を纂めたるものにして其文章や春風の駘蕩なるあり秋骨の稜々たるあり本書の該博なる智識を以て學び明晰なる思想力を錬り優美なる精操を養ふ、近來稀有の好著也

美本　定價一圓
一冊　送料十錢

東京日本橋區檜町一
振替貯金六六八二　文祿堂書店

大町桂月先生著

第一 筆のしづく 全一冊

定價四十錢
郵税六錢

桂月先生の才筆當代に超絶せることは今更説くを要せざる所加るに才情人を刺し才思涌くが如し。錦心繡腸發して流麗なる**美文**となり、痛快なる**論文**となり、**紀行**となり、**傳史**となり、**隨筆**となる、先生の筆のしづくはやがて文壇の花也、珍也。世上讀書の味を解し給ふの士、座右に一本を備へ給へ。

目錄

○閑夜
○水戸觀梅
○馬野山
○古城陟
○赤門文士
○我國道德の過去及び將來
○學生風紀と主義
○所謂勿れ主義
○臨風なる
○批評一束
○社會
○趣味低き
○藝術を送る
○白河の鯉
○桴牛の洋を送る
○酒瓶
○利根川の一日
○切々錄七則
○日本之武士
○今後の文士
○武士道と教育
○文學と吹に就いて
○制度の
○卽ち
○乙羽を送る
○宣弔四則
○評錄
○宗教哲學及科學
○治文の奇現象
○明堂の
○山介の
○中公の
○鹿之畜像に題す
○夏の蟲
○鹿島詣
○藤原時平
○放言廿二則
○當代文章一六弊
○日本人の大缺點
○人爵なる
○得手勝手なる
○手土産政府
○具なる
○迦讀む
○美的生活と
○余は何ぞや
○文章の無主義
○南山の人物
○竹園
○雜感錄十五則
○關東の梅
○足利尊氏
○當代文章管見
○獨醒錄五則
○乞食根性の養成
○起味の隨落
○獨醉錄十一則
○裸體畫
○みだれ髮を讀む
○佐保姫
○一山百文
○高杉晉作

大町桂月先生著

第二 筆のしづく 全一冊

定價四十錢
郵税六錢

目錄

○藝術主義
○今の讀者
○海の文學
○小說の材料としての狹斜
○內容と外形
○落合先生と國文敎育
○明治三十六年の文壇を送る
○文士の社交
○歷史と日本國
○鎌倉時代の三名僧
○今の戰爭
○死生觀
○笊碁の醫
○雨の日曜
○文藝と人生
○漏斗文士
○文學と年齡
○酒と戀と文學
○明治の音學界
○內容と外形
○無宗敎國の文藝
○萩舍遺稿を評す
○尾崎紅葉を弔ふ
○齋藤綠雨を弔ふ
○幸田露伴の近業
○單文錄
○項羽の一生
○社交の要件
○單言錄
○戀愛と結婚
○花柳界の女性
○皇室と文藝
○引用病
○酒と戀と文學
○明治の音學界
○文學と年齡
○書物の聲
○著作界の傾向
○最近の國語問題
○落合直文先生を哭す
○冬の榛名山
○源頼朝
○平清盛
○會津落城
○明治の武勳
○論爭に就きて
○自殺
○主義の抑賣
○冥途手紙
○後家
○酒稅
○馬車馬を送る
○柏木の閑居
○文藝の峠
○混沌時代
○雜滓病
○博識病
○遊戲としての文藝
○雨の日曜

大町桂月先生著

社會訓

全一册（定價四十錢 郵稅六錢）

社會に本譯なかるべからず桂月先生は能文の士也、其專攻する所は文學、殊に國文學にあれども社會の各方面に趣味を有し、奇警なる炯眼よく社會の弊害を洞察し、人情の弱點を看破し、加ふるに能鋒銳利オ情躍動す、文藝、教育、宗教、道德、風俗、習慣等社會一般に關し、例の得意の才筆を揮ひて興味津々たり、讀んで樂むに足り、且つ戒むに足る、社會改良の聲高き今日一本を備へて愛誦し給はざるべけんや、

社會訓目錄

- ○日本の帝室、
- ○社會と個人との衝突
- ○日本の國民と國家
- ○非國家論
- ○平民主義の弊害
- ○罪惡
- ○實業家
- ○學問藝術の獨立
- ○文學の種類
- ○文學之大魔王を讀む
- ○成功せる新聞紙
- ○極樂通信
- ○文學と批評
- ○男女の權
- ○女の世界
- ○日本女性の操
- ○今の紳士の剛門
- ○日本の花柳界
- ○當代の紳士一代記
- ○肚の國民
- ○座花見
- ○新年
- ○日本の國民
- ○世界の縮國
- ○戀愛
- ○肥滿の國民
- ○成り上り者の時代
- ○信用なき社會
- ○社會の美觀
- ○國家間の道德
- ○國民の道德
- ○宗教に就いて
- ○今代の思想界
- ○社會的動物
- ○如何に國民を教育すべき
- ○宇宙の解釋
- ○子の愚
- ○美術國としての日本國民の氣質
- ○日本の出版物將來
- ○少年文學に就いて
- ○明治の歷史家
- ○鬼面文人
- ○女子教育
- ○序跋文學
- ○女子教育の二方面
- ○詩人を嘲る
- ○針小棒大の弊
- ○註文二對
- ○實業
- ○娛樂の選擇
- ○汽車中の誘惑
- ○雜感錄七則
- ○明治人物見
- ○社會の害毒物
- ○留學生の音
- ○小丈夫の國
- ○物の國黑面
- ○現代は腐敗せりや
- ○當代立身訓
- ○文明の賜物
- ○日本の弊
- ○寄附金錄二十七則
- ○醜者の時代
- ○書と悲

文學博士 芳賀矢一先生序
文學士 沼波瓊音先生著

俳論史

美本 全一册定價三十錢（郵稅四錢）

東京市日本橋區榎正町一番地 文祿堂發行

本書は史と名附くれど單に事實の臚列には非ず古今諸俳人の言論の其深玄なる意味を最叮嚀に紹介せり由來俳人は一種の眼を有す物の表面を見ると共に必ず物の側面を見裏面を見其中心を洞觀するが故に其言ふ所活けり躍れり俳人の俳論は歌人の歌論詩人の詩論さては今の所謂文學者先生の文學論と同一視すべからざるなり抑一道の達人の言は其道に於てのみならずして普遍的の價値あり俳論史は俳人の讀むべきものなると共に俳人以外の作家等も讀むべきものなり必ずや偏狹なる主義趣味を脫して豁然として大悟せむ

新式お3三千年間の人物評

近時文壇の大偉觀

高評九版

伊藤銀月君新著

人情觀的 日本史

全一冊 定價五十錢 (郵税八錢)

東京市日本橋區東中通り

文祿堂書店

大阪朝日新聞評すらく『德富蘇峯、竹越三叉、山路愛山と雖も、其奇創新異の造語は血液中に於ける赤血珠の如く、顯微鏡下には點々指すべきに過ぎず、然るに銀月君の文は、殆ど赤血球の結晶の如し』と大町文學士曰く『この書は、竹越三叉の二千五百年の史と共に讀むべき歷史也、後者を屹てる奇山とすれば前者は涓々たる谷川の水也』と、また柏軒松井先生は、編中「琵琶斷魂記」を指して、『千古の名文、平家物語以上なり』と激賞せられたる實に未曾有の珍書也。

目次

内容の制限

神代の大英雄(其時代)

神代の大英雄(其遺勳)

儒教の感化、佛教の感化

武人專權の遠因

琵琶斷魂記

武人專權の美

一種異樣の大人物

群雄割據時代の眞相

暗潮

以上十題目の中に神代以來三千餘年の日本史を包含す

太閤記

伊藤銀月先生著 全一冊 定價五十錢 (郵税六錢)

高評三版

日本一の快男兒秀吉を通じて。自己胸底磊塊の氣を吐き盡したるもの也。其進んで佳境に入るや大英雄が赤裸々の眞相紙上に活躍すると共に著者自ら現前して秀吉と共に擧手投足するの觀あり。序して曰く。此書は衣と食とを以て生命となさず詩を以て生命となすの人に讀まれんことを望むと。蓋し銀月君が火の如く錦の如きの才華を發し盡したる奇文字。人情觀的日本史と並びて一代の珍書也

洋行奇談

赤毛布

定價三十錢
郵税四錢

田舍漢の東京見物を、人呼むで『赤毛布』といふ、本書は當代の貴顯紳士が、不知案内の海外に航して、彌次喜多然たる大滑稽を演ぜし奇談を、蒐集せるものにして大政治家あり、軍人あり、醫師あり、文士あり、豪農商あり、歌人あり、一讀萬笑魂ひ天外に飛びたまふべし。

林遠里のゆて蛸　林遠里の手袋　佐藤昌助の逝走　後藤象二郎の赤面　星野長太郎の鶏鳴　中山知尚のアンコール　喜納治五郎の馬鹿野郎　光明寺三郎の贅澤　星亨の一打撃　△△△△の要質金　△△△△の片々足　小此木新六郎の聾隆話　河村純造の瓜哇人種　柴田耕一の印度人種　海江田信義の舌切雀　丸山作樂の赤裸々　石黒忠悳の越中褌　大山巖の漁布見物　大山巖の標本　久保田米僊の俊寛　荒木虎三郎の擬ひ洋人　荒木虎三郎の臀肉　金杉英五郎の生命代　高崎正風の尻叩き　山根正次の種痘論　酒匂常明の非常呆痴氣　西園寺公望の鏡割　仙波太郎の答癸　福島安正のバタ喰ひ　本野一郎の日本服

新赤毛布

定價二十錢
郵税四錢

伊澤信二郎の蒲燒　下田歌子の訪問　佐々木忠次郎の日本服　田中正平の註文選ひ　三輪信太郎の便所案内　加藤時次郎の綱渡り　入澤達吉の寢蟹紛失　橋口眞右衛門の芝居案内　鳥尾小彌太の荷代　吉松駒造の酒合戰　八戸欽三郎の奇答　小島浦三郎の馬車賃　岩下清周の失筆談　澁澤榮一のコック　飯塚茂太郎の學友　長岡護美の觀月　近衛篤麿の泥の上人　山縣有朋の鳥屋　曾禰荒助の鰹拾ひ　磯部四郎の古洋服　石渡敏一の求婚廣告　寺井力藏の盥漱水　龜井茲明の書籍代　林忠正の思惑選ひ　神藤才一の答禮　森木正太郎の腰掛往生

新赤毛布　金蒔絵の手箱　船中の美人と醉漢　禁喫煙　大自慢紳士　家があるく〳〵　裸體の狂奔　新世界の浴みとばこんなものか　自宅不分明　寶嬉の一驚　西洋人は寒いことを知らぬと見える　エレベートル中の一夜　瓦斯を吹き消す　血染の褌　子爵の今羅漢　舞踏會より除名さる　千法の紙幣　て尻を拭く　娼樓の大騒動　洋曲の一ツトヤー　五人前の料理を一人で　グランエストマー　〇〇侯爵　飯を炊く　溝へ頭を投ず　汽車中の大便　佛人は日本語が話せる　便器中の黄金佛　令嬢の激怒　黑奴の面の惡さ　湯屋はどこか　貴夫人の寢室へ飛込む　栗て腹を肥す事三日　裸體の角闘　小便の驅走　愛兒桑門に入る　褌で顔を拭く　公爵號の三鞭酒

附錄　土耳古風呂　印度の蛇使ひ　博物學者の失策　ありがためいわく　トンネル中の蜜柑　汽車の飛乘り　眉毛を剃り落さる

泰西列國の劇壇にフワース（戲劇）ありコメディイ（喜劇）ありフワーシカル、コメディイ（劇戲的喜劇）ありコメディイ、イン、ヂスガイス（僞裝喜劇）ありハイ、コメディイ（高等喜劇）あり。

是等各種の喜劇は、能く悲劇と相駢馳して劇壇を賑はせるに係らず、我邦劇壇を顧みれば、舊劇中に『盧生の夢』の如き『花暦八笑人』の如き『膝栗毛』の如きフワースの一種あるのみ、新劇中に『戀の病』の如き『夏小袖』の如きモリエルの不親切なる翻案あるのみ。

是れ興正の喜劇は、人性の性癖弱點を登場人物に權化せしめて、クスグリの無理笑ひを看客に強ひず、涙を通しての無邪氣の笑ひを看客に贈らざる可らざるが故に、脚本演技共に門戸に入り易きが如くにして、其の堂奥に達し難きが爲め也。

是れを泰西列國の喜劇に見るも、上はアリストフワニス。プロータスよりモリエル。セキスピヤア。レッシング。ジョンソン。ゴールド。スミス。シエリダン。下はショウ。トルストイ。ピネロ等の脚本中眞正のハイ、コメディとして賞讃に値す可きもの能く幾何ありや、而も我邦の新舊劇中僅に舊式不完のフワース五六種に過ぎざるに較ぶれば、實に雲泥の差も啻ならざる也。

此時に當り太郎冠者益田太郎氏は、頻りに創作の喜劇鴛鴦亭、ハイカラア、正氣の狂人、玉手箱等を出して、文壇並に劇壇に貢献す、氏に取つては些末の餘技ならんも、吾文壇並に劇壇に取つては實に氏の力を多とせざる可らず。

玉手箱は上下二幕三場にして、其梗概は文學士本野桑雄、花野春助の兩人共に飛

高評再版

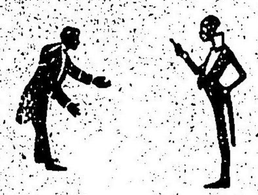
美本全一冊定價參拾錢

ET-4N54

鳥井家の令嬢百合子に戀し、互ひに友人杉山ドクトルの智惠を借りて妨害運動を試み、本野はドクトルより嘔の藥を得て吃りの直る秘藥と花野を欺き、花野直接結婚申込みの場に主客令嬢嘔み責めに逢ふの失敗あり。第二幕花野は本野の復讐せんとして、ドクトルの智惠を借り、本野と百合子を互ひに嫌なりと欺き紹介して百合子本野大喜に話し合の可笑味あり、兩文學士共に此戀に失敗して百合子ドクトル結婚の發表に終る。是を脚本として一讀するも哄笑の續發を禁ずる能はざれば、是れを舞臺に演じて看客の大喝喝采を博するや必せり。

唯餘りに巧みに舞臺面の配合と登場人物の取合せに注意し過ぎたるの感あると、戀に對する人性の弱點を兩文學士の孰れにも充分に發揮せざりし點を遺憾とするも是は望蜀の慾のみ、飛鳥井家客間の場に嚴が現時青年の惰弱を叱咤するが如きは、矢野次郎氏をモデルにせしやの風評あつて、眞に痛快を極め、氏の傑作ハイカラアに次て我邦フワース中の上乘なるものといふ可し。余輩は太郎氏の實業界に盡瘁さるゝの餘暇益々模範的喜劇を創作し我邦劇壇の喜劇の盛んなる猶泰西のそれの如くならしむるに一臂の力を添られん事を切望して止ざる也。

（中央新聞批評）



78
88

085006−000−5

78−88

尾崎紅葉

松原　至文／著

M40
DBB−0437